
赤き龍の異世界の旅

フォック

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤き龍の異世界の旅

【Nコード】

N9843L

【作者名】

フォック

【あらすじ】

自分にはなにがいけないのか？そしてどうしたらいいのか？辛い過去や悩みを自分で抱え込むある一匹の作者リザードン、フォック、彼は自分探しと自分を変えるため旅に出る、これは作者であるフォックが自分を探すために旅する物語である

この物語はフィクションです。作者の想像で書いています

旅立ち（前書き）

どうも、フォックです。

最近色々と自分の中では悩みや友好なども大変なことになっていて、自分にもどうしたらいいのかわからない感じです。この物語は自分の想像というか俺自体が小説に出て、自分探しをしていきたいと思っています。色々と不安とかもありますががんばって行きたいと思います。ではどうぞ！

旅立ち

わからない

俺は何を求めればいいんだ

何を求める

何を

……

?????「…はっ！」

俺は目を覚ました

?????「はあはあ…夢か…」

部屋にはパソコンやポケモンの人形（いわゆるドール）が飾ってあって、テレビやビデオデッキ、さらにはMDコンポが置かれている

ここは俺の部屋

?????「ふわあ…」

俺はあくびをしながら部屋を出た

……

洗面所に向かった俺は顔を洗った、鏡には俺の姿が映し出した、龍のような顔、そして翼、そして逞しい体にしっぽの炎、クリーム色に染まった大きい腹、そこ！メ。。と言わないでね、そう！ポケモンのリザードンだ、俺はフォック、小説作者であって異世界を見ている監視者といったところかな？ここは俺の家で、世界の間にある空間の世界、まあ俺の想像の世界だけどね（汗）

家は二階建ての家、赤い三角の屋根で壁も赤くてオレンジ色の壁色、まあそんなところかな？俺は食事を済ませてから二階の俺の部屋に行きある準備をした

……

フォック「うーん、これは持っていった後これも」

俺は準備をしていた、何の準備かって？旅の準備をしているんだ、なぜ旅に出るって？まあ小説だしね、それに目的があるんだ、それは相手を傷つけてしまうということと自分の修行ってことかな？理由は俺は小説の作者でも感想を送ってるけど、その中に相手を傷つけてしまうことがあって逆に俺自身を追い込むことになるため、自分の修行はそのためと後は少し剣の修行をしないといけないため今回旅することになった

これはファンフィクションです

……

フォック「できたーさあて行きますか！」

俺は青いスカーフを首に巻き、腕に星のブレスレットをつけてさらにリオレウス（普通）の素材から作ったリュックサックを背負い玄関から翼を広げて飛んでいった、青空と太陽が輝き、俺をまぶしく映し出す

フォック「ふう〜気持ちいい〜」さあて、最初は何処から行こうかな？…まずはポケモンの世界のシンオウに行ってみよう」

俺は翼を広げて空間に開いたゲートから入っていった、数分後ゲートは消えていった

旅立ち（後書き）

ブログになりましたが、実際の所はファンクションなので実際的是ありません、でも大体実際のはあるのはありますが、それはご想像にお任せします（汗）次回はシンオウにスポットを当てていきます。この小説を書いて自分探しと自分の努力できるようがんばっていききたいと思います。

ひとりぼっちと怒り（前書き）

どうもフォックです、ついにシンオウに突入します！今回は新たに仲間が出来ます。

ではどうぞ

ひとりぼっちと怒り

シンオウに來た俺はまずシンジ湖に降り立った

フォック「んゝ空気がうまい」

俺は新鮮な空気を吸いスッキリした感じだ

フォック「それにしても俺の分身は大丈夫かな？」

と、この地方を冒険している、俺の分身のことを思い出す

フォック「さて次は何処に？ん？」

なんかさわがしいな

俺はそのさわがしいところに行った

……

フォック「なっ！？」

そこには

????「待てー！！」

????「助けてー！！」

イタチみたいなポケモン、ザングースと猿みたいなポケモン、ヒコザルだった

フォック「ヒコザルがずいぶんボロボロだけどなにかあったのかな
？もしかして…」

俺はあることを思い出した

……

俺はいつもアニメとかをみていた、その中で同じシーンがあった、まさか！？あの子みたいにするわけにはいかない！

助けなきゃ！！

俺はすぐにヒコザルとザングース達の後を追った

……

ヒコザル「うわっ！」

ヒコザルは転んだ

ザングース1「さあ、観念すんだな」

ザングース2「お前はもう逃げられないぜ！」

ザンゲース達がヒコザルに迫る

ヒコザル「た…助け…て…」

ザンゲースが爪をかざしたその時

フォック「光の剣雨！！」

するとザンゲース達の頭上から光の剣が降り注ぐ

ザンゲース達「ぐわあああああああああああああああああ
あああつ！！！！！！！！」

ザンゲース達は光の剣の雨を受けて目を回して倒れていった

フォック「ふう…余計なトラウマ増やさないでよ」

フォックが剣を鞘に収めた

フォック「ねえ？大丈夫？」

俺はヒコザルに近づく

ヒコザル「うん、ありがとう助けてくれて」

すると俺は笑顔で

フォック「いいんだ、襲ってきたみたいだったから、それより君は
一人なの？両親は？」

俺はヒコザルに質問した、するとヒコザルは

ヒコザル「僕は一人なんだ、両親は僕が生まれた時に死んで、僕は一人で生きてきたけど」

フォック「けど？」

ヒコザルの目に涙が出ていた

ヒコザル「僕、他のポケモンにいじめられて…さっきのザンゲースだって僕を襲いかかるうとしてて（泣）」

ヒコザルの涙は止まらなかった

フォック「俺もそうだよ」

ヒコザル「!？」

俺は続けて話した

フォック「いつも一人な感じで、俺は精神とかも色々わからずに知らないことばかりで色々辛いんだ、悲しいのは君だけじゃないよ」

俺は何も知らない、色んなことが、なぜそうなったのか？なぜ傷つけてしまったのか？何処が悪いのか？それ自体俺はわからない、相手を傷つけてしまった、それは俺の何処が悪いのか、誰も教えてくれない、そんな感じ、嫌いなのか？嫌なのか？それさえわからない、でも気持ちはわかる、やっぱり辛いのは俺も同じだから

ヒコザル「そう…なんだ…」

フォック「でもきつとがんばれば信じる道はあると思う、今は無理かもしれないけど」

今は無理かもしれない、なら少しずつ理解していこう、どうしてこ
うなったのかを、理由はわからないけど、わからないものはもうい
い、わからなくていい、そう思ってもやっぱり不安

……

それから数時間後

フォック「俺はもういくよ、君はこれからどうするの？」

俺はヒコザルにこれからのことを質問する

すると

ヒコザル「ねえ？付いて行っている？僕も理解したいことがある、
それに一人じゃ不安だよ」

と、仲間になりたいと言ってきたのだ、俺は

フォック「うん、それじゃあ一緒に行こうか」

俺はヒコザルにOKを出した

ヒコザル「うん、よろしくねフォック」

フォック「うん、こちらこそ…それと名前を付けたいけど？」

するとヒコザルは

ヒコザル「うん、お願いしていいかな？」

ということだった、俺はとりあえず

フォック「ネツカはどうか？」

俺はその場でヒコザルにニックネームをつけた

ヒコザル「うん、僕この名前気に入ったよ♪」

どうやら気に入ったようだ

フォック「そんじゃ行こう、しっかりつかまってるね」

ネツカ「うん！」

俺はネツカを乗せて空を飛んだ

ひとりぼっちと怒り（後書き）

ネツカ「初めまして、ヒコザルのネツカです」

まあとりあえず最初の仲間だけど、まあヒコザルにはちょっとした理由みたいなものがあるんですよ

ネツカ「ポケモンアニメの？」

うん、だからヒコザルは完全にははずせないんだよ

ネツカ「そうなんだ、フオックも辛かったんだね」

うん、でもこっちはゴウカザルになってもうか暴走の制御できたからよかったよ

ネツカ「僕も暴走しないように気をつけなきゃ」

いや俺がザングースやっつけたから大丈夫だと思うよ（汗）

ネツカ「そうなんだ（汗）」

次の世界へ（前書き）

ネツカ「このタイトルは？」

そのまんま次の世界に行くよ

ネツカ「でもすぐってわけじゃないよね？」

すぐじゃないよ、まずはある場所へと向かってから次の世界にね

ネツカ「そうか、じゃあ話に入ろっ」

どうぞ

次の世界へ

テンガン山山頂・やりのはしら

ネツカ「ここがやりのはしら…僕達が入って大丈夫なのかな？」

フォック「大丈夫、俺は時の力あるし、許可を取ってあるから」

ここはテンガン山・やりのはしら、ここには色々とね（詳しくは怒りの龍と冥界の龍、異次元の戦いで）

ネツカ「でも静かだね」

そう、ここにいるのは俺とネツカだけ

フォック「ここはディアルガとパールシアの二匹のポケモンの聖地なんだ、それにここから上にはアルセウスがいる、まあここはアルセウスの許可を取ってあるし、それに世界の監視によく訪れるから」

まあ俺の時の力だけど、ディアルガによって力をもらったけどね（汗）

ネツカ「そうなんだ、じゃあそろそろ行こうよ」

フォック「そうだね、それに俺の分身もここに来る予定だから、離れたほうがいいね」

俺はテンガン山・やりのはしらを後にした

……

シンジ湖

フォック「さて次はテリウス大陸に行こうかな」

ネツカ「テリウス？」

ネツカは聞いたことがない大陸に疑問になってるな、じゃあ説明しよう

フォック「テリウス大陸は正と負によって一度人は石になってしまったけど、今は大陸は救われて平和になった大陸なんだ、ここは武器や兵士、それに龍や鳥や獣に化身する種族がいるんだ」

ネツカにはわからないけど他の人は知ってる人と知らない人はいるだろう（スマブラのアイクなら知ってるとは思っけど）

ネツカ「でも襲われない？」

すると俺は

フォック「大丈夫、あっちの世界のことはわかってるから行こう、俺が守ってあげるから」

俺は…

誰も傷つけない

誰も…

死なせたくない

誰も…

フォック「そんじゃつかまってて、行くよ!」

俺とネツカはゲートに飛び込んで行った

次の世界へと

次の世界へ（後書き）

ネツカ「次の世界、楽しみだな」

ファイアーエムブレム
まあFEの世界だけだね

ネツカ「でもたしか色んな大陸に分かれてるけど？」

たしかにね、舞台も大陸がバラバラだけど（続編の大陸もあるけど）

ネツカ「次回はどんな風になるんだろう」

そこでなんだけど、別の世界つまり他の作者さんの世界にも行こう
と思うんだ、色々と見ていきたいから

ネツカ「つまりここ（FEやポケモン）だけじゃなくて？」

同じポケモンの世界などなどは色々違うところがあるからね、とい
うわけで募集しています、ぜひ自分達の世界に来て欲しいという方
はメッセージでお願いします、それでは

傭兵団の皆で（前書き）

またまた仲間が増えます

ネツカ「えっ！？増えるの！？」

うん

ネツカ「一体誰なの？」

ヒントは剣豪と司祭だよ

ネツカ「その意味は？」

考えてみて

ネツカ「わかんないよ（汗）」

たぶんF E やってる人ならわかります、それではどうぞ

傭兵団の皆で

俺達は次の世界の大陸、テリウス大陸にやってきた

テリウス大陸はそれぞれの国がある、その中で大陸の中心なのはベグニオンという国だ、すべての元凶だった国だが今はあることによって世界は平和になっている、ラグズとベオクの二つの種族が共存して互いに気遣っている、かつてここはラグズとベオクがそれぞれ仲が悪い関係もあった、ある惨劇によってだがある者のおかげでなんとか二つの種族は交流を深めている、ちなみにラグズとベオクの説明をしないとね

ラグズとベオクとはこの大陸にいる種族のことで、ラグズは獣や鳥など動物に化身して戦う種族でそれぞれ種族が違う、別名力の民とも呼ばれる、種族はそれぞれ、獣に化身する獣牙族^{じゅうがぞく}、鳥に化身する鳥翼族^{ちゅうよくぞく}、龍に化身する竜鱗族^{りゅうりんぞく}の3種族になっている

獣牙族はおもに獅子、虎、猫、狼が獣牙族だ、鳥翼族は鷹^{からす}、鴉、鷲の3種だが、氣質がまったく異なっている、最後に竜鱗族は黒鱗、白鱗、赤鱗の3種でめったに国から出ることはほとんどない

ベオクは別名、知恵の民と呼ばれ、武器、道具、言葉を巧みに用いて繁栄した種族で人間とは対して変わらない種族

国は全部で7つある、さっきいったベグニオンもその一つでテリウス大陸でもっとも大きな国、他は北西にはクリミア、北東にはディン、大陸から西に獣牙族の国ガリア、大陸の中央はセリノスの森という森がある、大陸から3島の島の東の2島には鴉の民の住むキルヴアス、3島の西の島はフェニクス、南西の島には竜鱗族が住むゴ

ルドア、あとはデインの東にある砂漠を越えた幻の王国ハタリがある、あるかどうかはわからないけど（汗）

まあ平和でよかった

ネツカ「ここがテリウスなんだ、すごく自然とかあっていいところだね」

フォック「まあ、ここはポケモンとは異なるからね、じゃあ何処に降りようかな。あつ！こんなところに砦がある！しかもグレイル傭兵団の砦だ、あそこに降りるよ」

俺は指したのは砦だ、ここはあのアイクが団長の砦、グレイル傭兵団の砦なのだ、俺達二人はそこに降りていった

……

ネツカ「誰もいないね」

そこには誰もいなかった

フォック「留守みたいだね」

どうやら留守のようだ

すると声が

????「アイク、いるか？」

男の声だ

ネツカ「誰だろう?」

フォック「とりあえず見てみるか…はっ!」

俺は人間になる、人間の俺は赤い髪で短髪、体型は中肉中背で背中にはリザードンにもあった翼がついていた、服装は赤色でズボンは白（まあ中肉中背は余計だが）俺は外へと出た

…

????「ん?誰だ?...つて!?フォックじゃないか!？」

外に出た俺とネツカがある人物と出くわした

水色の髪に猫のような水色の耳、オレンジの服装にしっぽがあった

フォック「なんだライじゃん?アイクならここにはいないよ?」

こいつは獣牙族のライという青年で、アイクのよき親友、まあ俺は知ってるけどね

ライ「そうか…ならいいか、それにフォックの肩にのっている猿はなんだ?たしかポケモンのヒコザルだったな」

そうだよ、まあ知っているのはアレだからか（汗）

フォック「うん、ネツカっていうんだ、俺がつけたヒコザルの名前

だよ」

ライ「そうだったのか…っていけぬ！？アイクのところになきや！？」

ライがあわてていた

フォック「何あわててるの？」

俺はライに向かって質問する

ライ「実はアイクに用があつてな、探しているんだ」

フォック「それならディシスマのところだと思つよ？あそこにはミストやセネリオにミカヤとサザがいると思うから」

アイクはスマブラメンバーだしね（汗）

ライ「そうか…じゃあ俺はそっちに向かうよありがとな」

そういうとライは猫に化身してものすごいスピードで去った、せつかちなのか（汗）

ネツカ「勢いよく走ったけどあれが獣牙族っていうの？」

ネツカが質問する

フォック「うん、ライは獣牙族で猫に化身する青年だよ、まあアイクとは仲がいい友人だけだね」

俺はネツカに説明した

ネツカ「そうなんだ」

ネツカは納得した、すると今度は

????「アレ？誰かいるの？」

剣を持った少女がいた、紫の髪に白いハチマキを巻き、オレンジ色の服を着ていた

フォック「ん？ワユ？」

????「えっ！？じゃあフォックのだんななの！？」

ワユと呼ばれた少女は驚く

フォック「今は人間の姿だけだね」

そう、今は人間の姿のフォック

ワユ「そうなんだ！じゃあだんなが来たということは…いざ！尋常に勝負！」

フォック「またなのワユ（汗）」

ワユは剣を構えていた、まあ強い人と戦うワユには俺やアイクに勝ちたいという目的なんだろうね（汗）

ワユ「いいからいいから」

マジやるのかよ（汗）そんなときに思わぬ助け舟が

????「あつ！ワユさん！こんなところに」

出てきたのは優しい感じの青年だった、明るい茶色の髪に白いローブを着ていた

ワユ「あつ！キルロイさん！」

キルロイと呼ばれた青年が出てきた

キルロイ「はあはあ、本当に疲れますよ…フォックさんもいらしたんですか」

フォック「うん（汗）大丈夫キルロイ？」

俺は心配そうにキルロイを見る

キルロイ「大丈夫です、とりあえずは」

キルロイは疲れたので休んだ

ワユ「まあキルロイさんが来たから傷は大丈夫でしょ」

いや回復のためにキルロイいるの（汗）俺回復できるんだけど（泣）

ワユ「それじゃあ尋常に勝負！」

キルロイ「お、おてやわかにね（汗）」

キルロイが見てるなか俺はワユの挑戦を強制的にやらされた（汗）

……

フォック「はっ！」

ワユ「きゃっ!？」

俺はワユの剣をはじいた、剣は空をきつて地面に刺さった

ワユ「あゝまたあたしの負けかゝ悔しいなゝ」

悔しそうなワユ、だが笑顔だった

ネツカ「すごいなゝワユとかフォックとか」

ネツカは目をキラキラさせながらそういう

キルロイ「まあワユさんはそういう人ですから、それにあれから強い人達と戦いに各地をめぐっているみたいなんだ」

ネツカ「そうかゝだからあんなに強いんだ」

まあ一度ここ（砦）に休むからなゝ（汗）

フォック「さてと、俺とネツカはそろそろ行くよ」

ワユ「えゝせつかく何度も勝負しようと思ったのに」

残念そうなワユ

フォック「何度も疲れさせないでよ（汗）俺だって限度っていうのがあるんだよ（汗）」

限度は限度、色々あるんだよね（汗）

ワユ「そっか…じゃあ暇だから連れてっていいかな？」

えっ！？着いて行くのかよ（汗）どうしよう

すると

ネツカ「そうだね、僕は賛成だよ」

ネツカが承諾しやがった、しょうがないな

フォック「わかった、連れて行くよ」

ワユ「えっ！連れてってくれるの！やった」

嬉しそうに喜ぶワユ

フォック「はいはい、じゃあ行こうか」

そこに

キルロイ「なら僕もいきます、ワユさんが色々心配になりそうなので」

キルロイまで

ワユ「え〜キルロイさん大丈夫だよ♪あたしは平気だよ♪」

いやあんたのそれが心配なんだよキルロイは（汗）

フォック「わかった、じゃあキルロイも行こう」

キルロイ「ありがとうございます」

ワユ「え〜」

文句言うなよ

フォック「まあいいじゃんワユ、せっかくだから、それにキルロイは暇じゃないけど大丈夫？」

すると

キルロイ「大丈夫です」

まあ体調の方もしつかりしとかないと、キルロイは体はなんとか大丈夫だけど、血とかは嫌なんだよな（汗）

フォック「そんじゃ出発！」

俺はリザードンになって新たに二人を仲間に空を飛んだ

傭兵団の皆で（後書き）

なぜかFE蒼炎と暁でも登場したワユ&キルロイです

ワユ「やつほ〜ワユだよ」

キルロイ「キルロイです、よろしくお願いします」

まあ俺から見ればいいカップルに思えるけどね（汗）

ネツカ「まあポジティブな感じだねワユは」

まあ強い奴と戦う感じながら結構テンションいいんだよね（汗）

ワユ「ねえ？次回は何？だんな」

だんなはやめなさい（汗）次回はまだテリウスだよ

キルロイ「フォックさんも大変なんだね（汗）」

まあキルロイも血とかの抵抗なんとかしないとね

キルロイ「ははは（汗）そうだね（汗）」

ちなみにライなんです、なぜヒコザルとかポケモンを知っているのかですが、実はライの中の人がポケモンのジュン（せつかちでなんだってんだよ！？と言っている奴）なのでライをジュンのような感じにしました、わかりますか？

番外編 せつかち少年とライ（前書き）

今回は番外編です。ではどうぞ

番外編　せつかち少年とライ

ここはポケモンと人間の世界

ライ「間違えたか…」

この世界に来たのは、獣牙族のライだ、アイクに用があつてディシスマに行こうとしたが、間違つてポケモンと人間の世界に来てしまった

ライ「とりあえず急がないと」

そついうとライは走る、するとそこから

?????「どいてくれーーーーー!!!!!!!!!!」
「!!!!!!!!!!」

何処かから一人の少年が走ってきた

ライ「わっ!?!」

少年は勢いが止まらずそのままライにぶつかった

?????「いててて、もうゝなんだってんだよ!!!罰金払え!!!」

なぜか意味不明なことを言っていた

ライ「いてて、そっちがぶつかつて来たからだろ!!!（怒）」

ライが怒鳴る

?????「まったく！俺急いでるのに」

その少年はせつかちに見えた、クリーム色の髪に白とオレンジのしましまのシャツを着ていた

ライ「なんだよ、人にぶつかつといて、謝りもしないのかよ（怒）」
ぶつかつたことにまだ怒るライ

?????「こつちだつてな！！ポケモンリーグで急がなきゃなんねーんだ！！」

逆ギレした

ライ「逆ギレかよ（汗）とりあえずさあゝお前名前は？」

ライはその少年の名前を聞いてきた

?????「俺はジュン、ポケモントレーナーさ」

ジュンと呼ばれた少年はエヘンといばつた態度を見せる

ジュン「それにしても…お前…なんか声が俺と似ていないか？」

ジュンはライが自分の声が似ているという

ライ「たしかに声は同じだな…偶然もあるんだな、俺はライってい

うんだ」

ライも自分の紹介をした

ジュン「へえ、ライっていうのか……じゃあライ！俺とバトルしろ！」

いきなりバトルをしかけられた、だがライはポケモンを持っているのか？すると

ライ「いいぜ、俺が勝ったらぶつけたこと謝れよ」

と、約束をするライ

ジュン「のった！その代わり俺が勝ったら謝れよ、そして罰金100万払えよ」

罰金必要ねえだろとつつこみたいところだがライはしかたなく引き受けた

……

何処かの草原

ジュン「勝負は1対1だ！俺はこいつで行くぜ！エンペルト……！」

ジュンが繰り出したのは王冠のような頭に、ペンギンのような姿をしたポケモン、エンペルトだ

ジュン「ライも早くポケモンだせよ……！」

せっかちなためジュンは早くしたいとつずつずする

ライ「あわてるなよ（汗）これポケモンバトルだろ？なんでそんなに急ぐんだよ（汗）」

すると

ジュン「早くしてくれよ！！」

と、早くしたくうずうずしている

ライ「はあゝわかったからうずうずすんなよ（汗）出てきてくれ、ウインディ」

ライが繰り出したのは、犬みたいな姿で四足歩行のポケモン、ウインディだ

ジュン「ウインディじゃ俺のエンペルトにはかなわないぜ！」

たしかに相性ではエンペルトの方が有利だ

ライ「たしかにな、じゃあこちらからどうぞ」

ライはジュンに先攻をゆずった

ジュン「ならいくぜ！！エンペルト、ハイドロカノン！！」

エンペルトはウインディに向かって高水圧の水を吐き出す

ライ「かわせ！」

ウインディはハイドロカノンをかわした

ジュン「どんどんいくぜ！！ハイドロカノン！！」

またハイドロカノンを放つ

ライ「おいおい、反動技を連続でやってどうすんだよ、はあ〜しよ
うがない、ウインディ！かわしながらエンペルトに雷の牙」

ライは冷静にウインディに指示、ウインディはハイドロカノンをか
わしてエンペルトに雷の牙を繰り出した

エンペルトは雷の牙を食らってしまう

ジュン「エンペルト！ならドリルクちばしで反撃だ！！」

エンペルトはドリルクちばしを繰り出そうとしたが

エンペルト「エンペツ！？」

エンペルトは痺れたように動かなくなってしまった

ジュン「マジかよ！？麻痺になりやがった！？」

麻痺により、エンペルトはあまり動かなくなった、雷の牙にはひる
みと麻痺という追加効果がある、それによりエンペルトはひるんで
はいないが麻痺してしまった

ライ「とどめの雷の牙!!」

ウインディは雷の牙でエンペルトを噛み付いた、エンペルトは耐えられずに戦闘不能となった

ジュン「マジかよ!? エンペルト戻れ!! ポケモンセンターに向かわないと!!」

ジュンはエンペルトをモンスターボールに戻して全力疾走で走っていった

一人取り残されたライは

ライ「謝らないでいくなよ(汗)」

と、つつこんだ

番外編　せつかち少年とライ（後書き）

中の人同士のポケモンバトルでした（汗）まあ実は中の人が同じなのでポケモンバトルしてみましたけど、ウインディがなぜライの手持ちなのかというと、同じポケモンにしたらかぶるので、さらに獣牙族なので獣系のポケモンにしようと思い、ライの手持ちポケモンをウインディにしました、次回はあっちに戻って旅の続きとなります

砂漠から再びポケモンの世界へ（前書き）

ネツカ・ワユ「遅い!!」

ごめん（汗）

キルロイ「やっと更新ですね」

まあ更新だけど今回はね

ネツカ「タイトルの再びポケモンの世界へって?」

じきにわかるよ、ではどうぞ

砂漠から再びポケモンの世界へ

俺達は空を飛んで途中のグラーヌ砂漠までやってきた

フォック「ここにはラグズ奴隷解放軍がいるんだよね」

ラグズ奴隷解放軍はラグズの奴隷を解放するために立ち上がった組織の事で、ベグニオン帝国もラグズをまるで奴隷のようにする者がいてそこに立ち上がったのがこのラグズ奴隷解放軍だ、まあ今は皇帝のサナキが色々としてくれるから大丈夫だとは思っけどね（汗）

バサバサッ

俺はボハリングして降りた

ワユ「ふう〜3年ぶりの砂漠だね」

キルロイ「ここに来たのは皇帝の依頼からだっただね」

そう、アイク達もここに来たことがある、すると何処からか

????「ん？フォックじゃん！後ワユとキルロイも！」

????「お久しぶりです」

そこにいたのは二人の人間

まず一人は赤いローブに緑のハチマキを巻いている青年

もう一人は緑の虎耳に緑の尻尾のラグズ

フォック「トパックにムワリムじゃん」

俺がその二人の名を呼ぶ、トパックはラグズ奴隷解放軍のリーダーでそのパートナーであるムワリムは獣牙族のラグズ、まあトパックにとってはパートナーという存在、トパックはベオクだけど魔道の腕はいいので

トパック「どうしてこんなところにいんだ？」

トパックが言ってきた

フォック「まあ実はね……」

俺はこれまでの経緯を二人に説明した

ムワリム「旅ですか……」

トパック「おお！なあなあ！オイラも入れてくれ！」

トパックが旅に出たいと申し出てきた

ムワリム「坊ちゃん、いきなり旅に出るのは」

ムワリムがとめるが

トパック「いいじゃん！どうせ暇だし」

暇という意味で行くのかよ（汗）俺は心の中でつつこんだ

フォック「わかった、なら連れて行くけど？」

そこに

ムワリム「フォック殿、私も同行していいですか？坊ちゃんの心配もありますので」

トパックの親代わりだしなムワリムは（汗）

フォック「わかった、じゃあムワリムもね」

トパック「わーい！」

トパックははしゃぐ

トパック「なあなあ！オイラポケモントレーナーになってみてえんだ！」

ワユ「え？」

キルロイ「それって？」

またポケモンの世界に戻るのかよ（汗）しょうがない…

ネツカ「どうする？フォック？」

フォック「しょうがないよ、まあ場所を変えるだけだけど」

俺はリワーブの杖を取り出した

実はグラーヌ砂漠に行く前に帝都シエネにもよってエルランからリワーブの杖をもらってきたんだよね（汗）なぜか神剣エタルドまで託されたんだけどね（汗）あれはアイクが持っていたほうがよかったと思うけど本人はスマブラの方に行ってるからエタルドをこっちに渡したみたいなので結局俺がもらうはめになったけど（汗）俺、ドラゴニックセイバーあるんだけど（汗）まあいいか

フォック「それじゃあ俺に捕まって」

そついうとみんな俺に捕まる

フォック「行くよ！」

俺達の下に魔方阵が現れ俺達は光に包まれて消えていった

……

シュン

俺達はなんとか別の世界（というかポケモンに世界に到着）

トパック「来たかった！ここに！」

トパックは喜ぶ

フォック「よかったね、でもここはね…イッシュ地方なんだ」

そう！俺はある場所を選んだ…

ここイッシュ地方に！

砂漠から再びポケモンの世界へ（後書き）

ネツカ「イッシュ地方ってまさか!？」

うん、実はブラックとホワイトのどうしようか考えてたんだ、ならこっちでやろうかとね

ワユ「だからここなんだ」

トパック「オイラはトパック、よろしくな!」

ムワリム「私はムワリム、よろしくお願いします」

まあFE多めですけど、次回からはイッシュ地方の冒険になります、まあブラック・ホワイトのアレンジです

パートナーとともに（前書き）

えゝブラックを手に入れましたので早速こちらの方も始動いたします

ネツカ「別の方も忘れてるよね？」

（ギクッ！？）わかってるよ、とりあえずどうぞ（汗）

パートナーとともに

イツシュ地方

その地方の最初の町に6人（性格には5人と1匹）がいた

フォックはりザードンの姿から人間の姿に変える

人間の姿はまず目がツリ目で髪が赤色、もちろん頭にはゴーグルに首には青いスカーフが巻かれている

一行はまずアララギ研究所を訪れた

……

????「ハーイ！あなた達がポケモンが欲しい人達ね」

茶色の髪に白衣を着た女性がいた

????「私はアララギ、ポケモン博士よ」

アララギと呼ばれた女性はこのイツシュ地方の博士のようだ

カントーではオーキド博士、ジョウトではウツギ博士、ホウエンではオダマギ博士、シンオウにはナナカマド博士、そしてイツシュ地方ではゆいいつ女性であるのがこのアララギ博士だ

トパック「それより早くポケモン欲しい！」

トパックはワクワクしたようにしている

フォック「はいはい（汗）すみませんアララギ博士（汗）」

俺は博士に謝るが

アララギ「いいのよ、元気な子みたいだし、それにもう待ち遠しいみたいだから…はい」

そこには俺達5人にために6個のモンスターボールが入ったプレゼントの箱を博士はとりだしてくれた

とりあえず

フォック「俺は…こいつだな」

俺は一つのモンスターボールを掴んだ

えっ？ネツカがいるからもらわなくていいんじゃないかって？たしかにそうだけど新ポケの方もどうなのかわからないのでとりあえずはもらうことになってるので（汗）欲張りに思ってもこれは物語なので（汗）

本当はネツカがいるからいらなと思うていたんだけど、アララギ博士が「せっかくだからあなたも一匹もらっていいわよ、一匹じゃちょっと不安もあるかもしれないから一応ね」と

俺はモンスターボールを投げると、そこから一匹のポケモンが出てきた

でかい目に蛇のような姿で尻尾には葉っぱがついていた

草蛇ポケモンのツタージャだ

まあ俺は蛇は苦手だけどツタージャだけは別だったり（汗）

次にトパックは子豚のようなポケモン、ポカブを、ムワリムはラッコのようなポケモンでおなかの貝、ホタチだったっけ（汗）をつけているポケモン、ミジユマルを

ワユはポカブ、キルロイはツタージャを選んで俺達は出発した

パートナーとともに（後書き）

ネツカもいたから欲張りになってごめんなさい！！

ネツカ「物語だけどサトシみたいにGETというのも」

でもアニメと違って手に入らないから（汗）

ワユ「現実は厳しいね」

まあプレイしながら執筆していきますのでよろしくお願いします！！

カノコタウン〜カラクサタウンへ、謎の団体と青年（前書き）

進むにつれて書いていきます、ではどうぞ

P
S

ここまで進んでいない方はネタバレ注意です

カノコタウン〜カラクサタウンへ、謎の団体と青年

一行はカノコタウンからなんとかカラクサタウンまで来た

そこでみんなはポケモンセンターへポケモン達を休ませた

フォック「大丈夫？ウイア？ワイル？ネツカ？」

ウイアとは俺のツタージャのニックネーム、ワイルは子犬のようなポケモン、ヨーテリーのニックネームである、ワイルはふさふさした毛皮に顔は白いふさふさの毛のポケモン

ウイア（ツタージャ）『大丈夫だよ、僕は』

ワイル（ヨーテリー）『オイラはまだまだ大丈夫♪』

ネツカ「みんな大丈夫みたい」

ゆい「いつネツカだけはしゃべるけどね（汗）ちゃんと日本語で

ちなみに他のみんなのだけど

トパックのポカブはプツカ、他にヨーテリーのヨツテ、ムワリムのミジュマルはホコ、ワユのポカブはエスカ、キルロイのミジュマルはセイル

まあニックネームの方はさておき

フォック「それにしてもイッシュ地方のポケモンセンターはフレンジーショップと一緒になんだね」

そう、イッシュ地方は他の地方と比べてポケモンリーグと同じポケモンセンターとフレンジーショップが一緒なのだ

トパック「いいよな、早く次進もうぜ！」

フォック「お前ももう少し落ち着けよ（汗）」

まあ元気なんだよな、トパックは（汗）

俺達はポケモンセンターにでるとカラクサタウンの広場で何か始まっていた

謎の白いローブを被った奴等がいた

トパック「なんだ？」

その真ん中には豪華な服に身を包んだ少し薄緑の髪をした者が何かを話していた

????「私は^{わたくし}ゲーチス、プラズマ団のゲーチスです」

プラズマ団？

ゲーチス「今日みなさんにお話するのはポケモンを自由にしましょうということですよ」

????「えっ？」

?????「何？」

なんだ？この胡散臭い（うさんくさい）ような演説は、ポケモンを自由？何言ってんだ？そりゃあ自由はわかるけどなぜ？

ゲーチス「我々人間はポケモンと一緒に暮らしてきました、お互いを求め合い、必要としあうパートナー、そう思っておられる人ばかりでしょう、ですが本当にそうなのでしょうか？我々人間がそう思い込んでいるだけ……そんな風に考えたことはありませんか？トレーナーはポケモンに好き勝手命令している……仕事のパートナーとしてもこきつかっている……そんなことはない是誰がはつきりといえるのでしょうか」

それは悪の組織のギンガ団やロケット団のような奴等だと思うけど（汗）俺はそんなこと思ってない、ポケモンだって生き物なんだからそこまでして自由って言っても人は誰も優しいってわけじゃないし、なぜこいつらはそのようにする？なんだか頭が痛くなってきた
ゲーチス「いいですかみなさん、ポケモンは人間とはことなり、未知の可能性を秘めた生き物なのです、我々が学ぶべきところを数多く持つ存在なのです、そんなポケモン達に対し私達人間がすべきことはなんでしょうか」

?????「なあに？」

?????「解放？」

解放と言った者がいた

ゲーチス「そうです！ポケモンを自由にすることです！！そうしてこそ人間とポケモンは初めて対等になれるのです」

んなわけないだろ

ゲーチス「みなさん、ポケモンと正しく付き合うためにどうすべきかよく考えてください、というところで私、ゲーチスの話を終わらせていただきます、ごせいちょう感謝いたします」

ゲーチス達は去った

全員がありえないとかなんとかで色々と話していた

……

トパック「なあ？俺達どうすればいいのかな…ラグズ奴隷が正しかったのか…」

トパックは少し曇らせていた

フォック「そんなことはないよ、あいつらのわけわからない話に付き合ってられない、ポケモン達だってみんなそうは思っていない」

俺とネツカもポケモンの言葉はわかっているためみんなの気持ちはわかる

そこに帽子を被った青年が俺達に歩みよってきた

????「君のポケモン、今話していたよね……」

ワユ「ずいぶんと早口みたいだけど？それにポケモンが話した……
って？おかしいことというよね」

なんだ…こいつ？

????「ああ、話しているよ、そうか君達にも聞こえないのか…
…かわいいそうに……」

俺はわかるけどお前にだけは言われたくないね

俺は少しムツとした

????「僕の名前はN」

Nと呼ばれた青年は自己紹介した

N？意味がわからない名前だな、何処かの某アニメのような名前だ

フォック「俺はフォック」

ワユ「あたしはワユ、こっちの茶色で落ち着いている人がキルロイ
さん」

トパック「オイラはトパック、それでこっちはムワリム、どっちも
まだ初心者のポケモントレーナーなんだ」

N「ポケモントレーナーね……それで数多くのポケモンをモンスター
ボールに閉じ込めるんだ」

何言ってんだコイツ？

N「僕もトレーナーだがいつも疑問に思う、ポケモンはそれで幸せなのかって」

すると俺に近づいた

N「そうだね、フォックだったか、君のポケモンの声をもっと聞かせてもらおう！いけっ！」

そいつは俺にポケモン勝負を挑んできた、出てきたポケモンは紫の体色をした猫のようなポケモン、チヨロネコだ

フォック「ワイア！」

ワイア「任せて！」

ワイアが出てきた

フォック「Nと言ったな？何が目的だ？」

俺はそいつ、Nに言う

N「言っただろ？君のポケモンの声をもっと聞かせてもらおうと」

フォック「なるほどな…でもな、そう思ってる者もいるが…お前は…間違ってるとな！」

俺はワイアに指示を出した

フォック「つるのむち！」

俺はつるのむちを指示

N「ならひっかく」

無表情ながら指示を出すN

フォック「俺がそんな手にひっかかると思ったか？体当たり！」

ウィアはつるのむちでひっかくに当たらないようチヨロネコの身動きを封じてそこからつるのむちからの体当たりを繰り返した

チヨロネコは目を回し先頭不能となった

N「……モンスターボールに閉じ込められているかぎり……ポケモンは完全な存在にはなれない、僕はポケモンという友達のため、世界を変えねばならない」

そついうと去つていった

トパック「なんなんだアイツ！」

トパックは怒っていた

フォック「落ち着け、あの野郎の思つツボだ」

俺はトパックを止める

ムワリム「それにしても一体なんだったのでしょうか？あの謎の集団といい、あの青年といい」

フォック「何か嫌な予感がする……こいつの目を覚まさせる必要があるな」

俺達はポケモンセンターに泊してサンヨウシティへと向かう

カノコタウン、カラクサタウンへ、謎の団体と青年（後書き）

なんかNが2。世紀少。みたいな感じになってる（汗）

ネツカ「でもなにが目的なんだろう？」

ポケモンの自由、なんか嫌でも違う意味の自由に聞こえるんだよね
（汗）

トパック「あいつなんだったんだ？」

わからないけど、まあ気になるからそれは後回しにして次回はサン
ヨウシティに行きます

サンヨウシティ 相性（前書き）

ネタバレ注意です

ついにサンヨウシティまで来ました

ではどうぞ

サンヨウシティ 相性

トパック「ここがサンヨウシティなんだ」

サンヨウシティについて俺達、洋風の建物とかがあっていい

それよりジムのことだけど、ここサンヨウシティのジムリーダーは三人いて、そのうち一人と戦うことになるけど、手持ちによって相性が悪いポケモンを繰り出していく、いわば弱点を突くようだ

でも俺の場合は手持ちにはネッカもいるがだがウイアもいるしな（汗）

一応ジムに参加するのは俺とワユとトパックの三人

ムワリムとキルロイはジムには挑戦しない

まあ無理もないか（汗）

ジムはなんかレストランみたいだった

なんなんだあの建物（汗）ホントにジムなのか（汗）

ジムの前に立っていたのはウェイトレスの緑の髪の青年？だった

とりあえず聞いてみた

????「僕がこの町のジムリーダーですけど君達は？」

フォック「俺はフォック、ジムに挑戦しに来ただけ？いいかな？」

少し間をあいてその青年は

「?????」「はい、それであなた方は最初に選んだポケモンはなんですか？」

そんな質問だった

フォック「俺はツタージャ」

トパック「ポカブだけど」

ワユ「あたしも」

「?????」「なるほど、炎タイプと水タイプが苦手なんですネ、きちんと対策しておいたほうがいいと思いますよ?」

なるほど、弱点で突くってことか

そこで俺達は夢の跡地で鍛えることにしようと提案した

……

トパック「でもなんでそんなこと聞くんのだ?」

トパックにはわからないようだ

フォック「つまり弱点で突いていくってことだよ、つまりポカブの場合は水タイプだと相性が悪いんだ、でもあっちも弱点のポケモンが無いかぎりは下手すると負けるからね」

そう、ポケモンには弱点がある、なので相性も考えないと負けるのだ

トパック「相性があゝどうすりゃあいいんだ」

そうになると

ムワリム「対策のポケモンが必要ですネ」

それがあれば苦勞しないけど

フォック「とりあえず修行して勝てるようにしよう」

こうして修行を始めた俺達

……

トパック「おゝい！」

トパックだ

どうしたの？

トパック「実はさ！相性のいいポケモンをもらったんだ！」

もらった？

話によると少女にもらったみたいだ

俺もその少女に話して俺は水タイプのヒヤップを、ワユとトパックはヤナップをもらった

こえでジム対策はバツチリだな

サンヨウシティ 相性（後書き）

進むにつれて更新が疲れる（汗）

ネツカ「今までの遅れた分を取り返さないと」

それもそうだね（汗）

ジム戦 相性を打ち破れ！（前書き）

これもネタバレなので覚悟ある方は見てください

ダルキー（チヨロネコ）「どうぞ」

俺のセリフをー！！

ジム戦 相性を打ち破れ！

サンヨウジム

ここは完全にレストランみたいなところだ

その奥にあの緑の髪の青年がいた

????? 「ようこそ、こちらサンヨウシティポケモンジムです」

青年の後ろからウェイトレスの赤い髪の青年が現れた

????? 「俺は炎タイプのポケモンで暴れるポッド！」

さらに緑の青年の後ろからさらに青い髪のウェイトレスの青年が現れた

????? 「水タイプを使いこなすコーンです、以後お見知りおきを」

そして最後は緑の青年が紹介する

????? 「そして僕はですね、草タイプのポケモンが好きなデントと申します」

トパック「えっ!？」

ワユ「まさかこれって(汗)」

そう、このジムは最初に選んだポケモンと同じタイプの3種のタイプを使ったジムなのだ

デントと呼ばれた青年が草タイプの使い手ってことだ

三人が回り

デント「あのですね……僕達ですね、どうして三人いるかといいますと……」

そんな中、ポッドと呼ばれた青年がせっかちなから

ポッド「もう！俺が説明するッ！」

ポッドは説明した

ポッド「俺達3人はッ！相手が最初に選んだポケモンのタイプに合わせて誰が戦うか決めるんだッ！」

フォック「もしかして？デント？あの時の質問って」

そこに青い青年、コーンが説明する

コーン「そうなんだよね、そう、あなたの言うとおりみなさんが最初に選んだパートナーによってのバトルになります、あなたが選んだのは草タイプなんだよね」

そう、俺はツタージャであるウィアを選んだ

戦うワユヤトパックはポカブだ

ということは……

俺の対戦相手は

ポッド「ということで炎タイプで燃やしまくる俺、ポッドが相手をするぜ！」

フォック「なるほどね…つまり相性が悪い状態で戦うってことだね？」

デント「はい、そうなんです」

だからあの時の質問で対策と言ったのはそのことを言うためのことだったのか、まあ俺はわかるけどね、まあリザードンだからポッドという奴の燃えるようなバトルが期待できそうってこと

ウエア『大丈夫なの？僕じゃ相性不利だよ』

ボールの中のウエアが言う

フォック「大丈夫、俺もトレーナー経験あるからそのぐらい対策はわかってる」

俺はポッドの相手を、ワユとトパックはコーンの相手をすることに

ポッド「イヤッホー！兄弟で一番強い俺様と遊ぼうぜー！」

フォック「ああ！その勝負乗ったー！」

さて、どうくるのかな？

ポッド「まずはこいつだ！！ヨーテリー！」

まずはヨーテリーか…

フォック「ウイア！」

俺はウイアを繰り出した

ポッド「まずはふるいたてるだ！」

攻撃と特攻をあげる技か…でも

つるのむち

まずはつるのむちでヨーテリーをつかむ

ポッド「そんなんでどうするつもりなんだ？」

こうするんだよ

フォック「まずは地面に叩きつけて！」

ヨーテリーを地面にたたきつけた

フォック「つるのむちでジャンプ！」

ウイアはつるのむちを使ってジャンプした

ポッド「俺のポケモンにそんなのが効くか！」

ヨーテリーは避けようとするが

フォック「つるのむちで逃がさないで！」

つるのむちで抑える、そこから

フォック「体当たり！」

急降下の体当たりを繰り出した

ポッド「何っ!？」

これによってヨーテリーを戦闘不能にさせた

ポッド「くっ!戻れ！」

ポッドはヨーテリーを戻した

ポッド「中々やるじゃねえか!だがこいつを相手にそれは通用できるか?バオップ!！」

出てきたのは頭が炎の形をした猿のポケモン、バオップ

フォック「なるほどね…だからなんだ…でも…戻ってウイア」

俺はウイアを戻した

フォック「すでに対策はしてあるんだよ!ウオーテ!」

ポッド「何っ！？だがここからが気合だぜ！」

ここまで乗り気になってるな

フォック「それでこそだよ！水鉄砲！」

ウォーテ『行くよ！』

ウォーテは水鉄砲を繰り出した

ポッド「焼き尽くす！」

たしかこの技は木の実を無駄にする技だからオレンの実持たせなくてよかった（汗）

フォック「水鉄砲連発」

バオップに水鉄砲を連発する

すると

バオップ「ウキッ！？」

バオップは連発水鉄砲に耐えられず倒れた

フォック「俺の勝ちだね」

俺はなんとか勝利を収めた

ポッド「まいったぜ！も・え・つ・き・た！」

あらら（汗）

ポッド「うわーッ！！お前すげえ！！ポケモンリーグの決まりだ、このジムバッジを受け取ってくれ」

俺はトライバッジをGETした

こっちの方も

ワユ「なんとか勝てた」

トパック「ナツプいなかったら勝てなかった」

二人とも勝ったみたい

俺達はジムバッジをもらって出たところにメガネをかけ、長い髪をした女性がいた

????「ヤッホー！アタシはマコモ、アララギ博士に頼まれてあなた達に渡すものがあるんだちょっとついて来て！」

言われるままについて行った

……

とりあえずマコモさんの部屋に上がり

マコモ「あらためて自己紹介するね、アタシはマコモ、見ての通り

の研究者、ちなみに研究しているのはトレーナーについてなの！」

トレーナーについて？

マコモ「で、アララギ博士とは大学時代からの友達でねあなた達のでだすけを頼まれたんだ、ということでアタシからのバックアップよ、この秘伝マシンをどうぞ！」

くれたのはあいぎりの秘伝マシンだ

フォック「ありがとうございます」

俺はお礼をいった

マコモ「あつ、……で、てだすけじゃなくてもお願いしてもいいかな？」

お願い？

トパック「どんなんだ？オイラにも」

とりあえず説明を（汗）

マコモ「あのね、サンヨウシティのはずれに夢の跡地って言われている場所があるんだけど」

俺達が前に修行したあの場所か

マコモ「そこにいるポケモン、ムンナの出す「夢の煙」が欲しいんだそれがあればゲームシンクと言って、いろんなトレーナーのレポ

―トを集めることができるようになるの!」

フォック「わかりました…それじゃあとってきますね」

俺達は夢の跡地へと向かった

ジム戦 相性を打ち破れ！（後書き）

ジム戦はかなり白熱だった（汗）

ムワリム「相性もありましたからね」

まあなんとかバッジはGETしたけど、次回は奴等が動きだします

ムシナを守れ！ VS プラズマ団（前書き）

今回もネタバレ注意です、というか進みながらの更新はさすがにきつい（汗）

ムンナを守れ！ VS プラズマ団

フォック「いあいぎり！」

スパッ！

俺はドラゴニックセイバーで木を切った

いあいぎりの意味ないけど（汗）

トパック「行こうぜ！」

トパックが先に行く

ムワリム「待ってください坊ちゃん！」

ムワリムも行く

フォック「俺たちも行こう」

……

????「……むづっん」

それは花形のようなものでピンクの体色のポケモンだ

フォック「これがムンナ」

ムンナが逃げる

トパック「待てえ！」

ムンナをなんとか追い詰めたとき

????「ムンナみつけ！」

あれはプラズマ団

やつらはなにかしようとしてる

????「ほらほら！夢の煙を出せ！」

あいつら、夢の煙が狙いだな、何がポケモンを自由にするだ！結局ポケモンをるように自由にしてポケモンを奪うつもりだな！

ムンナ「……むう！」

ムンナはいやがってる

フォック「おいデメエら」

????「私たちのことが、私たちプラズマ団はおろかな人々からポケモンを解放するため、日夜戦っているのだ」

だが俺の怒りは収まらない

フォック「お前等がやってることの何処か自由だ！」

プラズマ団女「何をいつてる！夢の煙を使えば人々がポケモンを手

放したくなる……そんな夢を見せて人の心を操るのよ」

そんなプラズマ団の男の方はムンナに当たって無理やり夢の煙を出させようとしている

フォック「どうやら…貴様等は俺達を怒らせた…なら生かして帰すか!!（怒）」

俺は怒りだした

俺はプラズマ団の奴等と戦う、まずは男の方だ

女の方はワユに任せた

最初に繰り出したのはミネズミ

フォック「お前には俺がじきじきにムンナを蹴ったことを後悔させてやる」

プラズマ団男「ならやってみろ!」

だがそれが彼にとっては後悔することになるうとは

フォック「ウイア! つるのむち!」

バシーン!

プラズマ男「なっ!?!」

フォック「あの蹴った男につるのむち!」

ウィア『許さない！つるのむち！』

バシーン！

プラズマ男「ぐわっ！？」

男はつるのむちでやられた

フォック「俺を甘くみるな…雑魚が！！（怒）」

俺は悪い奴等には雑魚という、しかし味方や仲間の場合などはそうはいわない、それに戦った奴やライバルだって

ワユ「ダンナ」こっちも終わりました」

どうやらこっちも勝利したようだ

プラズマ男「まさか…二人して…負けるとはな！だが夢の煙を…手に入れないと行けない！」

再び蹴ろうとするが

フォック「つるのむち」

バシーン！

プラズマ男「ぐわっ！」

やられる

だがそんな時

……

あいつは…

ゲーチス「……お前達、何を遊んでいるのだ？」

そこからもう一人のゲーチスが現れる

もう一人だと！？

ゲーチス2「我々プラズマ団はおろかな人間とポケモンを切り離すのだぞ！」

そこでまたゲーチスが一人になる

ゲーチス「その役目、果たせないというのなら……！」

すると

プラズマ女「こ、これは……！仲間を集めるとき……演説で人をだまして操ろうとするときのゲーチス様じゃないわ！」

プラズマ男「ああ……作戦に失敗したとき、そして処罰をくださる
ときのゲーチス様……」

プラズマ女「とにかく今すぐ謝って許してもらいましょう！」

二人は素早く去った

いったか…ん？

ムワリム「あれは？」

そこには半分がピンクの体色、半分が紫の体色のポケモンが現れた

????「むにゃあ！」

キルロイ「このポケモンは？」

それにしてもあの野朗、どうやって分身などしたのか、まさしくあれは本物に見えなかったな…まさか

????「わっ！」

わっ！？

そこから

マコモ「待ちきれなくて来ちゃったってムシャーナ!？」

そうこのポケモンはムシャーナというポケモンだ

ムシャーナ「むしゃ？」

フォック「もしかして君が？」

そういつと

ムシャーナ『はい……』

どうやら夢を見せていたらしい

ムンナ『ありがとう』

その二匹は去った

そこに

フォック「これは……」

マコモ「これって夢の煙!？」

どうやらこれが夢の煙のようだ」

マコモ「それにしても何があったの?」

フォック「実は……」

マコモ「そうだったのね、ムシャーナは夢を現実にしてムンナを助けようとしてたのよ」

だからゲーチスが二人いたりとかしてたのか
なるほど

ワユ「ん?あれってさっきのムンナだ」

ワユはさっきのムンナを発見した

フォック「どうしたの？」

俺は聞いた

ムンナ『助けけてくれてありがとうございます、感謝いたします、なので私をあなた達の旅に同行してもらいたいんです』

どうやら仲間になってくれるようだ

フォック「でもどうしようか？」

手持ち的には誰になるかだが

ワユ「じゃああたしと一緒にいいかな？」

ワユ

ムンナ『はい…あなたについていきます』

こうしてワユの手持ちになったムンナ

その後ワユがニックネームでシュダと呼ぶことになった

ムンナを守れ！ VS プラズマ団（後書き）

やつらの目的がわからねえ（汗）

ネツカ「どうしようこの先」

やっていって奴等を倒すしかないな、こうなった以上は（怒）

ネツカ「僕も絶対に」

うん、強くなるようにしないとね

ウィア「僕もだけど」

シッポウシティ〜Nのおかしな発言（前書き）

ついにシッポウシティです

でもネタバレのため見る方は注意してください

ではどうぞ

シッポウシティ〜Nのおかしな発言

フォック「はあくやつとシッポウシティだ」

フォック達はシッポウシティに到着した

だがみんな疲れていた

それもそのはず、実は3番道路でプラズマ団からポケモンが奪われた子がいてプラズマ団を倒して、ポケモンを取り返し、なんとかシッポウシティについた

シッポウシティはレンガで出来た倉庫みたいな建物が特徴の町、この町のジムリーダーはノーマルの柄手らしい、そうなると格闘なんだよね（汗）

ワユ「もう格闘タイプついてるから有利なんだよね」

トパック「オイラもだけど」

すでにこの二人のポケモンは進化していて格闘が追加されているから有利、俺もウィアを進化している、ツタージャの時と変わらないような姿だけど首のV字の黄色い物が特徴なんだ、種族名はジャノビーと呼んでいる

ワイルも進化している、中型犬のような姿で…うん、ぬいぐるみの犬みたいな感じで背中には黒い体毛で尻尾も黒い、種族名はハーデリアという名前

さらにダルキーを預けてさらにメンバーに入れたのはハトのようなポケモン、マメパトのメツパとくるくるカールでつぶらな青い目をしているかわいいポケモン、タブンネを捕まえた、♀で名前はヒヤリル

さらに驚いたのはクリティカッターは知ってると思うけど、イッシユではクリティカットって名前になっている、まあ効果は同じだけどね（汗）

……

ワユ「GET!」

ワユはダゲキという柔道着を着ていて、体が青いポケモンを捕まえた俺も捕まえようとしたが全然入ってくれなくて

ブチッ

フォック「ウエア、グラスミキサー（怒）」

ウエアにグラスミキサーを指示してダゲキを倒した

まあ代わりにドツコラーという灰色の体色に木を担いでるポケモンを捕まえたけどね（汗）

名前はデイク、大工っぽい感じなので

デイク『まだまだやないか〜フォックはん』

なぜか関西弁（汗）

フォック「あゝわかってるよ、まあデイクいるからいいか」

という感じに納得する

デイク『そりやないわ』（汗）』

とつつこむ浪花の大工野朗、デイク（汗）

……

フォック「たのも〜!!」

俺は早速ジムに入ったが、そこに

フォック「またお前か」

Nだ

N「僕は……誰にも見えないものが見たいんだ、ボールの中のポケモン達の理想、トレーナーというあり方の真実、そしてポケモンが完全となった未来……君も見たいだろ」

見たって言うが俺は…

フォック「残念だがお前とはつじつまが合わない、それでポケモンが完全になると思うか？」

そう言ったが

N「ふうん、期待はずれだな、それよりも僕と僕の友達で未来を見ることが出来るか君でたしかめさせてもらっよ」

そういうが

トパック「待ってくれ！ここはオイラが」

なんとトパック自身がNとバトルをしようとしていた

フォック「いいのか？」

俺はトパックに問う

トパック「オイラは…ラグズと共存もしたいとがんばってきたんだ…ポケモンだってそうだ…ならオイラが戦っ」

フォック「わかった…なら戦って来い」

俺は後ろに下がる

N「君か…ラグズだがなんだか知らないけど君の友達の未来見ることが出来るかためさせてもらっよ」

トパック「やってみろ！」

ムワリム「がんばってください！坊ちゃん！」

ムワリムが応援する

N「まずはこの子からだ」

出てきたのはマメパト

ウィアだったら相性不利だったな

トパック「なら俺はトッコ!」

繰り出したのはドッコラー

N「風起こし!」

マメパトの風起こしを繰り出す

トパック「がまん!」

トッコはがまんして風起こしに耐えた

N「ふうん、でもその前に倒せばいいだけのことだよ、風起こし」

再び風起こしを繰り出す

トッコ『くっそ』

トッコはたえる

N「ハハハハ!これで終わりだよ、風…」

トパック「今だ!」

トッコの体が光に包まれ

トッコ『オラア！！』

そう、がまんがとかれたのだ

マメパトは倍のダメージを受けて戦闘不能となった

N「くっ！戻れ」

マメパトを戻したN

N「中々やるようだね…だけど次はどうかな…」

次に出したポケモンはおたまじやくしのようなポケモン、オタマロ

トパック「トッコ、戻ってくれ」

トパックはトッコを回収し、新たなポケモンを繰り出した

トパック「頼むぜ！アクロ！」

出てきたのは頭に小さい木が生えた猿のようなポケモン、ヤナップだ、このポケモンはトパックが女の子にもらったポケモンだ

トパック「つるのむち！」

アクロはつるのむちでオタマロを捕らえ

トパック「叩きつけろ！」

オタマロをそのままたたきつけた、これによってオタマロは戦闘不能となった

N「ここまでやるなんてね…じゃあこの子ならどうかな？」

繰り出したポケモンはドッコラーだ

チヨロネコは…逃がしたってことか…あの野朗（怒）

トパック「あのチヨロネコはどうしたんだ？」

トパックは質問した

N「ああ、あの子なら逃がしたよ…ここにいちゃああの子がかわいそうだからな」

フォック「逃がしたんだな…なら遠慮なくやれ、トパック」

トパック「ああ、オイラも同感だ、頼んだぜプツカ！」

出てきたのは二足になって遅くなったプツカの進化した姿だった

それはまるでレスラーのようだった

チャオブーというらしい

トパック「ニトロチャージー！」

チャオブーは炎に包み込み突進した、ドッカラーは吹っ飛んで目を回してしまい戦闘不能になった

N「…今の僕の友達とではポケモンを救い出せない……世界を変えるための数式は解けない……僕には力が必要だ……誰もが納得する力……」

去ろうとしたが最後に一言いう

N「……必要な力はわかって……英雄とともにこのイッシュ地方を作った伝説のポケモン、ゼクロム！僕は英雄になり、君と友達になる！」

そう言って去った

キルロイ「ゼクロム？一体？」

ゼクロムが…

トパック「なあフォック？」

トパックが俺に話す

フォック「どうした？」

トパック「勝手かもしれないけどここからは別々に行動した方がいいと思うんだ」

なるほどね…

ワユ「でもどうすんの？だんな一人は大丈夫だと思うけど？」

フォック「たしかにな…ならトパックとムワリム、ワユとキルロイなら二人で行くから問題はないと思うけど？」

その案で

キルロイ「たしかにね、ならワユさんと一緒に僕はサンヨウシティに戻ってジムに挑戦するよ」

ムワリム「私も坊ちゃんと一緒にサンヨウに戻ってジムをし、イッシュ地方を回って情報を集めましょう」

フォック「わかった、じゃあ俺は今日は休んで明日ジムに挑む…みんな…油断するなよ？」

そうして俺達は別々に行動することになった

シッポウシティ〜Nのおかしな発言（後書き）

えゝ次回から俺の一人旅になります、それにしてもNは一体何者といいたいですね（汗）訳が分からないことばかりしゃべっているし、2。世紀少。のト。ダ。ですか（汗）

ナチュラル ボーン ママ(前書き)

このタイトルからしてわかりますよね？

ナチュラル ボーン ママ

次の朝、俺はジムへと向かった

……

フォック「たのも〜!!」

俺はジムの扉を開けた、ジムは博物館と一緒にあった

フォック「あゝすみません（汗）」

謝りながらもいくが服館長のキダチという人に館内を案内され、その後階段の先の方からはポケモンジムとなっている

フォック「ありがとうございます」

俺はお礼をいってジムへと入った

あつちなみにここのジムリーダーのアロエさんは強くて優しいと言
って、さらにそのキダチさんの奥さんらしい（汗）そうだったんだ
（汗）

……

中は図書館のようになっていた、ちなみにアドバイザーから初
めましてポケモンちゃんの本を探した、入口の近くにその本を読ん
でみた、するとメモが挟まってこう書かれていた

『ポケモントレーナーの諸君！ジムリーダーのアロエだよ！この図書館に問題を書いたメモを4つ隠しました、その問題を解いて私の所まで来れるかな！？さあ始めの問題だ！』

問題はこうだ

Q、このジムで初めて出会ったポケモンはなんだったでしょう？

ヒントは中央の列の本棚！さあ探してごらん！

と、書かれていた

なるほどね…あっ！たしか！

俺はポケモンの本棚から「ミネズミの生態」を読んだ、その最後のページにメモがあった

『さすがに問題が簡単だったね、さて2問目の問題だよ！』

問題はこうだ

Q、体内で炎が燃え上がり、頭から煙を出して走る、さてこの本はなんでしょう！？

ヒントは誰かが呼んでいるかもね！？だ

あっ！こんなの簡単

俺は女の人に話した、どうやらあたりだ、まあここで勝負もしいから勝負を挑んだ

……

俺は本の裏表紙からメモを見つけた

『よくここがわかったね！さすが私に挑むだけのことはある、さて
3 問目の問題だよ！』

問題はこうだ

Q お鍋でぐつぐつあっためて食べるとおいしいものなんだ？

ヒントはここより入口に近い本棚

見つけたのは…ポケモンのお菓子だ

シンオウ地方のお菓子、ポフィン^{ポフィン}の事が書いてあった

たしかにポフィンなら、本の後書きにメモがあった

『問題にひっかからないでここまで来れたかい？さあ最後の問題だよ！』

最後の問題は

Q この本棚から奥に二つ、左に一つ、手前に二つ、右に一つ奥に一つ、さて何処だ？

ヒントは自分の力で探せだと（汗）つまり

答えは『ポカブの生態』を読んてるトレーナーが答えだ、まあ勝てたけどね

俺はポカブの生態を読み、そこに挟んである手紙を読んだ

『よくここまでこれたね！強さだけではなく知恵も持っているんだね！これから戦えることを楽しみにしてるよ！ジムリーダーアロエ』

カチッ！

本の下にスイッチがあり、読んでいた本棚が横に動いた、なんと階段が現れたっ！

フオック「ここを降りれば…」

俺は階段を降りた

……

降りるとそこは書斎のようだったそこに一人の女性がいた

緑の髪に逞しい感じの体にピンクのエプロンをつけていた

????「いらっしやい！シッポウ博物館の館長にしてシッポウジムのジムリーダー、それがこのあたしアロエだよ！」

あたし（汗）私なのに一人称あたしなんだ（汗）

アロエ「さあて挑戦者さん、愛情を込めて育てたポケモンでどんな戦い方をするのか研究させてもらっよう！」

ついに勝負だ

フォック「さて！こっちもいかせてもらいますよ！まずはネツカ！」

まずはネツカを出した

アロエ「めずらしいポケモンだね、でもあたしのポケモンに勝てるかな？まずはバーテリア！」

まずはバーテリアか…ワイルいるからわかってるし、でも特性のいかくで攻撃は下がったけど

まずは火の粉！

いきなり火の粉で攻撃

アロエ「避けて！」

バーテリアは火の粉を避けた

アロエ「やるようね、今のでアンタがどんなトレーナーかわかってきたよ」

まだまだ余裕みたい

フォック「そうですか…なら今度は火の粉を連発して！」

ネツカに火の粉を連発させる

アロエ「避けて！」

再び避ける

フォック「ふんじんはく粉塵爆破！！」

俺はそうネツカに指示

ネツカはまず火炎放射を吐いた

するとそれが火の粉に巻き込まれ爆発を起こした

アロエ「なっ！？」

これにより相手のポケモンは爆発に巻き込まれ戦闘不能になった

フォック「やった！」

俺はネツカにハイタッチした、するとネツカは光に包まれた

これは…進化

ネツカ「進化した…」

ネツカは二足歩行で尻尾に炎を灯ったポケモン、モウカザルへと進化した

アロエ「驚いたね、まさか進化するとはね、だけどあたしにはこの子がいる！おいき！」

出てきたのは尻尾が長く黄色のしましまのポケモン、ミネズミの進化系、ミルホッグだ

アロエ「こんな状況でも勝つ手段を探るのさ！」

だけど俺は負けない

フォック「戻って」

俺はネツ力を戻した

フォック「行つて！ワイア！」

俺はワイアを繰り出した

アロエ「ジャノビーね…はたしてどうかな？」

ならあの技を使うしかないね

フォック「行きます！グラスミキサー！」

グラスミキサーで攻撃した

アロエ「避けてかみくだく！」

ミルホッグは避けてそこからかみくだくをする

フォック「やどりぎの種！」

そこからやどりぎを植えつけた

フォック「フレグランスミキサー!!」

俺はウィアに指示した

するとウィアは葉っぱの竜巻を起こした、それだけじゃない、さらに花びらも追加されていた

フォック「この技はグラスミキサーをさらにパワーアップしたオリジナルの技です!これで決めます!」

ミルホッグはフレグランスミキサーに巻き込まれてダメージをうける

アロエ「敵討ち!」

敵討ちによってダメージを大幅削られた、しかし

ミルホッグ「ミルツ!?!」

そう、忘れてはいけない、やどりぎの種、こいつは相手の体力を奪って自分の体力を回復させる技、やどりぎに体力を奪われミルホッグは戦闘不能になった

アロエ「たいしたもんだよ!アンタ、惚れちゃうじゃないか!」

いや、だんなさんいますよね(汗)

アロエ「ウツトリするほどのえも言われぬ戦いっぷり!このベアシツクバッジを受け取るのにふさわしいポケモントレーナーだねアンタ!」

いやリザードン^どだけど(汗) まあこれで二つ目のバッジをGETし、
次の町へと行く

ナチュラル ボーン ママ（後書き）

豪快な人でした（汗）

ネツカ（モウカザル）「おかげで僕も進化できたよ」

ウィア『よかったね』

こっちもこれ更新するのはブラックプレイだから疲れる（汗）

襲撃！（前書き）

今回は短いよ

ネツカ「何があつたのかな？」

それは…どうぞ

襲撃！

ママー！！

するとそこからだんなさんであるキダチさんが来た

キダチ「ママー！！大変！大変だよ！プラズマ団という連中が骨を頂
く！って」

アロエ「なんだって！どういうことだい！？」

またあいつらか

アロエ「フォック！あんたもおいで！！」

アロエさんは猛ダッシュで急ぎ、だんなであるキダチさんも追いか
ける

フォック「急がないとな」

俺も急いで向かう

……

アロエ「ちょっとアンタ達！おふざけはよしとくれ！！」

そこにはプラズマ団の団員が多数来ていた

プラズマ団「来たかジムリーダー、我々プラズマ団はポケモンを自由にするため、博物館にあるドラゴンの骨を頂く」

入口にあるあの骨だな！

プラズマ団「我々が本気であることを教えるためあえてお前の前で奪おう」

すると奴等は動き出した

プラズマ団「ではえんまく！」

プラズマ団一部「プラーズマー」

奴等はえんまくを出した

……

煙が収まるとドラゴンの骨の頭の部分がなくなっていた

アロエ「なんてこったい……」

アロエさんはプラズマ団を追いかける

俺も行こう、あいつらめ！

襲撃！（後書き）

ウィア「許せない！（怒）」

ネツカ「頭の骨を取り返さないと！」

うん、次回は骨を取り返しにいきます

助っ人（前書き）

今回も短いですが、そこに助っ人が
ではどうぞ

助っ人

俺は博物館の外へ出た

アロエさんは困っていた

そこに

????「やあアロエ姉さん、何かいい化石は見つかったかい？」

そこにいたのは一人の茶髪の青年だ

アロエ「アンタ、また行き詰ったのかい？」

俺に向けるアロエさん

アロエ「フォック！こいつさこう見えてもヒウンジムのジムリーダーでアーティって言うんだよ！」

どうやら次の町のジムリーダーってことか

アーティ「……んうん？なんとなく気分転換かな？でさなんとなく大変そうだけどひよつとして何かありました？」

アロエ「そうなんだよ！！展示品を持っていかれてさ！」

アロエはアーティに説明して

アロエ「手分けして探すよ！あたしゃこっちな、で、アーティとフ
オックはヤグルマの森を探しておくれよ！」

たしか俺がデイクを捕まえた場所にある森だったな

アロエ「いい？アーティ、アンタが案内してやんな、じゃ、頼んだ
よ！」

一目散に駆け出した、早いな（汗）

アーティ「さてさて……君……フオック君だって？」

フオック「はい」

俺は答えた

アーティ「じゃあ行こうか、泥棒退治とやらにさ」

俺とアーティはヤグルマの森へと向かった

助っ人（後書き）

ネツカ「ヤグルマの森」

ウィア「そこには毒消しを持参してください」

次回はヤグルマの森に行きます

ヤグルマの森の戦い（前書き）

えゝヤグルマの森に突入します

ではどうぞ

ヤグルマの森の戦い

アーティ「この先がヤグルマの森だよ、たしかにここに逃げられると厄介かもね」

たしか毒消しはお持ちですか？って看板に書いてあったな、ナースのトレーナーさんは毒タイプの技を持つポケモンが多いって聞いたしな、そうなる毒は注意ってことだな、とりあえず毒消しはもったから行きますか

俺はヤグルマの森へと入った

……

ヤグルマの森

アーティ「あのね、ヤグルマの森を抜けるには二通りあるんだ」

フォック「それって？」

俺はアーティに聞いた

アーティ「まっすぐ行く道と森の中を抜ける道、僕はこのまままっすぐ進んであいつらを追いかけるよ」

フォック「つまりいなくても出入口を塞げば逃げられないってことですな」

俺はそういうと

アーティ「そのとおりだ、君はこっちの森の中を抜けるルートにプラズマ団が隠れていないか、探してくれないかな」

フォック「わかりました」

俺は承諾した^{しょうだく}

アーティ「トレーナーも多いけど基本一本道だから迷うことはないよきつと」

きつとって（汗）

アーティ「それじゃあアロエ姉さんのため、やりますか！」

アーティはまっすぐな普通の道を進んだ

フォック「そんじゃあ俺も行きますか」

俺は森のルートへと進んだ

……

いきなり最初のプラズマ団員がいた

プラズマ団「しつこい奴め！追いかけれないようここで痛めつけてやる！！」

しかし数分後

プラズマ「ピクピク」

負けてさらにやどりぎの種などで動きを封じて倒れていた

フォック「持っていないか」

俺は森の奥へと歩む

……

フォック「ふう、さあてあんたが骨を持ってるだろ？それを返せ」

俺は愛剣を突きつける

プラズマ団「わ、わかった！盗んだ骨は返します！だから命だけは
！！」

そういうとドラゴンの骨を返した

プラズマ団「こ、これで我等の……そして王様の望みが叶わなくなるのか……」

そこから茶色の帽子を被った老人があらわれた

????「大丈夫ですか、王様に忠誠を誓った仲間よ」

プラズマ団「七賢人様！」

七賢人？この老人が？一体？

プラズマ団「せっかく手に入れた骨をみすみす奪われるとは無念です」

????「いいのです、ドラゴンの骨ですが、今回はあきらめましょう、調査の結果、我々プラズマ団が捜し求めている伝説のポケモンとは無関係でしたから」

伝説のポケモンだと!?

そういつと俺に向かって

????「ですが我々への妨害は見逃せません、二度と邪魔できないよう、痛い目にあってもらいましょう」

俺と戦うというのは

フォック「それより貴様は誰なんだ？」

俺はそういつ

????「私は七賢人の一人、アスラ、あなたには痛い目にあってもらいましょう」

しかし

アーティ「ああよかった!虫ポケモンが騒ぐから来たら、なんだか偉そうな人いるし、さっき僕が倒しちゃった仲間を助けに来たの?」

そこから

アロエ「フオック！アーティ！他の連中はなんにも持ってなくてさ……で、なんだい、こいつが親玉かい？」

そこでアスラはもう一度紹介した

アスラ「私はプラズマ団、七賢人の一人です、同じ七賢人のゲーチスは言葉を使い、ポケモンを解き放たせる！残りの七賢人は仲間に命令で実力でポケモンを奪いとらせる！だがこれはちと部が悪いですな、虫ポケモン使いのアーティにノーマルポケモンの使い手アロエ、敵を知り、己を知れば百戦して危うからず……ここは素直に引きましよう、ですが我々はポケモンを解放するため、トレーナーからポケモンを奪う！ジムリーダーと言えどこれ以上の妨害は許しませんよ、いずれ決着をつけるでしょう、ではその時をお楽しみに……」

そついうと去っていった

七賢人……あのゲーチスもその一人……厄介なことになってきたな……

アロエ「素早い連中だね、どうするアーティ、追いかけるかい？」

アロエさんが追いかけるかアーティに聞いてきた

アーティ「いやあ……盗まれた骨は取り返したし、あんまり追い詰めると何をしでかすかわかんないです」

たしかに奴等も何をしでかすかわからない

アーティ「じゃあアロエ姉さん、僕戻りますから……」

俺に声をかける

アーティ「それじゃあさ、ヒウンシティのポケモンジムで君の挑戦を待ってるよ」

フォック「楽しみにしています」

俺も待ち遠しい

アーティ「うん、楽しみ楽しみ」

アーティは去った

アロエ「フォック！あんたの持っているそれが必死になって取り返してくれたドラゴンの骨なんだね」

フォック「はい、これはお返しします」

俺はアロエさんにドラゴンの骨を返した

アロエ「フォック、本当にありがとうよ、あんたのように優しいトレーナーなら一緒にいるポケモンも幸せだよ、こいつはあたしの気持ちさ、大切に使うておくれ！」

アロエさんから月の石をもらった

アロエ「そいつは月の石！それを使うことで進化するポケモンもいるんだよ、さて、ドラゴンの骨を博物館に戻さないかね、じゃあ気をつけるんだよ！」

アロエさんは去った

フォック「それじゃあヒウンシティに行きますか！」

俺は元気良く駆け出した

ヤグルマの森の戦い（後書き）

七賢者：ゲーチスもその一人とはな…

ネツカ「この先のことも考えると不安だね」

ウィア「ならいくしかないよ、僕達が強くならないと」

ワイル（ハーテリア）「そうだな」

次回はヒウンシティです

ヒウンシティ〜リバティガーデン島へ（前書き）

え〜ついに配信されたリバティチケットを使う時が来ました

ネツカ「一体何が待ってるんだろう？」

それは後のお楽しみ♪ではどうぞ！

ヒウンシティ〜リバティガーデン島へ

わあ〜

ネツカ「高い」

今俺はスカイアローブリッジに来ていた

ここをわたってヒウンシティに

……

フォック「ついた！」

俺はヒウンシティについた

フォック「ポケモンセンターで休んだら対策とるよ」

みんなにそう言ってポケモンセンターで休んだ

……

ネツカ「とりあえずどうする？相手は虫タイプだから僕とメツパなら大丈夫だと思うけど？」

アーティは虫タイプを使う、たしかにメツパやネツカだと有利

フォック「だけど相手も対策はしてくるし」

メツパ『そうやな』

デイクと同じ関西弁でしゃべっているのはマメパトのメツパ

フォック「そうなると…ここにリバティチケットがあるんだ」

俺は青いチケットを取り出した

フォック「リバティガーデン島という島にいけるみたいだからここで修行して仲間を集めよう」

メツパ『そうやな』フィックはんの言うとおりでっせ』

こうして俺はヒウンシティの船着場へと向かった

……

フォック「やっと乗れた…」

俺は観光船で島へと向かう

……

そこには

フォック「また奴等か…」

そう、プラズマ団の連中だ

ウィア『行こう!』

フォック「ああ、奴等の好き勝手にさせないからな」

俺達は立ち向かった

……

俺は灯台に入って奴等の目的を聞いた

どうやら地下に眠る幻のポケモン、ビクティニを解放するらしい

ビクティニか…その前に何とかしないと

俺はばったばったと奴等を倒しながら進む

……

地下の奥で一人のプラズマ団員が頭にV字のポケモンに迫っていたところだった

プラズマ団「そのポケモンを手にした者はあらゆる勝負で勝利することができるといふ…無敵の力を手に入れることができるのだ！それがこの幻のポケモン、ビクティニだ！」

どうやらあのV字の頭のかわいいポケモンがビクティニってわけか

プラズマ団「ここはビクティニをかくまうために作られた秘密の部屋、200年前ある大富豪が島を丸ごと買い取って、この地下室にビクティニを隠してしまったのだ、それ以来ビクティニを見た者はいなくなり、幻のポケモンとなったのだ！我々プラズマ団がビクティニを解放するのだ！」

「イニをここから解放して、我々の目的を実現させるため、その力を使わせてもらう！お前のような奴には邪魔はさせない！」

フォック「ふん、じゃあやってみな！ウィア！フレグランスミキサー！！」

「NOOOOOOOOOOOOOOOOOO! プラズマ団」!

ミルホッグもろともフレグランスミキサーで一掃した

「くっく！お前の力を見誤っていたようだ…しかしビクテ
イニは一筋縄ではないぞ…見る…」

ビクティニは俺を見ていた

「プラズマ団、お前の力をたしかめようと心待ちにしているようだ……」

まあいいか

俺はビクティニに近づいた

ビクティニ「僕と勝負しよう！僕に勝てるかな」♪

ホントに心待ちしてたようだ

フォック「なら俺が勝つたら仲間ね…いざ！勝負！」

ついにビクティニとの勝負となった

ヒウンシティ〜リバティガーデン島へ（後書き）

次回はビクティニと戦います

ネツカ「仲間にできればいいね」

したいよマジ（汗）

V S ビクティニ (前書き)

ついにビクティニ戦です、ネタバレするとやばいのでブラック・ホ
ワイト進めている方はOKです

ではどうぞ

V S ビクティニ

フォック「グラスミキサー！」

まずはグラスミキサーで命中率を下げる

ビクティニ『うわっ！』

ビクティニはグラスミキサーを食らった

フォック「これで命中率h」

だが

ビクティニ『なぐんちゃって♪電光石火！』

電光石火を繰り出す

フォック「ウイア！避けて！」

ウイアは電光石火をよけた

ウイア『おかしい、命中率は下がったのに』

そう、なぜ命中率が下がっても攻撃は当てられているのか？

ビクティニ『それは僕特性、勝利の星があるからだよ♪』

勝利の星

自分と味方の命中率を上げる特性だ

ウイア『だからグラスミキサーでも』

ビクティニ『そう、焼き尽くす!』

今度は炎を放った

ウイア『くっ!』

ウイアは避けた

ビクティニ『やるね、でも、念力!』

念力でウイアの動きを封じて

ビクティニ『焼き尽くす!』

焼き尽くすでウイアに大ダメージを与えた

ウイア『うわっ!?!』

フォック『戻って!』

俺はウイアをボールに戻した

フォック『ならモンメ!』

俺は綿雲のようなポケモン、モンメンを繰り出した

フォック「痺れ粉！」

ビクティニを痺れさせ、メガドレインで少しずつ体力を奪って

フォック「モンスターボール！」

ボールがビクティニに当たり、ボールが揺れる

そして……ボールが揺れなくなり、俺はボールを拾った

プラズマ団「ビクティニとともに生きるとは、ビクティニの過酷な運命を引き受けるということだ……お前にその覚悟があるのかいつかためさせてもらうぞ……！」

そう言うのと去った

フォック「覚悟なんてもうとっくにできてるよ」

俺はこの後、ヒウンシティへと戻った

再び（前書き）

えゝ今回はジム戦じゃありません、緊急事態です
ではどうぞ

再び

俺はジムに挑戦しようとしたが

アーティ「君はたしか……フォック君」

フォック「あの〜ジムに挑戦しに来たんですが」

そういうが

アーティ「ごめんね、今はジムは無理なんだ」

フォック「えっ!？」

なんとジム戦ができない、どういうことだ!?

アーティ「連絡があつてさ!プラズマ団が出たらしいんだ!」

またお・ま・え・ら・か!!(怒)

アーティ「というか君も来てよ!プライムピアって波止場はとほに行くからさ!」

そういうとアーティは真っ先にその波止場へと向かった

フォック「ったく!!(怒)」

もはやあいつらに怒りをぶつけよう(怒)ジム戦できなくなったから(怒)

……

アーティ「こっちこっち！」

アーティ「プラズマ団……この子のポケモンを奪ったって」

それは……

フォック「ミカヤ!!」

ミカヤと呼ばれた銀色の長い髪に魔導師が着るような服を着ていた女の子、今は第十五代デイン国王で別名、暁の巫女と呼ばれている

ミカヤ「フォック！実は私、サザと一緒にイッシュ地方に行つて、そしたら私のポケモンを奪われて、今サザが追つてるの」

フォック「そうなんだ」

サザは盗賊でミカヤの夫なんだ

????「あたしね、お姉ちゃんの悲鳴を聞いて必死に追いかけたんだよ!……でもこの町大きいし、人ばかりで見失っちゃったの」

そついうのは濃い紫の髪をした女の子だった

アーティ「アイリス……君は出来ることをしたんだから」

だがその女の子……アイリスは

アイリス「……でもだめだもん！人のポケモンを取っちゃだめなんだよー！！」

それはわかってるよ（汗）それにサザまでイツシュ地方に来るなんてアイリス「ポケモンと人は一緒にいるのが素敵なんだもん！お互い
ないものを出し合って支え合っのが一番だもん！」

ミカヤ「……アイリスちゃん」

よくいうなゝあの子（汗）

アーティ「うん！だから僕達がポケモンを取り返す、ね、フォック君」

フォック「まあ元々知り合いなので大丈夫です」

と、答える

アーティ「今はサザ君が追いかけているし……とはいえこのヒウンシティで人探し、ポケモン探したなんてまさに雲を掴む話」

そんな時

プラズマ団女「なんでジムリーダーがいるの！？せつかくうまくいったからもう一匹奪おうとしてたのに……って逃げなきゃだわ……！！」

まさか！？

アーティ「フォック君行くよ!」

あの女(怒)

フォック「待ちやがれ!! (怒)」

ものすごい形相で追いかけていった

アーティ「こわっ!？」

ミカヤ「待って!」

ミカヤも追いかける

アーティ「待ってミカヤちゃん、君はアイリスとそばにいて」

ミカヤ「わかりました」

アーティも追いかける

そこに

サザ「ミカヤ!」

緑の髪青年が来た

ミカヤ「サザ!」

サザ「今のってフォックだよな?」

そう彼がミカヤの夫であるサザだ

ミカヤ「ええ、今ものすごい怒ってて（汗）」

サザ「ごめんな、俺がついていながら」

ミカヤに謝るサザ

ミカヤ「ううん、気にしないで」

アイリス「仲がいいね、お二人さん」

二人「／／／／」

たしかにね（汗）

再び（後書き）

えゝまさかアイリスが出てくるとは（汗）

ネツカ「たしかベストウィッシュでサトシと一緒に行く子だよね！
」？

いや、どうかはわからないけど、アニメでちょこつと見たただけからどうなのか（汗）

逆鱗（前書き）

えゝ前回ミカヤに会い、俺はジム戦ができないことにキレて奴等、
プラズマ団からミカヤのポケモンを取り返しに行ってます

ではどうぞ

逆鱗

俺は追いかけていった

フォック「ん？ジムの方面にいったな」

俺はジムの方面へ

アーティ「はあ…はあ…何者なんだフォック君は（汗）」

遅れてアーティも来た

アーティ「たしかジムの方向に行ったよね？」

アーティも追いかけた

……

フォック「やっと追いついた」

アーティ「……間違いなくここだね」

プラズマ団「いない、いない！この中に仲間とか七賢人様はいない！嘘だと思っなら俺と勝負さ」

フォック「グラスミキサー！！炎のパンチ！！」

ドカーーーーーーッ！！

プラズマ団「なっ!？」

いきなりポケモン達は倒れた

フォック「とつととどけや（怒）変態共が!!（怒）」

プラズマ団「ヒイイイ!!」

プラズマ団のポケモンは俺のポケモン達により一掃された

アーティ「うわぁゝ（汗）」

アーティは啞然とした

ここでミカヤ、サザ、アイリスが来た

アイリス「……はあ迷っちゃった、ライブキャスターで説明されてもチンプンカンプンだよ!」

サザ「ここにプラズマ団がいるんだな」

サザは怒るようについて

フォック「そうだけどサザも来てたんだ」

サザ「俺もミカヤと一緒に旅行でこつちの世界に来たんです」

なるほどね

ミカヤ「私もポケモン持っていてアララギ博士からもらったの」

何をもらったんだろう？

とにかく俺も入るが

アイリス「よし！今度はあたしも戦う！！さあ、ミカヤお姉ちゃんも！」

ミカヤ「わかったわ、行きましょう！」

みんなで入っていった

……

中に入ると七賢人のゲーチスや前にヤグルマの森であったアスラという七賢人の一人とさらにもう一人黒い帽子を着た奴がいた

ゲーチス「これはこれはジムリーダーのアーティさん」

アーティ「プラズマ団って人が持っている物が欲しくなると取っちゃう人達？」

そこに黒い帽子の奴が言う

「????」ポケモンジムの目の前に隠れ家を用意するのも面白いと思いましたが以外に早くばれましたな」

ゲーチス「たしかに……まあ私達わたくしのすばらしきアジトはすでにありますからね、さてあなた方けんこくイッシュ地方建国の伝説はご存知ですか

？」

その時アイリスが言う

アイリス「知ってるよ！黒いドラゴンポケモンでしょ！」

ゲーチスが動きまわる

ゲーチス「そう……多くの民が争っていた世界をどうしたらまとめられるか……？その理想を追い求めた英雄の元に現れ、知識を授け、はむかうものには牙をむいた黒いドラゴンポケモン……英雄とポケモンのその姿、その力がみんなの心をまとめ、イッシュを作りあげたのです、今一度！英雄とポケモンをこのイッシュに蘇らせ人々の心を掴めば！いともたやすく私の……いやプラズマ団の望む世界にできるのです！」

フォック「そんなのが望みか？…黒いポケモンを使ってそうしようとしてたってそうは行かないぞ」

アーティ「このヒウンにはたくさんの方がいるよ、それぞれの考え、ライフスタイル、ほんとバラバラ、正直何を言っているかわからないこともあるんだよねえ」

「????」「はて」

アスラ「何を？」

一息いれて

アーティ「だけどポケモンを大事にしているのはみんな同じなんだ

よね、初めて出会う人ともポケモンを通じて話すんだ！勝負したり、交換したりね」

アーティが前に出る

アーティ「カラクサの演説だって？」

前のカラクサのあれだな

アーティ「ポケモンとの付き合い方を考え直すきっかけをくれて感謝しているんだよ、そして誓ったね……！もっともっとポケモンと真剣に向き合おうってね！」

フォック「お前等がやっていることはこのようにポケモンと人の結びつきを強めるんじゃないのか？」

そう、ポケモンと人間は互いが理解しあって絆を深めるのがポケモンと人間だ

やつらのやってることは…

ゲーチス「フハハハ！つかみどころがないように思いのほかキレものでしたか、私は頭のいい人間が大好きでしてね、王のため世界各国から知識を持つ人間を集め、七賢人を名乗っているほです、よろしいここはあなたと…そのツリ目の青年の意見に免じ引き上げましょう、その娘……ポケモンは返してやろう」

プラズマ団はミカヤにポケモンを返した

そのポケモンはムンナだ

ミカヤ「あつ、ありがとう、ムナ、大丈夫？」

ミカヤはムナというムンナに言う、ムナは大丈夫のようだった

アイリス「お姉ちゃん！！こいつら人の大事なポケモン取っちゃった悪者なんだよ！？」

アイリスが反論する

ミカヤ「たしかにそうだけど、ムナが無事で嬉しいから」

ゲーチス「これは麗しい（うるわしい）ポケモンと人の友情！ですがポケモンをおろかな人間から自由にする、そのために伝説を再現し、人の心を操りますよ……ではごきげんよう……」

プラズマ団の連中は去った

アイリス「どーして悪い奴を見逃しちゃったの！？」

アイリスが色々反論する

アーティ「……んうん、だって奪われたポケモンにもしものことがあれば僕達はどうすればいいのさ？」

たしかにそうだな

ミカヤ「大丈夫よ、アイリスちゃんありがとう！みんな怪我はなかったし」

サザ「これで一安心だな」

これでなんとか治まったけど…奴等が言う…黒いドラゴンポケモン…
…そういえばNが言ってたな…

…

N「…必要な力はわかっている…英雄とともにこのイッシュ地方を作った伝説のポケモン、ゼクロム！僕は英雄になり、君と友達になる！」

…

黒いドラゴンがゼクロムならNもそいつを狙ってるってことだ…なんだかNはまるでプラズマ団の味方に思える…わからないが

とりあえずミカヤとサザはアイリスと一緒にヒウンシティを回ることにしている、俺は待ちに待ったジム戦の方をしないといけないから明日、ジム戦をすることにした

逆鱗（後書き）

それにしても黒いドラゴンポケモン…一体？Nも狙っていたけど

ウィア「けど油断はできないね」

ネツカ「目的はNと同じみたいだけど？」

たしかにね、次回はついにジム戦です

VSアーティ（前書き）

ついにジム戦です

ウィア「僕じゃ虫タイプ對抗できないしな」

大丈夫♪草タイプ特有でいくから♪

ネツカ「さすが草ポケ好き（汗）」

V S アーティ

フォック「たのも〜!!」

そこには蜜の壁があつた

説明するとどうやらこの壁を突き破っていかないとだめらしい

……

数時間後

フォック「はあ…はあ…」

なんとか奥まで進んだ

アーティ「昨日はありがとうー！僕の虫ポケモンが君と戦いたいって騒いでさ」

フォック「そうですね、早速勝負と行きましょうか」

ついにジム戦が始まった

……

アーティの一体目はタイヤのような姿のポケモン、ホイーガというポケモンだ

フォック「ウイア！やどりぎの種！」

まず俺はウイアを出し、やどりぎの種を植えつける

アーティ「ポイズンテール！」

ホイーガはポイズンテールをかます

フォック「避けて！」

ウイアはポイズンテールを避けた

あのホイーガというポケモン…たぶんフシデの進化系だろう、それ
にかなりやるみたい

アーティ「ビシイイ！！スイッチが入ったよ！」

戦いのスイッチなのか（汗）

フォック「グラスミキサー！」

グラスミキサーで命中率を下げさせる

アーティ「なるほどね…ポイズンテールを当てさせないようにする
みたいだね」

そう、ポイズンテールは命中率が低い、なので命中率さえ下げさせ
ればダメージを与えることはできない

フォック「（アレいつてみるか？）グラスストーム！」

俺はウイアにグラスストームを出すよう指示

ウイア『（あの技を…）わかった！グラスストーム！』

草の竜巻が吹き荒れる

アーティ「なんだ？グラスミキサーより強力な草の風だ」

それがホイーガを巻き込む

ホイーガは竜巻で動きが封じられくると回っている、しかも目を回して

竜巻が収まるとホイーガは目を回して倒れていた

アーティ「戻って」

アーティはホイーガを戻す

アーティ「やるね…次はこいつでいくよ！イシズマイ！」

出てきたのは岩の貝を背負ってるポケモン、イシズマイだ

でも

フォック「フレグランスマキサー！！」

フレグランスマキサーがイシズマイを襲う

イシズマイ『うわぁー!!!』

イシズマイは飛ばされた

アーティ「体制を立て直して」

そういうとイシズマイは体制を立て直す、そこに隙をつき

フォック「メガドレイン!!」

メガドレインで体力を吸う

イシズマイは倒れた

アーティ「戻って…」

イシズマイを戻した

アーティ「やるようだねフォック君」

フォック「まあ色々わかったのでこれぐらい対策はしますよ」

だがアーティは笑っていた

アーティ「どうやら僕の最後のポケモンを出すときが来たようだね
…行くよ!ハハコモリ!!」

女王蜂のような姿のポケモン、ハハコモリが出てきた

アーティ「もう虫の息…でもこのハハコモリを倒すことはできるか

な？」

たぶんあのポケモンはクルミルの進化系だろう

フォック「なら…ウイア！戻って！メツパ！行つて来い！」

俺はウイアを戻してメツパを繰り出した

クルミルの進化系でもタイプは一緒のはず、クルミルは草・虫タイプ、つまり炎か飛行には4倍のダメージを与える

アーティ「葉っぱカッター！」

やっぱり！進化系なら葉っぱカッターは使ってくる

フォック「避けて！」

メツパ『行くでー！！』

メツパは華麗に葉っぱカッターを避ける

フォック「エアカッター！！」

メツパはエアカッターを作りハハコモリに放つ

ハハコモリ『うわっ！？』

ハハコモリはエアカッターを食らった

フォック「電光石火！」

アーティ「守る！」

守るを使うとは

フォック「電光石火！」

再び電光石火で攻める

アーティ「葉っぱカッター！」

葉っぱカッターがメツパに当たるがそれでも

メツパ『ワイを舐めんな！！』

電光石火があたった

フォック「エアカッター！」

エアカッターで再び攻める

アーティ「守る！」

守るの体制に入った

フォック「羽休め！」

メツパは地面に降りた

アーティ「なっ！？」

フォック「守るを使うことはわかってるよ、とどめだ！エアブーメラン！」

エアカッターをブーメランのようにして放つ

ハハコモリ『うわあああああああああああああ
!!!!!!!!!!?』

ハハコモリは倒れた

.....

アーティ「あうう、負けちゃったよ……それにしても君、すつごく強いんだねえ、これジムバツジ！僕に勝ったからあげる！」

俺はビートルバツジをゲットした

V S アーティ (後書き)

えゝやつと3つ目のバッジゲットです

ネツカ「今回僕の出番なかったね(汗)」

ごめん(汗)色々あるから

ウィア「かなりやばかったよ(汗)」↑草タイプ

えゝ次回もお楽しみに

ライモンシティへ（前書き）

えゝ今回はライモンシティです、ネタバレ注意です
ではどつぞ

ライモンシティへ

俺は今4番道路を進んでいる、アララギ博士から連絡でライモンシティへと向かっている

まあ砂漠を歩いてるけどね（汗）

これが結構辛い（汗）

途中寄り道したけど、とりあえず向かった

……

フォック「アララギ博士！」

アララギ「ハイ！フォック！」

俺はアララギ博士の用を聞いた

アララギ「カミツレに呼ばれて電気タイプのポケモンの事、色々聞かれている時に君や君の仲間の事思い出して……で、用事というのはこれ！ドローンとサービスよ！」

渡されたのはハイパーボールという黄色のボールだ

アララギ「一緒にいたいポケモンと出会ったらおしむことなくいいボールを使いなさいな、そのポケモンとの出会いはそれが最初で最後かもしれないんだから！じゃあね！」

アララギ博士は去った

用って（汗）

……

ライモンシティについたとたん

フォック「ん？あいつらは！」

それはプラズマ団だった、しかもおじいさんが襲われそうだった

フォック「あれって？育て屋のおじいさんじゃないか！？」

そう、3番道路の育て屋のおじいさんだ

プラズマ団1「じいさん！あんたが育て屋ってのは知っているんだ！なんだって俺達プラズマ団だからさ！」

プラズマ団2「俺達人のポケモン奪ってんだよ、育て屋といったら、色んなポケモン、預かってんだろ、それを俺等によこせよ！」

あいつらしつこい（怒）

じいさん「なんという無茶を！」

そして俺に向ける

じいさん「おお！強そうなトレーナーさん、助けておくれ」

助けるつもりですけど（汗）

プラズマ団1「邪魔をするならお前のポケモンを奪うぜ！ミルホツグ！」

フォック「マツハパンチ！」

俺はネツ力を繰り出しミルホツグを戦闘不能にした

プラズマ団1「なっ！？」

フォック「その程度か？いい加減あきらめたらどうなんだ？」

プラズマ団1「ならヤブクロン！」

出てきたのはごみ袋のようなポケモン、ヤブクロンだ

フォック「はあ、メッパ、エアブーメラン」

メッパ『まかしとき』

メッパのエアブーメランによってヤブクロンも戦闘不能にした

プラズマ団1「プラーズマー！うぎゃあ！！？」

プラズマ団2「なんだコイツ！ひとまず逃げるとするか！遊園地でやり過ごそう！」

結局逃げた

こいつらしつこいにもほどがある（汗）

じいさん「ありがとうよ！こいつは気持ちじゃ、遠慮せずにもらつてくれ！新品の自転車でライモンシティを観光する予定だったが…結局乗らずじまいでな」

俺は自転車を手に入れた…マジ！？

じいさん「ふう、観光に来てエライ目にあつたもんじゃ！」

じいさんは去った

まあ色々観光しますか

……

ミュージカルでグッズケースをもらってきたとりあえずワイアに着てもらおう

ワイア『大丈夫？僕不安だけど（汗）』

不安そうだが

フォック「とりあえずドレスアップしてみよう」

……

ワイア『ど…どう？／＼／＼』

フォック「似合ってるよ」

ウィアのドレスアップはこうだ、黒いシルクハットに黒いリボンとステッキのシンプルなドレスアップだ、次から考えよう

……

出たところで

ん？あの人は

????「あら？あなたは？」

フォック「俺はフォックと申します、あなたは？」

その女性に言う

????「カミツレと申します、この町のジムリーダーやモデルをしています」

どうやらこの町のジムリーダーらしい、モデルなんだ

カミツレ「ちょっとここに出てきたから気になってね」

そうなんだ

フォック「ああ、そういえばジムの方は？」

そうだジムの方

カミツレ「いいわよ、いつでも来てね、待ってるから」

そういつとカミツレは去った

なんかかつこいいな、あの人……っとジムに行かないと

……

ん？あいつは

俺はゲートをくぐった、そこにいたのはNだった

N「……プラズマ団を探しているんだろう？」

なぜ知ってる

N「彼等は遊園地の奥に逃げて行ったよついできたまえ」

言われるがままついていった

……

観覧車の所についた

N「……いないね、観覧車に乗って探すことにしよう、僕は観覧車が好きなんだ、あの円運動……力学……美しい数式の集まり……」

フォック「御託はいい、乗るんだろ？」

俺は先に乗った、こいつ探す気あるのか？

……

観覧車の中であいつは

N「最初に言っておくよ、僕がプラズマ団の王様」

何っ!?

N「ゲーチスに頼まれ一緒にポケモンを救うんだよ」

道理で同じ考えだと思ったよ（怒）

N「この世界にどれほどのポケモンがいるんだろうか……」

観覧車を降りてそこから

プラズマ団1「N様！」

プラズマ団2「ご無事ですか！」

やつらだ、しかもN様……

N「大丈夫、ポケモンを救うために集まった人も……僕が守るよ、僕が戦う間に君達はここから逃げたまえ」

やっぱりあいつはプラズマ団の仲間……つまり……敵だ!!

N「……さてフォック、僕の考えわかるかい？」

フォック「ああ……わかった……」

N「その言葉、本当だと嬉しいね」

本当じゃねえよ

N「さて……僕に見えた未来、ここでは君には勝てないが逃げるプラズマ団のため相手してもらおうよ」

やはりあいつを倒すしかないな

……

フォック「秘密の力！」

最後のポケモンを倒した

N「結果は一緒だった……でも君は何者なんだ？」

俺が勝った、お前が敵なら容赦しねえよ

N「……君は強い、だが僕には変えるべき未来があるそのために……！僕はチャンピオンを超える、誰にも負けない存在となり、すべてのトレーナーにポケモンを解放させる！君がポケモンと一緒にいたい……！そう望むなら各地のジムバッジを集めポケモンリーグに向かえ！そこで僕を止めて見せるんだ」

フォック「なるほどな……テメエを元々は止めるつもりだけどな」

怒りがこもった口調で俺は言う

N「それほどの強い気持ちでなければ僕は止められないよ」

そう言くとNは去った

あいつがそういうなら…俺はその目的を崩す!!

俺は…怒りの龍なんだから…

ライモンシティへ（後書き）

Nの正体がプラズマ団のボスというか王様とはね〜

ネツカ「チャンピオンを超えるって…つまり」

ビクト（ビクティニ）「止めないと…僕がフォックを認めたほうに…助けないと」

そうだな…このまま奴らの思い通りにはさせないよ！

ウィア「うん！」

VSカミツレ シャイニングビューティ（前書き）

ついにカミツレと対決です

ネツカ「がんばらないと」

ウィア「電気でも負けないよ」

うん、ではどうぞ

最初に現れたのはモモンガのようなポケモン、エモンガ

まあこいつには静電気があるから直接攻撃できないから（汗）

フォック「ならビクト！」

俺はビクトで対抗する

カミツレ「幻のポケモン、ビクティニね…どんな実力が試させてもらうわ、おいうち」

いきなり悪タイプ技

ビクト『うわっ！？』

ビクトはエスパータイプと炎タイプ、悪タイプには効果は抜群

カミツレ「さすがは幻のポケモンね、一段と輝いてる」

褒められてもね（汗）

フォック「念力！」

念力で動きを封じようとしたが

カミツレ「飛んで！」

飛んで避けようとした

カミツレ「おいうち！」

再びおいうちがビクトにヒットする

フォック「やばっ!？」

カミツレ「エレキボール！」

電気のボールがビクトに襲い掛かる

ビクト『うわああっ!？』

ビクトは戦闘不能になった

フォック「ごめんねビクト、ゆっくり休んでね」

俺はビクトを戻した

カミツレ「念力で封じるなんてね…でも甘かったね」

たしかに俺が甘かった(汗)ごめんビクト(泣)

フォック「ワイア！」

俺はワイアを繰り出した

カミツレ「草タイプ？エモンガにはいまひとつよ？」

エモンガは電気・飛行タイプ、たしかにいまひとつだけど

フォック「それでも俺は負けませんよ、やどりぎの種！」

俺の十八番、やどりぎの種がエモンガに巻きつく

エモンガ『うわあああああああああああつ！
!!!!!!!!!!!!!!?』

フォック「成長！そしてフレグランスミキサー！」

フレグランスミキサーでエモンガにダメージを与えた

エモンガ
うゝ
…

目を回して戦闘不能になった

カミツレ「戻って」

エモンガを戻すカミツレ

カミツレ「どうやらかなりやるみたいね」

フォック「対策ぐらいはしてますから」

弱点ぐらいはわかってるからそれぐらいだけど、まあ草タイプ好きだし

カミツレ「次は…この子」

またエモンガだ

フォック「クミ！」

俺はクルマルから進化させたポケモン、クルマユを繰り出した

カミツレ「つばめ返し！」

飛行技か

フォック「守る！」

守るで防いだ

フォック「戻って！」

クミを戻した

フォック「ヒヤリル！」

俺はヒヤリルを繰り出した

ヒヤリル『どうします？フォックさん？』

まずは

フォック「リフレクター！」

しかし

カミソレ「ボルトチェンジ！」

！？

ヒヤリル『きゃっ！？』

ヒヤリルはダメージを受けた

フォック「大丈夫！」

俺はヒヤリルに声を掛ける

ヒヤリル『心配いりません』

どうやら大丈夫のようだ…ん？

エモンガが戻った？

そして出てきたのはしましまに二つの白い角に白い尻尾

シママの進化系、ゼブライカだ

フォック「戻って」

俺はヒヤリルを戻して

フォック「ワイア！」

ワイアを繰り出した

カミツレ「ボルトチェンジ！」

まただ

ウイア『よっと』

ウイアは避けるが

ウイア『うわっ！？』

方向転換して当たってしまった

出てきたのはまたエモンガ

でもこれで

フォック「やどりぎの種！」

やどりぎの種で体力を奪わせる

カミツレ「つばめ返し！」

フォック「リーフブレード！」

カキーン！

フォック「（静電気はわかってる…でも！）」

フォック「メガドレイン！」

メガドレインがエモンガに当たり、エモンガは倒れた

カミツレ「やるね…でもゼブライカを倒せる？」

倒すさ…絶対に…あいつを止めるために！

カミツレ「ドラマチックに勝つにはピンチが必要よ、でもこの子を倒すことはできる？」

フォック「それでも俺は負けません…やどりぎの種」

俺はやどりぎの種を繰り出す

カミツレ「避けて」

紙一重で避けた

フォック「連続でやどりぎの種だ！」

ウイア『え？でも？』

フォック「早く！」

俺はやどりぎの種を連続で命じた

ウイア『わかった！』

ウイアは連続でやどりぎの種を繰り出した

カミツレ「何度やっても同じよ」

ゼブライカは避ける

俺はボルトバッジを手に入れた

これで半分

カミツレ「あなた……次はホドモエシティには行くの？」

フォック「次のジムがあるところですね、行きますけど？」

そういえば修行してたけど、あそこに渡れないんだった（汗）

カミツレ「アツ……でもいけないわねきつと、そうね……私が渡れるようにするわ、5番道路で待っていて」

俺は5番道路へと向かった

……

カミツレ「待ってたわ」

フォック「それじゃあ行きましょう」

俺とカミツレが歩いていると

????「おお！カミツレではないか！」

声を掛けたのはたてがみのような赤い髪の男だ

????「フェスティバルはよいな！人生は楽しまねばな！」

フォック「この人は？」

俺はカミツレに声を掛ける

カミツレ「アデクさん、イッシュ地方のチャンピオンよ」

チャンピオン！？

まさかイッシュ地方のチャンピオンが出てくるとは！？ってかなんでチャンピオンがこんなところで遊んでるんだ（汗）

アデク「こりやまだ若い奴だの、初めまして、わしの名前はアデク、イッシュポケモンリーグのチャンピオンだよ」

フォック「初めまして（汗）そういえばなぜ遊んでるんですか？」

俺はアデクさんに質問した

アデク「わしは遊んでいるのではなく、旅をしているのだ！イッシュの隅々まで知ってるぞ」

フォック「俺はフォックです、まああなたと同じ旅ですが」

アデク「うむ！お前さんも旅をするとは、旅は素晴らしいことだ、君はチャンピオンになるつもりはないのか？」

チャンピオンか…考えたことないな…俺、ポケモンで作者だから（汗）そこはいえないし、俺も監視だしな、世界の

アデク「わしは色々な人達にポケモンを好きになってもらう、その

ことも大事だと考えるようになってな」

そうなんだ

アデク「彼女達と遊んでみれば少しはわかってもらえるかもな、君で彼女達とポケモン勝負をしてみないか？」

アデクが彼女達を呼ぶ

アデク「おーいお前達、ちょっとおいで」

来たのは幼児の二人

なのでダブルバトルでやることに

V S カミツレ シャイニングビューティ（後書き）

まさかのチャンピオン登場（汗）

ネツカ「強そう（汗）」

ってかチャンピオンって若い方いるし、まあ今回は強そうなチャンピオンだなと思うし

カミツレ「そりゃそうよ、アデクさんは強いわ」

ってかなぜカミツレあなたが（汗）

カミツレ「どうせだから」

（汗）

おろされた跳ね橋（前書き）

えゝバトルです、そして…

ではどござ

おろされた跳ね橋

幼児の二人はハーデリアを繰り返した

フォック「リーフブレード！メツパはエアカッター！」

リーフブレードとエアカッターが二匹を襲い戦闘不能となった

え？リーフブレードは一匹のはず？実は二つのリーフブレードを繰り返したんだ、剣を使う俺にはいい技だから♪

アデク「お前達！勝てなかったがいい勝負だったな！ポケモンも嬉しそうだったし」

俺に向ける

アデク「さて若者よ、君のような強さを求める者がいれば彼等のようにポケモンと一緒にいるだけで満足する者もいる」

たしかにそのとおり、このチャンピオン、かなりできる！

アデク「いろんな人がいるのだ、答えも色々ある、君とわしの考えるチャンピオンが違っていてもそういうものだと思ってくれい！」

フォック「はい！そう思います」

アデク「いい返事だ」

俺の頭を叩く

カミツレ「……さ、行きましょ、ホドモエの跳ね橋はもうすぐよ」

あの人のいつてること…正しいよ…あいつは…何もわかってない！
…なら俺も強くなって止めないと

……

カミツレ「さてと連絡」

カミツレは誰かと連絡している

カミツレ「私です、跳ね橋だけとおろしてよ、あなたに挑戦したい
ってトレーナーがいるの、はい、よろしく」

そこでライブキャスターを切った

多分電話の相手は次のジムリーダーだろう

カミツレ「さ、見えて！」

すると跳ね橋がおろされた

カミツレ「テレビの仕事があるから私ここで帰るわね、次の町のジ
ムリーダーはクセのあるおっさんだけど」

おっさんって（汗）

カミツレ「かんばってね」

カミツレは去った

フォック「俺も行きますか」

俺は橋を渡って次の町へ

おろされた跳ね橋（後書き）

次はおっさん相手かゝ

ネツカ「あのおじいさん、というかアデクさんだったよね？あの人優しいね」

うん、ポケモンと接しているし、なんかすごいよ

ウイア「いずれ戦う相手でしょ？」

ま…まあそうだけど（汗）

ネツカ「戦いたいね」

そうだね

ホドモエシティ（前書き）

え〜ついにホドモエシティです

もちろんネタバレなので、ではどつぞ

ホドモエシティ

ホドモエシティは雨が降っていた、俺がリザードンだったらやばかったしな（汗）

それにこの跳ね橋はある美しい姿から別名リザードン橋とも呼ばれている

別名がリザードン橋ね

まあ俺の姿人間だけど本当はリザードンだけだね（汗）

俺はその先の橋を渡りある者に遭遇した

西部劇で被る帽子に茶色のスーツ、しかも年はおっさん

????「フン！お前がカミツレの話していたトレーナーか、わしがこの町のジムリーダー、ヤーコンだ！」

このおっさんがジムリーダーか

ヤーコン「歓迎なんかしないぞ、なにしろ橋を降ろしたせいで捕らえていたプラズマ団が町中に逃げてしまったからな！」

何っ！？

フォック「面倒なことになったな（汗）橋を降ろしてくれたのは感謝します、でもそれは無関係じゃないですか？」

そういうが

ヤーコン「何度でも言え、大事なのはお前が来た……そしてプラズマ団が町中に逃げて行ったということだ、自分でも強引だと思うが
お前もプラズマ団を探せ、すくうで凄腕のトレーナーなんだろう？」

まあそうだけど（汗）なんだこの頑固がんこなおっさんは（汗）

ヤーコンは去ろうとして足を止めた

ヤーコン「そうだな……プラズマ団を見つけ出したらジムで挑戦を受けてやるぞ！人生はギブアンドテイク！」

そう言って去った

はあ〜こいつらもしつこいな（汗）

しょうがない…探すか

……

冷凍コンテナ

フォック「寒っ！？」

中は寒かった

フォック「とりあえず…炎の守り」

俺は力を込める、すると俺の周りに見えない炎が現れる

フォック「これでOK」

これは俺を暖める守り、それだけじゃなく、バトルの時だって相手が近づけば体力を消耗できる、ただし炎タイプには効かないからな
（汗）さっさと調べよう

……

フォック「さて…あらかた調べたけど後は…ん？」

あのコンテナだけ空いてる

フォック「誰がいるな」

行ってみると

8人で七賢人の一人、紫の帽子を被っている老人を暖めてる（汗）
アホだこいつら（汗）

????「お前達、もっと私をくるめ、寒くてかなわんぞ……」

俺が駆けつける

フォック「本当に隠れてたなんてな、寒いなら外まで案内してやる
うか？」

と、俺は忠告？する

????「今預かっているのは王の友達であるポケモン」

あいつか…N

????「こんなところで傷つけるわけにはいかぬ、お前達、こやつらを蹴散らせ」

プラズマ団「わかりました、七賢人様！というわけで俺達が相手だ
！」

フォック「はあ…しょうがない…みんな…大丈夫？」

みんなの様子を見る

ウィア『寒いけど、なんとか止めないといけないし』

ビクト『僕は平気』

そりゃビクト、お前が炎タイプだからだろ（汗）

まあいいや

フォック「まとめてかかってこいよ」

プラズマ団「ならお望み通りやってやる…！」

みんな一斉にかかってくる

……

ドガッ！バキッ！ドガッ！ゴスッ

プラズマ団男1「ぐわっ！？」

プラズマ団女1「きゃっ！？」

プラズマ団男2「ぐはっ！？」

プラズマ団女2「きゃあっ！？」

どんどん倒され、残り半分も倒す

フォック「これでOKだな」

そこに

ヤーコンと作業員がやってきた

ヤーコン「おお！こんな寒いところに隠れていたとはな！お前達、このポケモン泥棒を連れて行け！」

作業員『ラジャー！！』

全員捕らえた

ヤーコン「お前、ちょっとはやるな、さて約束だ！俺様のジムに挑戦しにこい！」

ヤーコンは去った

はあ、こいつらのやってること、ポケモンがいなくなると同じじゃん、まったく面倒な連中だな、幸い七賢人の一人を捕まえたし（ヴィオって奴だったな）

さて、ジム戦と行こうか！

ホドモエシテイ（後書き）

えゝ七賢人の一人が捕まりました（黒）

ネツカ「黒いよ!？」

ウィア「まあこれで六賢人になるね」

まあそうだね、次回はいよいよジム戦、がんばらないと

V S ヤーコン (前書き)

ついにジム戦です

ネタバレなのでここまで進めてない方は見ないことをオススメします、ではどうぞ！

V S ヤーコン

今俺はジムに向かっている

ん？あいつは！？

ジムの前にはゲーチスとプラズマ団の連中が

ゲーチス「ヤーコンさん、初めまして、私プラズマ団のゲーチスと申します、お世話になった同士を引き取りに来ました」

ヤーコン「いやいや、礼はいらんよ、あんたのお仲間がポケモンを奪おうとしていたんでね」

まあたしかにそうだな

ゲーチス「おや、誤解があるようで」

誤解？

ゲーチス「私どもはポケモンを悪い人から逃がしているだけですよ」

ヤーコン「そうだといいがね、ワシは正直者ゆえ言葉づかいが悪い、それに反してあんたは言葉が綺麗だがどうも嘘臭くてな、で、なんだと言っただ？」

ってか悪い人〃お前等だろうが（怒）

ゲーチス「プラズマ団としてもホドモエシテイに興味がありまして、ここにいる以外にもたくさんの部下がいるのですよ……」

そうなると厄介だな

ヤーコン「……その言葉、嘘かほんとかわからんが戦わずして勝つとはね、大したもんだよ、フン！わかった、こいつらを連れて帰るな！」

つておい！？

ゲーチス「さすが鉱山王と呼ばれる商売人……すばらしい判断力の持ち主であられる、ではそちらの七賢人を引き取らせていただきます……」

部下とヴィオは解放された

何考えてんだ！？あのおっさん！？

ヴィオ「ゲーチス様……ありがとうございます……」

ヴィオはお礼を言う

ゲーチス「よいのです、ともに王のため働く仲間……同じ七賢人ではないですか、それではみなさん、またいつの日かお会いすることもあるでしょう」

ゲーチス達は去った

あのゲーチスという野郎（怒）今度会った時は一発殴る（怒）

ヤーコン「すまないな、せっかくプラズマ団を見つけたのに」

フォック「いや、いいです（怒）」

俺は怒りがこもった感じにおっさんを睨む

ヤーコン「うつ、そんなに怒るなよ（汗）まあ気を取り直してポケモン勝負と行くか！」

フォック「あなたには全力で倒しますから…覚悟してください（怒）」

さらに睨む

ヤーコン「（こいつ…怖い（汗））わかったから怒るな（汗）それに町中で暴れてちゃ困るだろ？じゃあ待ってるからな、あまりワシを待たせるなよ」

ヤーコンはジムに入った

なるほどね…ここで争えば町に被害が出るな、まああのゲーチスにはたっぷりと痛めつけてやる（怒）

というわけでジムに入った

……

リフトで最下層まで来た、緑の大きな宝石の所にヤーコンがいた

ヤーコン「さてと……ジムリーダーのカミツレがお前の何を気に入ったのか、そのおてなみ拝見させていただくか」

フォック「お好きに」

戦いの火蓋が切って落とされた

……

ヤーコン「地ならし！」

フォック「かわしてやどりぎの種！」

今1体目を倒して2体目に挑んでる

出てきたのは頭と両腕にドリルがつき、逞しい体をしてるポケモン、ドリュウズだ

進化前が地面だけど進化したら鋼タイプが加えられているから、厄介なんだよね

フォック「メガドレイン！」

ヤーコン「中々やるな、岩なだれ！」

岩なだれがウエアに襲い掛かる

フォック「かわしてメガドレイン！」

ウエアはかわしながら攻撃する

ヤーコン「ドリルライナー!!」

両腕のドリルがワイアに迫る

フォック「リーフブレード!!」

スパッ

ドリルを斬りつける

ヤーコン「やるな」

フォック「そっちもね、おっさん」

かなり強い、このドリュウズ、でも

フォック「切り裂け! シザーリーフブレード!!」

ワイアの両腕から緑に輝くエネルギーで出来た剣で斬りつける

ドリュウズ『ぐわああああああああああっ!!!!!!!!!!

!!!!!!!!!!?』

ドリュウズは戦闘不能になった

ヤーコン「やるじゃないか! (なるほど... カミツレがそこまでこいつを気に入ったのは... 面白い!)」

全力のバトルが続いた

……

ヤーコン「まいったね…なるほど、気に入らないな！年齢の割には堂々たる戦いっぷり、お前に才能を見出す人間がいるのもわかるってもんだ、フンッこいつを持っていけ！」

クエイクバッジを手に入れた、これでバッジは後3つ

ヤーコン「やるなあ、そうだお前、6番道路の先にある洞穴の前で待っている！」

えっ？

フォック「わかった…そうだ…あんたにも俺が何者なのか教える、あんたの指名した場所でいいか？」

ヤーコンは少し驚いた表情をしたがすぐにいかつい表情に戻り

ヤーコン「ああ、わかった」

俺は一足先に6番道路の洞穴に向かった

Vsヤークン(後書き)

次回は…俺の…ところにはばりません

進む道…正体（前書き）

えゝ次の町に行きますが、その前にヤーコンの方です

ではどうぞ（ネタバレになるので進んでない方は見ないほうがいいですよ）

進む道…正体

6番道路、電気石の洞穴

フォック「たしかここに待っていればいいって言ってたな」

すると

ヤーコン「待たせたな」

そこにヤーコンがきた

ヤーコン「これはデンチュラという電気タイプのポケモンの巣だな、なんでこんなところに巣があるのかわからんが困っている人間がいるなら何とかするのもジムリーダーよ」

そこでヤーコンはワルビルを繰り出した、このポケモンはメグロコの進化系だ

ヤーコン「やれい！ワルビルっ！！」

ワルビル『ラジャー！！』

ワルビルは巣を攻撃した

すると巣は消えて

ヤーコン「これで行けるようになる、そういえばお前さんが何者と

かだったな？」

そう、そう言った

フォック「あんたには見せるけど…他の奴等には内緒にしてくれ…
そして…この姿を見たら驚かないと誓うか？」

そう言う

ヤーコン「わからないがいいだろう」

フォック「わかった…はあっ！！」

すると炎がフォックを包み込んだ

そこにはフォックの姿はなく、代わりに一匹のポケモンとなった

ヤーコン「その姿は！？」

フォック「そう、俺はリザードンのフォック、世界を監視する役目
をしている」

そう話すフォック

ヤーコン「まさかお前自体がポケモンで…しかもしゃべるとはな」

フォック「まあね、それにポケモンの言葉わかるからなおさらだよ」

少し驚いた表情を見せたヤーコンだが、元の表情に戻る

ヤーコン「で？何者はわかった、だがお前の目的はなんだ？」

目的をきかされフォックは答えた

フォック「プラズマ団を壊滅させる、今のイッシュ地方を見て、奴等を野放しにするわけには行かないから」

目的はプラズマ団の壊滅、目的がああ黒いドラゴンポケモンを狙っているのだから

ヤーコン「なるほどな…ならあんたの事はしゃべらない、あんたが別の奴等に話すなら話は別だが」

フォック「そのうち話すつもり、でも今はあんに話しておくよ、まあばらしたらどうなるかわかるよね？」

口から炎が漏れる

ヤーコン「わかった…あんたの事は内緒にしておく」

フォック「これでお互い様」

フォックはニヤリと笑う

ヤーコン「ワシにはお前の才能がどれほどのものかわからんがいけると思うならどこまでもやれると思うならいつまでも好きなようにやればいいじゃねえか、限界を決めるのは自分ってことだ、お前もがんばりな…リザードンさんよ」

そう言ってワルビルをボールに戻して去っていった

俺は人間の姿に変わり、電気石の洞穴へと入った

進む道…正体（後書き）

えーヤーコンのおっさんにばらしました

ヤーコン「さすがに俺様もおどろいた」

ってかワシか俺様どっちかにしなよ

ヤーコン「そう言われてもな（汗）」

次回はフキヨセシティへ

N再び〜洞穴の戦い〜（前書き）

え〜タイトル通りあいつです

ネタバレなので注意です

ではどうぞ

N再び洞穴の戦い

電気石の洞穴に入った俺は早速ある奴を発見した

フォック「(N...)」

そう、Nだ

俺はNに近づこうとしたその時

シュン

!?

俺をはさむように何処からか謎の二人が現れた

?????「.....こい」

そういいNの元に連れてかれた

?????「.....N様、連れてきました」

そう言うと二人は去った

N「.....ありがとう、今の連中はダークトリニティ」

ダークトリニティ?

N「ゲーチスが集めたプラズマ団のメンバーだよ、ちなみにこの洞穴の入口にデンチュラの巢を用意したのも彼等らしいね」

なるほど…そいつらがこの洞穴の入口を防いで、通行の邪魔をしたってことか

N「電気石の洞穴……ここいいよね、電気を表すのは数式、そしてポケモンとのつながり……人がいなければ僕の理想の場所だ」

お前の理想でもなんでもないがな、ポケモン達が逆に困る

N「さて、君は選ばれた……そういうと驚くかい？」

フォック「それが？」

俺はあまり驚いた表情をしていない

N「……フウン、やはり意味がわからないと驚くこともできないか」

何を言っているんだか

N「君達の事をゲーチスに話した、するとダークトリニティを使い、君達のことを調べたらしいよ」

俺達の事を調べたか、フライバシーに値するな

N「まずはワユは剣聖で心情に勝負する、キルロイは優しく、回復を使う、トパックは魔導師で元気のある若者、ムワリムはそのトパックのパートナー、だが君はわからない、怒りを感じるがなにもわからない、それがいいらしいんだ」

フォック「名前や情報を知ってるとはね…さすがプラズマ団の王って言われた存在だな…」

俺は怒るようにいう

N「僕は王だ、僕はチャンピオンを超える存在になるのだから、この先でプラズマ団が君を待っている、ゲーチスは君がどれほどのポケモントレーナーか試すそうだよ」

Nは先に進んだ

俺の実力か…奴の罠の可能性も考える…だがそれでも

フォック「俺は行く！…それでも…」

俺は先に進んだ

……

????「おい！」

俺は邪魔な電気を帯びた岩に来ていた、そこから

フォック「トパック！それにムワリムまで！？」

ムワリム「実は私達だけじゃなくて…博士まで来てます」

そこに

アララギ「ハイ！元氣してる？フォック！」

フォック「アララギ博士！」

アララギ博士が来た、博士は洞穴をみわたし

アララギ「相変わらずここ、ポケモンが好きそうな電気をたっぷり
帯びているわねー！」

そりゃね（汗）

アララギ「だから電気と電気が反発しあって浮かぶ石があるんだよね、もつともすべての石を押せるわけじゃないけど、私はね、パパに頼まれてギアルって歯車みたいなポケモンの事調べているの」

たしか見たな、ギアルってポケモン、でもパパって誰だ？

アララギ「私がポケモンの紀元……生まれ^{きげん}た時期を調べているから
って人使いが荒いよね……もつとも私も好きで調べているから楽し
いんだけどね！そうだ！フォック、これを持っていきなさいな！」

渡されたのは幸せタマゴだった

これは経験値をさらに増やすアイテムだ

フォック「所でなぜトパック達が来てるの？」

俺はトパックに聞いた

トパック「オイラ達はアララギ博士のボディーガード」

ムワリム「そうです、なので先に行ってください」

フォック「わかった」

俺は先に進んだ

……

フォック「ふう」

そこから

アララギ「ハイ！何か見つかった？こっちはおおよそのデータを
集め終えたところかな、この洞穴ははるか昔からあるんだけど……
ギアルが存在したと証明できるデータは100年より先になるとま
ったく見つからないの」

100年より先！？

アララギ「そう！ギアルは100年前に突然発生した……そういう
ことになるの！ポケモン達は何処から来たのか、そして何処へ行く
のか……それを知ることができれば私達はもっと仲良くなれる、そ
う信じているのよね！」

トパック「なあフォック！ポケモンって不思議だな！どうしてこん
なにすごい奴等がオイラ達と一緒にいてくれるんだ？」

フォック「そうだな…先に行くよ」

俺はさらに先に進んだ

……

橋に差し掛かったところで

シュン

またか…しかも三人

?????「……………」こい」

橋を渡った

?????「……………」この先の下に降りる階段がある、そこでプラズマ団がお前を待ち構えている」

シュン

この先か…こいつら忍者か（汗）

俺はこの先の階段を降りた

……

フォック「どけえ!!」

ドカー—————ン!!

プラズマしたっぱ「ぐわっ!?!」

フォック「さて…ゲーチスは何処だ」

俺はしたっぱに聞く

したっぱ「う…上です…」

俺は上へと上がった

……

俺は上に上り、そこにあいつはいた

N「多くの考えが交じり合い、世界は灰色になっていく……僕にはそれが許せない」

フォック「言いたいことはそれだけか？」

俺は挑発的に言う

N「君にはわからない、でもポケモンと人間を切り離し、白黒はつきり分ける、そうしてこそ、ポケモンは完全な存在になれるんだ、そう！これこそが僕の夢！叶えるべき夢なんだ！」

フォック「叶える夢ね…それでポケモン達が喜ぶとは思えないがな」

俺自体がポケモンだとわかってないお前にはな

N「喜ぶよ！僕の夢だから！フォック！君にも夢はあるんじゃない

か？」

そう聞かれ

フォック「残念だが俺はとっくに夢はない、お前がそんな夢でも結局は何も変わらない」

N「変わらない……夢を持たない人間に僕が理解できるか！」

そう言ったNに俺は

フォック「理解できないね！そんなくだらない夢なんて」

そう挑発的に言った

N「くだらないだと！くっ！……君の……心を折るしかないのか！」

フォック「折ってみろよ、お前には当然無理だけどな！」

その言葉に

N「なら望み通り折らせてもらおう！君の心を！」

Nは勝負を仕掛けてきた

N再び〜洞穴の戦い〜（後書き）

次回はNとの戦いです

もちろんネタバレですので閲覧注意です

折れない心（前書き）

えゝNとの対決です

ネタバレなので閲覧注意です

ではどうぞ

折れない心

N「僕の友達！フォックのポケモン達やフォックの心をへし折るんだ！」

そうNはポケモンに命令した

フォック「残念だがへし折れない、ウイア、とぐろをまくからやどりぎの種」

ウイアはとぐろを巻いて能力を上げ、やどりぎの種を植え付ける

N「ポケモン勝負でお互いが分かち合うと思ってるのかい？」

フォック「お前にはわからないだろう、そんな生半可なものではな」

そう俺は挑発する

N「くっ！言わせておけば！」

フォック「リーフブレード」

そう静かに命令

ズバッ

ガンドルは戦闘不能となった

フォック「この程度か？」

N「ここまで僕が…」

次に繰り出したのはバチュルだ

……

N「くっ！」

フォック「どうした？その程度か？」

Nは戸惑う

N「僕の友達ラブを見せてあげるよ！」

フォック「それは残念、もう決着^{けり}はついてる」

すでにゼブライカのバイコーンがニトロチャージで倒してしまった

N「……どうしてだ？トレーナーである事を苦しく思っまま戦っていても勝てないのか……」

そう言うN

フォック「お前には俺を倒すための足りないものがある、お前にはそれはわからないだろうがな、理想だと？お前の理想など、所詮は夢、そんな風に考えては俺には勝てない」

俺は勝てない理由などをNに言った

N「くっ！こんなことで理想を追い求められるか！伝説のポケモンと……友達になれるものか……！」

そこへ

トパック「フォック！」

そこへトパックが来た

トパック「もうすぐフキヨセシティだな」

そこにムワリムも来た

ムワリム「無事ですか、フォックさん」

フォック「ああ、心配ないよ」

さらにアララギ博士も来た

アララギ「ムワリムさんは耳がいいのね、あんな遠くからでもフォックの声が聞こえるなんて、でフォック、そちらのトレーナーはどなた……？」

トパック「あっ！？」

トパックはNの存在に気付いた

N「……アララギか、トレーナーとポケモンの関係に疑問も持たず、人間の勝手なルールでポケモンを分類しわかったつもりになる……そんなポケモン図鑑が許せないがあなたは何を考えているんだ？」

率直にアララギ博士に聞くN

アララギ「あら……ずいぶんと嫌われているのね、だけどあなたの意見も一つの考え方なら、私の願うところも同じく一つの考え方よ、ポケモンとどう付き合うべきか、それは一人一人が考え決めればいいんじゃない？」

そう答えたアララギ博士

だがNは

N「……それでは間違った考えの人間がポケモンを苦しめる……そんなおろかな世界を僕は見過ごすわけにはいかない！」

そう言っただけ

トパック「やっぱり感じわりい」（怒）

アララギ「まあまあ、いきなりわかってもらえるとは思わないけど少しずついいからみんなの気持ちをわかって欲しいな」

そう、たしかにアララギ博士の言うとおり、少しずつわかっていけばいい

アララギ「さてと……もう少しデータを集めるかなー、私達とポケモンがもっと仲良くなるためにも相手の事を知らないからね！」

アララギ博士は去った

トパック「オイラとムワリムは続けて博士のボディーガードをするよ、なあ？あいつ一体なんなんだ？」

そつえば情報集めてたはず

フォック「ああ…実はな…」

……

ムワリム「なんと…王と呼ばれたプラズマ団のボスですか」

トパック「あいつも頭おかしいじゃねえか？」

たしかに頭おかしいし（汗）

フォック「こっちの方はあまり情報ないみたいだね」

トパック「ああ、こつちも引き続きボディーガードしながら調査するよ」

ここでトパックとムワリムは博士の後を追った

フォック「行きますか…」

俺は洞穴の出口へと向かった

フォック「やっと到着だけど…やっぱり雨なんだな（汗）」

俺はポケモンセンターへと向かった

折れない心（後書き）

人それぞれの考えはわからない、Nは結局はポケモンの気持ちがちつともわかってない感じなんだよね

ネツカ「大体伝説のポケモンと友達って時点で無理があるでしょ！？」

たしかにね

ネツカ「まあ僕もいつの間にか進化してるけど（汗）」↑ゴウカザルになる

まあ次回はジム戦？それとも

アララギパパ（前書き）

アララギ博士のパパとは？

ウィア「誰？」

ではどうぞ

アララギパパ

俺はポケモンセンターから出てジムに行こうとしたとき、男に声をかけられた

男「おお！お前さん！フォックだろ！！」

フォック「そうだけどあなたは？」

男「ちよいとポケモン図鑑見せてもらうよ…おお！ギアルを見つけ
ておるのか！中々のトレーナーだねえ！」

男は興奮している

男「おおすまない！ちと興奮してな、私の名前もアララギ、そう！
お前さんにポケモンと図鑑を託したのは私の娘なんだ！」

つて！？ええ！？

アララギパパ「お前さんの事はあいつから色々教えてもらっていて
ね、ここで会えたのはなんとも嬉しいかぎりだよ！では出会いを記
念してお前さんのポケモン図鑑をパワーアップ！だね」

俺もポケモン図鑑は持っている、俺のポケモン図鑑をパワーアップ
してくれた

まさかアララギ博士の父親が出るとは（汗）

そこから一緒に歩いてきた少女が来た

????「アララギ博士、そちらのトレーナーさんは？」

アララギパパ「おお！おう！すまんすまん、フウロ君こちらはフォック君と言って私の娘の知り合いだよ！ポケモン図鑑完成をめざし伊ッシュを旅しているんだ」

いや俺伊ッシュを旅しているだけだけど（汗）まあポケモン図鑑渡されたから新ポケモンの事詳しくしなきゃだめだしね（汗）

フウロ「そうなんだ！だったらジムに挑戦するでしょ？」

フォック「え…はい…」

すると

フウロ「わあ！とっても楽しみ！！」

アララギパパ「そうだなフォック君、ぜひ挑戦するといいぞ！なにしろこのジムはぶっ飛んでおるからな！」

ぶっ飛んで！？

アララギパパ「ではなフウロ君、また何かあったら頼むぞ」

フウロ「……博士、アタシの飛行機は貨物機です！運ぶのは荷物で人は乗せないんですよ……しかも行き先はカントーとかシンオウとか軽く言っちゃって！」

怒ってるようだ

アララギパパ「おいおい、かわいい顔してそんな固いこと言うな人間は助け合い、ポケモンとも助け合いだ！それでは諸君、また会おうぞ！」

アララギパパは去った

フウロ「……もう！あんないい加減な感じなのに世界的なポケモン博士っていまだに信じられない」

たしかにいい加減に思う（汗）

フウロ「さてとフォック君！ジムに挑戦してくれたらジムリーダーとしてもすごく嬉しいんだけど、アタシその前にやるべきことがあるの」

やるべきこと？

フウロ「さっき貨物機を操縦していたとき、タワーオブヘブンのてっぺんに何か見えたのね、きつと弱ったポケモンだと思うの！だとしたらほうっておけないでしょ？」

フォック「たしかに」

俺も相槌をうつて？言う

フウロ「でしょ！だから先に調べさせてね、ということでは7番道路のタワーオブヘブンに行くんだけどよければあなたも来てね」

フォック「わかりました」

俺はタワーオブヘブンへと向かった

アララギパパ（後書き）

次回はタワーオブヘブンでフウロが見つけたものとは！？

タワーオブヘブン（前書き）

タワーオブヘブンです

ネツカ「一体フウロさんが見たのはなんなんだろうっ?」

ではどうぞ

タワーオブヘブン

タワーオブヘブン

どうやらここは魂が眠る場所のようだ

もしかして…

……

タワーオブヘブン最上階

そこには鐘があつた

フウロ「来てくれたんだ、ありがとう、さっき見えたのってやっぱり傷ついたポケモンでした」

そうだったか

フウロ「だけでもう大丈夫よ！元気の塊を使ってあげたら元気になつて飛んで行ったの！」

フウロは空を見た

フウロ「ウフフ！すぐく目がいいでしょ！パイロットの目はどんなに遠くても見えちゃうのよ！」

なるほどね

フウロ「そうだわ！せっかく来たんだし、あの鐘を鳴らしたらどう？」

フォック「あの鐘を？」

フウロの目の前の鐘だ

フウロ「そう、タワーオブヘブンの鐘はポケモンの魂を沈めるの、しかも鳴らす人の心ねが音色に反映される……」

俺はその鐘を鳴らした

キーン！キーン！キーン！

鐘の音色が辺りに鳴り響いた……

フウロ「いい音色……フォック君は優しくて強い人……そんな音色……ではあらためて挨拶するわね！」

フウロは挨拶した

フウロ「アタシはフキヨセポケモンジム、ジムリーダーのフウロです、使うのは飛行タイプのポケモン、準備が整ったらジムに来てくださいね！大歓迎しますから！」

フウロはジムへと戻った

俺も行くか……

俺はリザードンに変身してフキヨセシティに戻った

タワーオブヘブン（後書き）

ついに次回はジム戦です

V Sフウロく舞い上がる鳥達と動き出す者く（前書き）

さて、ジム戦です

いつもどおりネタバレなので閲覧注意です

ではどうぞ

V S フウロ「舞い上がる鳥達と動き出す者」

フォック「さすがに大砲とは（汗）」

俺は大砲に苦戦しながらもなんとかフウロの元までたどりついた

フウロ「ウフフ、お待ちしてました、アタシ自慢のフキヨセジム、大砲で飛ぶのは楽しかった？」

フォック「まあよかったけど顔がね（汗）」

俺の顔が赤くなっていた

実は壁に激突してしまっただけだったのだ

フウロ「けど面白いよ」じゃあね次はアタシともしっかり楽しむことしましょう！」

戦いの火蓋が切って落とされた

……

フウロ「最初はこの子、来て！ココロモリ！」

出てきたのはココロモリの進化系、ココロモリだ、鼻にはハートのマークに進化してから顔も出てきた

フォック「まずはウィア！」

俺はワイアを繰り出した

フウロ「草タイプ？それじゃあ相性では不利だよ？」

だが

フォック「だけどそれなりの対策はしてるよ…すでにね」

フウロ「え？」

すると地面から植物が生えた

フウロ「えっ！？何！？」

フォック「やどりぎの種をワイアが出た時に植え付けておいた」

その時！？

ココロモリ『きゃっ！？』

ココロモリが引っかかる

フォック「リーフブレード！-！」

リーフブレードでココロモリを斬りつける

フウロ「すごい！油断しちゃったけど、エアスラッシュ！」

エアスラッシュでやどりぎを切り裂いた

フウロ「反撃よ！アクロバット！」

フォック「とぐろをまく！」

補助技で防御などを上げる

フウロ「たしかに対策もバッチリね」

楽しそうに笑うフウロ

フォック「でもこのぐらいはまだ序の口、ここからだよ！」

俺は次の段階に行く

フォック「とぐろをまく！」

とぐろをまくでウィアの攻撃・防御・命中率を上げる

飛行タイプのほとんどが物理が多い、なのでこうして能力を上げてダメージを最小限にさせる

フォック「リーフブレード！」

フウロ「空へ飛んで！」

ココロモリは空へと回避

やっぱそう来たか…でも

フォック「とぐろをまく！」

もう一度補助技をかける

フウロ「一気に攻めるよ！アクロバット！」

ココロモリがワイアに迫る…距離が縮まり…

今だ！！

フォック「リーフブレード！！」

ズバッ！！

リーフブレードがココロモリを斬りつけココロモリは地面へ落ちてしまった

ココロモリは目を回してしまい戦闘不能に

フウロ「あちゃー油断しちゃった」

そう言うとココロモリを戻した

フウロ「でも次はどうか？スワンナ！」

ここ出てきたのは白鳥のようなポケモン、スワンナだ

フウロ「エアスラッシュ！！」

エアスラッシュが来た

ワイア『うわあああああああああああああつ！！！！！！！！！！』

特殊なためワイアは耐えられず戦闘不能に

フォック「ごめねワイア、ゆつくり休んでね」

俺はワイアを戻した

フォック「すごいな…さすが、でも次は…バイコーン…！！」

俺はバイコーンを繰り出した

電気タイプなら効果は抜群、だけど油断はできない

フウロ「アクアリング！」

アクアリングで回復狙いか…なら

フォック「電磁波！」

俺は電磁波でスワンナを麻痺にした

フォック「充電！」

フウロ「バブル光線！」

充電しながら耐えているバイコーン

フォック「今だ！電撃波…！！」

電撃波でスワンナはダメージを受けて戦闘不能となった

フウロ「ゆつくり休んでね…でもアタシは…最後まであきらめない！出てきて！ケンホロウ！」

出てきたのは紫の羽毛に少し灰色の羽のポケモン、ケンホロウだ

フォック「俺はこいつで決める！ドリュウー！」

出てきたのはドリュウズ

こいつは俺が電気石の洞穴でゲットしたのだ、というかまえは進化してなかったけど今はりっぱに逞しく進化したよ

ドリュウ「フォック！いつでもいいぜ！」

フォック「ああ、頼む…まずは爪とぎ！」

早速爪とぎをした

こいつで攻撃＋命中率を上げる

フォック「いわなだれ！！」

ケンホロウはいわなだれを受けた

フウロ「ならエア…」

だが

フウロ「！？ひるんじやった！？」

そう、いわなだれの追加効果でひるんでしまったのだ

フォック「これで最後だ！！いわなだれ！！」

いわなだれがケンホロウに襲いかかり、ケンホロウは岩に挟まり目を回してしまった

……

フウロ「あなたってすごいポケモントレーナーなのね！久しぶりに本気でポケモン勝負できてアタシもポケモンも幸せ♪これはリーグ公認のジムバッジ、あなたに似合うと嬉しいな♪」

俺はジェットバッジをもらった

これで後2つか…

フウロ「……そういえばね、ネジ山を越えてセツカシティを飛んだ時、プラズマ団でしたっけ？町に向かっていたんです……」

えっ！？

フウロ「どういう人達なのかな？」

天然ボケなのか（汗）

フォック「気にしないで、頭おかしい連中だから」

俺はそう言う

フウロ「そうなの？」

フォック「まあ次のセツカシティに行くよ、ありがとう」

そういつて俺は去った

……

俺はジムを出たとたん

！？

N「……分かり合うためといい、トレーナーは勝負で争いポケモンを傷つけあう、僕だけなのかな、それがとても苦しいのは」

じゃあトレーナーやめればいいだけのことだ……苦しいと言ってるお前がおかしいんだよ、しかもこの状況で俺に挑むつもりか

N「まあいい……君のポケモンと話をさせてもらっよ……僕は生まれた頃よりポケモンと暮らし育ったからね」

ポケモンと暮らし育った？

N「まあ、人と話すよりも楽しんだ、だってポケモンは絶対に嘘をつかない」

俺に近づく

N「ジャローダだね……フォックはどんなトレーナーか教えてよ？」

ウィア…

N「……そうかフォックは別の世界に来て一人なんだ、だけどこの世界をまわって旅をしている……とそれにしてもこのジャローダ、なぜだか君を信じている……いいね……！すべての人とポケモンが君達のように向き合うなら、人に利用されるだけのポケモンを解き放たずにポケモン達と人の行く末を見守ることができるのに」

Nは俺から離れる

フォック「そうしても何も意味もない…そうやって自分にすぎるか……」

N「君には到底理解できないけど……ゲーチスはプラズマ団を使い、特別な石を探している」

特別な石？

N「その名もライトストーンとダークストーン」

フォック「ライトストーンとダークストーン……」

一体どんな石なんだ？

N「伝説のポケモンはその肉体が減くとストーンとなって眠りながら英雄の誕生を待つ……そのストーンから伝説のドラゴンポケモンを蘇らせ、友達になり、僕が英雄であることを世界に認めさせ、従

わせる……」

フォック「それでその伝説のドラゴンポケモンがそう認めると思うか？」

俺は認めるとか選ばれるのは誰なのかわからない

N「……でも僕の夢は争うことなく、世界を変えること、力で世界を変えようとすれば逆らう人も出るだろう、その時傷つくのはおろかなトレーナーに利用されてしまう無関係のポケモン達だから、そう……ポケモンは人に使われるような小さな存在じゃないんだよ！」

俺に向ける

N「その結果……君達のようにお互い向き合っているポケモンとトレーナーを引き裂くことになるのは少し胸が痛むけどね」

わかってはいる、ポケモンは生き物だから、だがNの場合はその範囲を通り越しているようだ

Nはそう言って去った

フォック「あいつを理解するには……なんとかしとかなないと……ワイア？ ネットカ？ 聞こえる？」

俺はボールの中にいるワイアとネットカに話す

ワイア『たしかに人間はポケモンを道具として扱う……でもいい奴や悪い奴はいる……Nも何か理由でもあると思うんだ』

フォック「ネツカはどう思う?」

俺はすでにゴウカザルになっているネツカに話す

ネツカ「どうだろう? 僕にはわからないよ、ポケモンだって嘘つき、ポケモンだって戦う、なのにNは傷ついている、バトルだって楽しいと思ってる、でもNにはその気持ちを感ぜられない」

たしかにその通りだ

感情的には結局は何も感じていない…

フォック「ありがとう…でも俺は…」

ウィア『みんなわかってるよ…同じポケモンであり、リザードンでしょ?』

わかってるな

フォック「そうか…じゃあネジ山に行くぞ、奴等はセツカシティにいる、なら行かないとな」

俺はセツカシティへと向かう

V S フウロく舞い上がる鳥達と動き出す者く（後書き）

色んな気持ちもあつたり、相手がどう思つかわからない、でも理由もあつたりする、なんのために戦つか、なんのためにとめるか…色々暗くなつてすみません

次回はネジ山です

ネジ山を越えて（前書き）

ネジ山です

もちろんネタバレなので閲覧注意です

ではどうぞ

ネジ山を越えて

ネジ山

フォック「おっ！ヤーコンのおっさんじゃん！」

ヤーコン「フォックか、ネジ山を視察しててお前に出会ったとはな
ちつとは……たくましくなったみたいだな」

言われると嬉しいな

フォック「まああんただけ正体ばらしちゃったしね（汗）」

ヤーコン「所でフォック……最近プラスマ団を見たか？」

最近？

フォック「どうしたんだ？」

俺はヤーコンに聞く

ヤーコン「あれからジムリーダー達が集まって話あったが、まるで
地に潜っているのかあいつらのアジトがわからなくてなこちらとし
ても出方を待つしかないのだ」

フォック「なるほどね……こっちもトパック達とワユ達に探している
けど情報が一行に来なくてね」

こっちもなにかしら情報はあらずだけどその情報が見つからない
ヤーコン「そうか、まあネジ山はいいぞ！特にワシのお気に入りは
この通路を抜けたときの……」

抜けたときの？

ヤーコン「フムウ……言葉よりも実際に見ればわかるか、じゃあな
…ジムリーダー達にはお前の正体を話した…みんなは驚いているが
誰にもばらしてない」

フォック「そうか…ジムリーダー達なら信用はできるしね、ならい
いよ、こっちも気をつけて」

俺は心配そうに声をかけた

ヤーコン「ああ、よければワシの山でトレーナー修行でもしていけ」

フォック「ありがたくな」

ヤーコンは去った

フォック「さてと…みんな準備はいい？」

みんなに声をかける

ウイア『いつでも大丈夫だよ』

フォック「そうか…じゃあ行こう、あいつらがセツカシティに向か
ってるから」

俺はネジ山に登った

……

フォック「さすがにすごいな」

ネツカ「修行にちょうどよくていいよ」

みんな強くなったと思うけどまだまだ甘いかもね

そんな時

フォック「あれは？プラズマ団？それにいるのは」

プラズマ団「……くっ強いな」

ワユ「まああたし達もポケモンと出会えたからこうやって強い者と戦えるからね」

キルロイ「あなた達には悪いですが、僕達もあなた達が許せないの
で」

ワユとキルロイだ

プラズマ団「だがその強さはお前等トレーナーがポケモンを支配すること
で実現している強さだよな！？」

支配？

ワユ「おかしいじゃないかな？あたし達はただ強い者と戦いたいだけ、尋常に勝負するのがあたしだし」

そりゃワユは尋常に勝負するしな（汗）

キルロイ「……だから君達がポケモンを自由にしたい……そう望むなら君達はそうすればいいですよ、でも力任せにみんなのポケモンを奪うのはどう考えても間違ってるよ、そんなのは強さじゃないよ」

ワユ「そうそう……ってダンナ？いつの間にいたの？」

話してるところから聞いてたよ（汗）

そこへ

プラズマ団2「おお、仲間よ、ここにいたか！例の物が見つかったぞ、さあ、我々も塔に向かおう！」

例の物…まさか！？

プラズマ団2「いいか！プラズマ団はポケモンが支配されているこの世界を変えるための力を手に入れた！」

プラズマ団1「そうとも！間違った世界を正すためなら力づくも当然だ！さて、我等の王様、N様の元に集おう！！」

やつらは逃げた

キルロイ「例の物って一体？」

ワユ「それよりダンナも次のジムへ？」

そうだよ（汗）

フォック「ああ、でもその町にもあいつらの情報があつてな二人は？」

ワユ「あたし達も情報を集めながらジムを回ってね」

キルロイ「でもNって？もしかして？」

俺は色々とこれまでの事を説明した

ワユ「Nっていう青年って、プラズマ団の王様だったんだ」

キルロイ「何か嫌な予感がするよ、ワユさん、行きましょう」

そういつて二人は先に行つた

フォック「奴等の目的は…あれか！？」

俺も急いでネジ山を出た

ネジ山を越えて（後書き）

次回はついに

動き出した時間（前書き）

ついにセツカシティに

ではどうぞ

動き出した時間

俺はネジ山を抜けた

そこにアララギパパがいた

アララギパパ「おう！フォック君、ジャローダの様子はどうかね？」

ウイアか

フォック「はい！ウイアも強くなって俺になつていますよ」

アララギパパ「ポケモン図鑑も大事だが、こうして一緒に過ごす時間がなによりだもんな、ところでお前さん、リュウラセンの塔を知っておるかね？」

リュウラセンの塔？

フォック「いいえわかりませんが？」

アララギパパ「まあな、知らなくても無理はない、よし！お前さんちよいとジジイの話を聞いていけ、リュウラセンの塔とは、このイツシュ地方でもっとも古い建物と言われている、何より伝説のポケモンが生まれた場所とも、眠る場所とも伝わっているな、このセツカシティを抜けた先にあるのだが、詳しいことは何一つわかっておらん、何しろ塔の中に入った人間がいないのでな」

プラズマ団が言ってた例のアレはたぶんあの塔に中だな…奴等…ア

レを狙ってる

アララギパパ「私の娘も中を調べたがっているが、なかにわからないことがある、そういうのもロマンというものだ、というわけでジイはリュウラセンの塔を見物に行くのであった！じゃあな！」

何ストーリーリーみたいな感じに言ってるんですか！？

アララギパパは去った

とりあえずセツカシティでポケモン休ませてから行きますか、でもその前にジムは大丈夫みたいだから行きますか

動き出した時間（後書き）

次回はジム戦です

氷の戦いゝ塔へゝ（前書き）

ジム戦です、さらに塔へ向かいます

ではどうぞ

氷の戦い〜塔へ〜

俺の前にはマスクをかけている男がいた

????「ジムリーダーに挑む、心の準備、できているようだな、
ではいざ!」

このジムのジムリーダーハチクさんだ

……

フォック「いわなだれ!」

最後のポケモンにドリユのいわなだれが決まった

ハチク「君とポケモンとのすばらしいコンビネーション!うるわし
き友情!強き心を持つ者よ、これを渡そう」

アイシクルバッジをゲットして残るは一つ

俺は急いで塔へと向かう

……

ハチク「待ちなさい」

俺はジムへ出たときにハチクさんに止められた

フォック「ん？」

俺は何かを感じた

ハチク「姿を現したらどうなんだ？」

すると出てきたのは

フォック「ダークトリニティ！？」

そう、ダークトリニティだ

ダーク1「……………さすがはセツカのジムリーダー、影の存在である我等ダークトリニティに気付くとはな」

ダーク2「……………フォックだけに伝えるつもりだったがまあいい、ゲ―チス様からの伝言だ、リュウラセンの塔に来い」

ダーク3「……………そこでN様がお前を待っておられる、しかと伝えたぞ」

リュウラセンの塔に来いだと

ハチク「リュウラセンの塔！？どついうことだ……………おい！きちんと……………」

シュン

ハチク「！！フォックと言ったな」

俺に話すハチクさん

ハチク「今からリュウラセンの塔に向かう！」

????「ちよつと待った!!」

そこに

フォック「トパック!？」

トパック「オイラも行く！」

ムワリム「セツカシティのジムリーダーさん、私達も来てよろしい
でしょうか」

なんと二人が行きたいらしい

フォック「何かわかったのか？」

すると

ムワリム「大変なことになります、とにかくリュウラセンの塔に行
かないと！」

なにか情報を掴んだようだ

ハチク「なら一緒に来てくれないか？」

二人はうなずき、ハチクと一緒にリュウラセンの塔へ

ワユ「ダンナ」

そこにワユとキルロイがかけつける

ワユ「あたし達も今からリュウラセンの塔に行こうと思ったの」

キルロイ「どうやらトパック君が情報を持ってきたらしくて…僕達も行くんだ」

どうやら何か情報を持ってきたらしい

ワユ「ライトストーンとダークストーンだったけ？」

キルロイ「そうです、僕達も行きますので」

二人も後を追った

フォック「やはり狙いは!？」

俺も塔へと向かった

氷の戦いゝ塔へゝ（後書き）

次回…衝撃が！？

リュウラセンの塔へ復活するドラゴンポケモンへ（前書き）

遂に動き出す、闇が

リュウラセンの塔へ復活するドラゴンポケモンへ

リュウラセンの塔

アララギパパ「おおフォック！実はな、大変なことがあった、状況を説明するぞ」

アララギパパが状況を説明する

アララギパパ「大勢のプラズマ団が塔の壁を突き破り、中に入ってしまったんだよ」

フォック「なんだって!？」

あいつら!？

アララギパパ「ハチクと……トパックという青年とムワリムという人とワユとう明るい女の子とキルロイという穏やかな人がプラズマ団を追いかけて行ったが……」

アララギパパ「実はな……ここの最上階では伝説のドラゴンポケモンが理想を追い求める人間が現れるのを待っていた……そう伝わっておる」

やはりNも狙っている、こうしちゃられない

アララギパパ「プラズマ団を追いかけるのか？」

フォック「はい」

そう言うが

アララギパパ「だがプラズマ団相手にことを構えるのはあまり感心
でkingが……」

フォック「それでも俺は大丈夫です」

忠告されたがそれをあつさり否定した

アララギパパ「わかった、これを」

手渡されたのは森のヨウカン

状態異常を治す食べ物だ

アララギパパ「それにしても……プラズマ団め、何を狙う……？」

俺は塔の中へ

……

ズズズーン！

フォック「わっ！」

上で何かが暴れている

俺は上に上がった

……

????「おい！」

声が聞こえた

そこには

フォック「トパック！」

トパック「倒れてる柱が通り道みたいだ」

ムワリム「フォックさんも早く、私達は先に行きますよ」

そういつて二人は先に進んだ

……

俺はそこで

フォック「ハチクさん！みんな！」

みんなプラズマ団と戦っていた

ハチク「フォックか！こいつらを食い止める、だから君がゆけ！」

トパック「オイラ達も後で追いかける！行ってくれ！」

フォック「わかった！頼みました！」

俺は先に進んだ

……

地面が揺れる

バリバリダー!!

何かが……塔の上で激しく暴れている

フォック「やばいな…急がないと!!」

俺は急いでかける

そこに七賢人の一人ジャロという者がいた

ジャロ「いよいよである、N様が英雄になれる!!」

俺に気付き

ジャロ「なんと!ここまで来る者がいようとは!ええい!N様のため!こいつを足止めせよ!!」

やつらに足止めを食らってしまった

フォック「くっ!!」

ジャロ「プラズマ団以外は全て敵!全力で排除する」

やるしかない

……

ドカーーーーーーッ！

フォック「道をあける」

俺は剣で脅し、怒るように言う

したつぱ達が道をあける

……

最上階

そこにいたのはNと黒いドラゴンポケモン

N「どう、フォック、世界を導く英雄の元、その姿を現し、共に戦うポケモンの力強い姿は！」

そう言うのと黒いドラゴンポケモンに向ける

N「これから僕はゼクロムと共にポケモンリーグに向かいチャンピオンを超える！ポケモンを傷つけてしまうポケモン勝負はその後、ポケモンだけの世界……ようやく実現する」

ゼクロムが飛ぶ

フォック「なんてことを……」

N「僕達を止めるなら、君も英雄になればいい！そう！ゼクロムとついをなすポケモン、レシラムに認められてこそ、ようやく互角になれる！僕達を止められる！さてどうする？僕の予測……僕に見える未来なら、君はレシラムと出会っだろう」

レシラム……そういえばゼクロムしか聞いてないがもう一匹いたんだ

N「共に歩むポケモンに信じられている君は……！世界を変えるための数式……君はそれを邪魔する存在となれるか？ポケモンと人の絆を守りたいならレシラムを探すんだ！」

どうやってだよ

N「……きつとレシラムはライトストーンの状態で君を待っている」

Nはゼクロムに乗って去っていった

フォック「待て……！」

だが遠くに行ってしまう

そこにハチクさんとトパック達がやってきた

トパック「フォック……！今飛び去ったのは……？」

ハチク「なんたること……！」

ワユ「今のはNだよな？」

キルロイ「どうして伝説のポケモンと一緒にいたんだろう？まさか彼が本当に英雄なんですか！？」

そこはわからないけど（汗）

ムワリム「それに聞こえたのは伝説のポケモン、レシラムを探せと」

ハチク「まずは戻るぞ、今大事なのは起きたことを解明するよりこれから何をするかだ」

俺達は塔を降りた

……

アララギパパ「たまげたな……伝説のドラゴンポケモンが現代に蘇るとはな……」

ムワリム「Nという男……プラズマ団のボスである彼が伝説のポケモンを復活させたようです」

トパック「しかもフォックにもう一匹のポケモンを探せと言って飛び去っていったぜ」

ワユ「伝説のドラゴンポケモンが二匹いるってことになるよ」

????「ああ、そうなのだ！」

そこに

アララギ「……アデクではないか、久しいな！元気であったか？」

登場したのはアデクさんだ

アデク「挨拶はぬきだ、塔から放たれたあの激しい稲光……世界を滅ぼす力を持ったポケモン……それを従えた者が皆にポケモンを解き放てという……恐れか、あこがれか……いずれにせよ世界は変わリかねない、我々とポケモンは離れ離れになる、そんな世界に……」

アララギ「そうだな……しかもゼクロムを復活させたNというプラズマ団のボスはもう一匹のレシラムを探すよう言っていたらしい」

レシラム……ゼクロムと対をなすポケモン、つまりゼクロムと同じドラゴンタイプ

アデク「……たしか神話ではゼクロムは強い電気を放ち、もう一匹のポケモンと共に昔のイッシュを一瞬にして荒れ果てさせた……Nはそれを知っていてもう一匹を待つというのか？」

ワユ「復活させて危ないじゃないですか？」

たしかに危ない感じだよな（汗）俺も時の力持つてるけど（汗）

アデク「……お嬢さん、君は優しいんだな、だが他のポケモンでは対抗できるかどうかからん、何せ伝説の存在だからなあ……そのNとやらの言うとおりにするのはシャクだが、ドラゴンを……ストーンを探すのは悪くない、むしろプラズマ団が2匹目を復活させたら大事だ！」

たしかに2匹持っていたら完全に世界は終わりだ

アデク「イッシュの各地を旅していたわしに心当たりがある古代の城に向かおう！フォック達行くぞ！」

アラギパパ「そうか、ではそちらは任せた、こちらは塔の中を調べよう、何かわかるといいのだが……」

ハチク「では私がお供いたします」

ハチクさんとアラギパパは塔へ

俺も行く

目指すは古代の城だ…場所はわかってる俺はメッパを使って空を飛ぶで向かう

メッパ「フォックはん…大丈夫でつか？」

そう心配するメッパ

フォック「大丈夫…このままだとあいつに支配されてしまうから、止めないと世界が大変なことになるからね」

メッパ「フォックはんの時の力ならいけるちゃいます？」

そういうが

フォック「時の力を使っても奴等に通用するかわからない、とりあえずは古代の城に行かないと」

メッパ「ほな、しっかり捕まってる」

俺は古代の城のあるリゾートデザートへ

古代の城（前書き）

あいつを止めないと……

古代の城

古代の城入口

フォック「連絡によるとアデクさんは先に進んでるみたいだから急ぐか」

俺も中に入った

……

下に降りると七賢人の一人、リヨクシという老人がいた

リヨクシ「ゲーチス様は言われた、お前の力がどれほどか、今一度たしかめよと、我等プラズマ団を倒せるか見させてもらうぞよ！」

チッ！レシラムを奪うつもりか

……

フォック「ふうう、やっと追いついた……って！？」

そこにいたのはアデクさんだけでなく、ゲーチスもいた

アデク「……フォックこっちに……わしのそばに来るんだ」

俺はアデクさんのそばへ

ゲーチス「おそろいのようにですね、もう一匹のドラゴン……レシラムを復活させるため苦勞なされていますね、ですがここにはお探しのライトストーンはないようです、さて……おめでとう！フォック」

フォック「なぜおめでとうだ？」

なぜかわからない

ゲーチス「それはですね……あなたが我等が王に選ばれました、あなたがこのままポケモンと共に暮らす世界を望むのなら、伝説に伝わるもう一匹のドラゴンポケモンに従え我等の王と戦いなさい、出ないならプラズマ団がすべてのポケモンを人から奪い逃がし、解き放ちましょう！」

アデク「……解き放つだと？トレーナーと共にあるポケモンがそれを望んだのか？人からポケモンを奪うことがお前達プラズマ団の言うポケモンを自由にすることなのか？」

と、アデク

ゲーチス「おやおやこれは、チャンピオンのアデク殿、長年のパートナーだったポケモンを病で失った、数年前より、真剣勝負をせず四天王にポケモンリーグを守るよう命じたあと、自分はイッシュ地方をふらふらしている……」

えっ！？

ゲーチス「そのようなチャンピオンでも人々とポケモンが共に暮らす今の世界を守りたいと？我等がプラズマ団の王はポケモンを縛り付けるチャンピオンより強いことをイッシュの人間に示します！そ

してイッシュを作った英雄と同じように伝説のポケモンを従え、みんなに命令するのです！すべてのトレーナーにポケモンを解き放てと！そのため伝説のゼクロムや王にふさわしいお城もすでに用意しているですよ」

だがアデクさんは

アデク「……わしは負けぬ！ポケモンを愛するトレーナーのために！トレーナーを信じるポケモンのためにも！」

ゲーチス「……王はあなたに興味などない、勝って当たり前相手だとお考えですよ」

俺にはあつてアデクさんには興味がない……チャンピオンを超えるといいながら余裕だな、ゼクロムを使ってそうするつもりか

アデク「……それを言うためここに残っていたのか？わしも馬鹿にされたものだな」

ゲーチス「まさか、優しさですよ、優しさ……チャンピオンのあなたが無駄な怪我などなさらぬようにね、たしかに私は人々が絶望する……その瞬間を見るのが大好きですがね、ではごきげんよう」

ゲーチスは去った

フォック「……アデクさん、これからどうするのですか？」

俺はアデクさんに聞く

アデク「……ふむう、わしがポケモンリーグに戻り、Nと戦うしか

ないな、だがゲーチスの言うとおり……というのもシャクだし、何よりライトストーンをどうすればいいものか？」

フォック「とにかく外に出ましょう」

俺は外に出るのを提案

アデク「……うむそうするか、なんだかここは息苦しいわ！」

俺達は外へとでた

……

フォック「俺もうまくは言えません、だけど絶対に許せません！俺を指名したのならなおさら」

アデク「……Nという男、何を望んでいるのだろうか？」

たしかに

アデク「二匹のドラゴンが戦い、勝ち残ることで自分の正しさを証明したいのか？」

フォック「たしかにそれはありますね……そうだ……あなたには……俺の正体知ったほうがいいですね」

そういうと俺は力をためてリザードンの姿になった

アデク「それが……お前さんの正体ってことか」

フォック「人には見られたくないですが、ジムリーダーの一人とジムリーダー全員は知ってるはずで、それに俺はここに来たのはプラズマ団を止めるためです」

俺はそうアデクさんに言った

アデク「お前さんがポケモンの姿ならたしかにポケモンの気持ちはわかってるな」

俺の場合はポケモンの言葉もわかるし

すると俺のライブキャスターになる

フォック「はい！」

アララギ「フォック！！フォック！！フォック！！フォック！！もしもしフォック！！」

出てきたのはアララギ博士

フォック「どうしたんですか？」

俺はアラギ博士があわてているのが見える

アララギ「あのねフォック！！いますぐシッポウシティの博物館にいらっしやい！」

フォック「いますぐですか!？」

強引だな（汗）

アララギ「今すぐよ！いい？本当にいますぐよ！」

フォック「わかりました」

ピッ

アデク「……アララギの娘め、ここまで声が聞こえたぞ、なにやら大変な様子だな、シッポウの博物館で何が待っているやら……では先に参るぞ！」

アデクは先に博物館へと向かった

フォック「俺も！」

俺はリザードンの姿になってシッポウシティへと向かった

待ち受けているもの（前書き）

一体シッポウシティの博物館に何があるんだろう？

待ち受けているもの

シッポウシティ博物館

アララギ「……アデクさんから話は聞いたわ、フォック、大変なことに巻き込まれちゃったのね……」

そこにアロエさんが出てくる

アロエ「これかい？」

アロエさんが持ってきたのは博物館に展示してあったリゾートデザートで見つかった古い石だった

アロエ「本当にドラゴンポケモンかい？」

アララギパパ「うむ……！リュウラセンの塔を調査したところ、このライトストーンと同じ時代を示す成分があったんだよ！」

アララギ「……ということを私が調べたのね」

同じ成分？

アロエ「さすがだね」

でも古い石に気付いてなくてよかった（汗）

ワユ「でもよかった」

キルロイ「感づかなくて」

アロエ「そうだね、今考えるとあいつら、伝説のドラゴンポケモンを復活させるつもりでドラゴンの骨を奪おうとしたんだね」

俺の前に来て古い石を

アロエ「じゃあフォック、これを……」

俺が触ろうとしたとき

アデク「ちょっと待つんだフォック！」

アデクが止める

アデク「そのライトストーンを手にするということは、わしに何かあったとき、Nと戦うということだぞ、それでいいんだな？」

アデクさんがNとか…

フォック「俺はそれでも…覚悟はできてますよ…元はポケモンである俺ですし、今でも姿は人間でも本当の姿はリザードンですから…止める覚悟はできてます」

そう俺は決意する

アデク「……今のがお前の覚悟なんだな…わかった、心して受け取れい」

アロエ「……そうか、このライトストーンはいざというときにあたしらとポケモン達の真実の未来を守るんだね、フォック、大事にしておくれよ」

フォック「はい！」

俺はライトストーンを受け取った

アララギパパ「……で、どうすればストーンからドラゴンポケモンが目覚めるといふのかね？」

全員『あっ?』

そうだ、レシラムをどう目覚めさせるかが問題だった

だがアロエさんはひらめいた

アロエ「そうだよ！あいつらがいるじゃないか」

アデク「そうか、あいつらがおったな」

あいつら？

アデク「フォック！ソウリュウシティに向かうぞ、あの町のジムリーダーはドラゴンポケモンの使い手、何か知っているかもしれない先に行って待つておるぞ！ではな！」

アデクさんは一足先にソウリュウシティへ

アララギ「そっか！ソウリュウのシャガさんなら何かご存知かも！」

アララギパパ「フォックよお前さんのすぐとなりにはいつもポケモンがいること忘れるんじゃないよ」

フォック「はい」

俺は返事する

アララギ「ドラゴンポケモンがどのような存在なのか、目覚めさせる方法があるのか、調べるため私たちは研究所に戻るわね……」

アララギ親子は研究所に戻った

アロエ「安心しな！あんたに何かあればあたしたちがかけつけるからさ！」

ワユ「そうだね、キルロイさん、あたし達も色々回って調べよう」

キルロイ「はい」

俺もいかなきゃ

キルロイ「フォック、ソウリュウシティはセツカシティからシリンドーブリッジを渡った先にあるから、気をつけて」

二人は去った

フォック「それじゃあアロエさん」

アロエ「気をつけるんだよ！」

俺はソウリュウシティへと向かった

ソウリュウシティへ（前書き）

レシラムを復活させる方法…ソウリュウシティで見つかればいいけど

ソウリュウシティへ

シリンドーブリッジ

フォック「またお前等か」

ダークトリニティだ

ダーク1「……………こい」

そこにいたのはゲーチス

ダーク1「……………ゲーチス様連れてきました」

ダークトリニティ達はゲーチスのそばに移動した

ゲーチス「見事ライトストーンを手にしたようですね、まずはおつかれさまと申し上げておきましょうか」

フォック「それでお前は俺に何をしようとしてる？俺の前に現れて、何が目的だ？」

俺はゲーチスに言う

ゲーチス「あなたにはわからないことです、だがN様のお考え……それは伝説のポケモンを従えた者同士が信念をかけて戦い、自分が本物の英雄なのかたしかめたい……とのことです」

フォック「たしかめる…だと？」

それは俺を倒すことになるな

ゲーチスはゆっくりと歩く

ゲーチス「そんなことをなさらずとも英雄になるための教育を幼い頃より施され、結果伝説のポケモンに認められたというのに……本当に純粋なお方です」

そして俺の前に戻った

ゲーチス「私……プラズマ団が言うポケモンの解放とはおろかな人々からポケモンを切り離すこと！そう！すべてのトレーナーどもが私どもに逆らえぬよう無力にすることなのです」

フォック「それで無力にしたと思ったのか？」

率直な疑問だ

ゲーチス「無力にしたとは思ってませんよ、だがポケモンは私達だけがポケモンを使えばいいのです！その準備は整いました、私の完全な計画が実行されれば……プラズマ団に逆らえないおろかなポケモントレーナーどもが一人、二人とポケモンを手放していくでしょう」

フォック「……」

そこまでしてやるのか

ゲーチス「その人数は100人となり、1000人となっていく……
チャンピオンもジムリーダーもその流れには逆らえぬようになり
ます、ポケモンを持つことが悪いことになるのです!」

フォック「そのお前達もそうじゃないのか?」

そう、プラズマ団も結局は人間、人の事言えない

ゲーチス「言ったじゃないですか……私達だけがポケモンを使うと……
ヒウンでポケモンを奪われたミカヤとやらも世間に流され自らポケ
モンを手放すのです、そんな世界に変わるのですよ」

フォック「お前にはわからないようだな、そうやって戯言でも言っ
て世界をおかしくしようとしている」

世界は均等じゃなきゃいけない

ゲーチス「あなたがストーンを持っていたても伝説のポケモンに認め
られ、英雄になれるとは思えません、ですがいとしのポケモンと分
かれたくなければせいぜいがんばりなさい……」

そう言つてゲーチスとダークトリニティは去った

フォック「俺は英雄とってたことなんてない……俺は……」

俺は先へと進む

……

ソウリュウシティ

フォック「アデクさん！」

アデクさんがいた

アデク「……おおフォックか、こちらだ」

そこにはゲーチスが演説していた

再会と龍と（前書き）

奴等め……

再会と龍と

ソウリュウシティ

そこにはゲーチスとプラズマ団がいた

アデク「嘘つきゲーチスめ、みなをたぶらかそうと必死に弁舌^{へんげつ}をふるっておる」

ゲーチス「そうなのです！我等が王、N様は伝説のポケモンと力を合わせ！新しい国を作ろうとなさっています！これこそイッシュの伝説、英雄の国作りの再現！」

みんなは「英雄？」「伝説！」「ドラゴン！？」と驚いた表情をしていた

ゲーチスは歩きだし

ゲーチス「ポケモンは人間とは異なり、未知の可能性を秘めた生き物なのです」

再び歩き出すゲーチス

ゲーチス「我々が学ぶべきところを数多く持つ存在なのです」

再び元の場所へ戻った

ゲーチス「そのすばらしさを認め、我々の支配から解放すべき存在

なのです！」

町みんなは「解放だと?」「ポケモンを?」と

ゲーチス「我々プラズマ団と共に、新しい国を!ポケモンも人もみんなが自由になれる、新しい国を作るため、みなさん、ポケモンを解き放ってください、というところで私、ゲーチスの話を終わらせていただきます、ご静聴感謝いたします」

ゲーチス達は去った

????「そうかワシ等は……ポケモンを苦しめていたのか……」

なぜか町みんなが悲しくなっていた

????「うぐぐ……プラズマ団の言うとおり、ポケモンを解き放とうか……」

一人はポケモンを解き放とうと考える者も

????「……そんなあ、ポケモンがいないとあたし寂しくてだめになっちゃう!」

みんな解散した

……

ん?あの少女って?たしかヒウンで出会った

アイリス「なんなのよう!今のお話おかしいじゃん!」

「????」……このイッシュはポケモンと人とが力を合わせて作りあげた、ポケモンが人との関係を望まぬというのであれば、自らの元から去る……たとえモンスターボールといえど気持ちまで縛ることなどできぬ」

そしてアイリスと話している人…誰なんだろう？

アデク「行こうかフォック」

アデクさんがアイリスと男の元へ向かう

アデク「久しいな、アイリスにシャガよ」

そこに二人が振り向いた

アイリス「あっ！アデクのおじーちゃんにあの時のおにーちゃん！」

シャガ「……どうした、ポケモンリーグを離れ、各地をさまようチャンピオンが一体なんのようだ？」

この人がシャガさんって人か…

アデク「ずばり！伝説のドラゴンポケモンの事を教えてくれい！」

アデクさんは頼み込んだ

アイリス「ゼクロムの事？それともレシラム？どーしたの？いきなり」

シャガ「先ほどの演説でゲーチスなる胡散臭い（うさんくさい）男が言っていたな、Nという人物がゼクロムを復活させたと……」

アデク「おうよ！そのNというトレーナーがここにいるフオックにもう一匹のドラゴンポケモンを探せ！と言ったらしいのでな」

そう、つまりレシラムのことだ

シャガ「……わからんな、自分の信念のため、二匹のドラゴンポケモンをあえて戦わせるつもりか、そのNとやらは……？」

アイリス「えーっ！！ドラゴンポケモン達はもう仲良しなんだよー！」

たしかに…Nの狙いはそうなのかもわからない

アデク「そうだよなアイリス、ポケモンを戦わせるのはトレーナー同士……そしてトレーナーとポケモンがわかり合うためだよ、さてと……わしはポケモンリーグに向かう！いやこの場合は戻るというべきかな……？」

言い方ではその通りだ

アデク「もちろんNに勝つ！トレーナーとポケモンが仲良く暮らしている今の世界のすばらしさ、きやつに教えてやるのだ！そしてフオック！チャンピオンとしてお前さんを待つとしよう！だからソウリュウのジムバッジ、手に入れたらリーグに來い、もっともソウリュウのジムリーダーは手ごわいぞ！」

手ごわいか……やるからには覚悟していかないと

アデク「じゃあな頼んだぞシャガ、アイリス！」

アデクさんはポケモンリーグへと向かった

アイリス「……あーあ、おじーちゃん行っちゃった、大丈夫かなあ？
？なんだか怖い顔してたけど」

シャガ「……アイリス、心配ないよ、彼はイッシュで一番強いポケ
モントレーナーだからね」

俺に向ける

シャガ「さてフォックと言ったか？お前さんの事は聞いている、な
んでも別世界に来たりザードンのようだな」

アイリス「えーっ！？フォックお兄ちゃんって！？ポケモン！？と
てもそう見えない！？」

そりゃそうだろ（汗）

フォック「まあヤーコンから話は聞いてるはずですね」

シャガ「うむ、ここではなんだから私の家に来なさい、アデクの言
うとおり、伝説のドラゴンポケモンについて教えられることをお教
えしよう、アイリスや、案内してあげるんだ」

シャガは自分の家に向かった

アイリス「ゼクロムとレシラム、二匹のお話！あたし達が教えただけ

る！ソウリュウなら案内できるし！こっちだよ！」

俺はアイリスについていった

……

フォック「お邪魔します」

俺は家に入った

シャガ「来たか……では話そう、君が持っているのはライトストーンだな」

フォック「はい」

俺はライトストーンを取り出した

シャガ「ライトストーンから目覚めるだろう、レシラム、すでに目覚めたゼクロムは元々一匹のポケモンだった」

なんだって！？

アイリス「……その一匹のドラゴンポケモンは双子の英雄と共に新しい国を作り、人とポケモン、幸せな日々を過ごしていたんだ！」

シャガ「だがある日のこと……双子の英雄は真実を求める兄と理想を求める弟に別れ、どちらが正しいのか決めるべく争いを始めた……双子と共に歩んできた一匹のドラゴンはその体を二つに分ち、それぞれの味方をした……」

それが…ゼクロムとレシラムってことなんだ

アイリス「理想を求め、新たなる希望の世界に導く黒きドラゴン…
…その名もゼクロム、そしてもう一匹、真実を求め、新たなる善の
世界に導く白きドラゴン…その名もレシラム」

フォック「白き…ドラゴン…」

シャガ「2匹は元々同一の存在ゆえ、争いは激しくなるばかり、どちらが勝つともいえず、ただただ疲れ果てていった…双子の英雄もこの争いはどちらかだけが正しいのではない…そういつて争いを治めた……」

たしかにどちらも正しいのではない、真実も理想も同じなんだから
アイリス「なのになのに…英雄の息子達がまた争いを始めちゃって…ゼクロムとレシラムは稲妻と炎でイッシュを一瞬で滅ぼし、姿を消しちゃって…だけどね、人がポケモンとの付き合い方を間違えなければ世界を滅ぼしたりしないよ、だってゼクロムもレシラムもみんなのためにがんばって新しい国を作ったんだもん！だから、だから……！」

シャガ「…たしかにポケモンはものを言わぬ、それゆえ人がポケモンに勝手な思いをかさね、辛い思いをさせるかもしれぬ、だがそれでもだ！我々ポケモンと人はお互いを信じ、必要とし、これからも生きていく……」

ネツカ「そうだよ……！」

そこからネツカが出てきた

ネツカはすでにゴウカザルへと進化していた

ネツカ「僕だつてフォックが助けてくれなかったら、僕はずっと一人ぼっちだったよ！」

シャガ「なんと……しゃべるとは」

フォック「特別でね……俺もポケモン達のこととはわかる……ポケモンと人が歩む道を……」

みんな互いに見ていけばわかる

アイリス「そーなのツ！……だから、だからねっ、ポケモンとあたし達を分かれさせようとするプラズマ団なんか絶対許さないんだからツ！」

アイリスは怒っていた

相当プラズマ団のやり方が許せないんだな

シャガ「……すまない、最後話がそれてしまったが、私達が知っていることは以上だ、残念ながら伝説のドラゴンポケモンを目覚めさせる方法はわからぬ……」

フォック「えっ！？それじゃあどうすれば！？」

目覚めさせる方法がないとこれじゃ

シャガ「たしかにな……さてアデクとの約束だったね、君はソウリ

ユウポケモンジムのジムバッジを手に入れねばならない」

たしかにアデクさんはそういった

シャガ「ではフォック、ポケモンジムにて君の挑戦を待つ！」

シャガさんはジムへ

シャガさんがこの町のジムリーダーだろう

やるしかない

みんなとの絆を

断ち切らせはしない！！

V S シャガ〜フオック参戦〜（前書き）

ついに最後のバッジをかけた戦いが……

V S シャガ、フォック参戦

俺は龍の頭を歩き、シャガさんの元へとたどり着いた

シャガ「よくぞ参られた、私がソウリュウポケモンジム、ジムリーダーのシャガである」

フォック「なるほど…アデクさんが言ってたことわかった感じがします」

俺はこの人が強いオーラを出していることを

シャガ「……市長として、町の発展にじんりよくし、トレーナーとして、ただ強さを追い求めた……そんな今、求めるのは明るい未来を見せてくれる若いトレーナーの存在、君がアイリスのように私に未来を見せてくれること望んでもいいのだろうか」

フォック「はい…では始めましょうか？」

俺とシャガさんは構えた

……

シャガ「頼むぞ、オノンド！」

まず繰り出してきたのは口には飛行機の翼のような突起物、頭から背中の中間あたりに緑の物、尻尾の先には赤い体色

俺も持つてるドラゴンポケモン、オノンドだ

俺のオノンドはアックというニックネームをつけている

まあ俺は捕まえたからわかってる

ドラゴンだからわかるこの感じを

まあリザードンはドラゴンタイプもってないけど姿は龍なのだから

フォック「それじゃあ…ウイア！」

俺はウイアで対抗した

シャガ「ジャローダか…この私に通用するのかな？」

フォック「それでも…負けませんよ、ウイア！やどりぎの種！」

まずは挨拶がわりにやどりぎの種をオノンドに植えつけた

シャガ「やるようだね、なら龍の舞！」

龍の舞で攻撃と素早さをあげるつもりか…なら

フォック「とぐろをまく！」

とぐろをまくで攻撃・防御・命中をあげる

シャガ「ドラゴンクローでやどりぎを切り裂け！」

ドラゴンクローでやどりぎを取り除いた

さすが

フォック「リーフブレード!!」

シャガ「ドラゴンクロー!!」

リーフブレードとドラゴンクローが激突する

互いに攻め合い、牙をむく

フォック「もう一度やどりぎの種!!」

再びやどりぎの種を繰り出す

シャガ「その手はもう見切った!ドラゴンクロー!!」

ドラゴンクローで切り裂いたが

フォック「今だ!リーフブレード!!」

ワイアの尻尾が草の剣となりオノンドを斬りつけた

オノンド『うわああああああああああああああっ

!!!!!!!!!!!!!!?』

かなりのダメージだがまだ倒れない

シャガ「そうきたか…かなりタフな相手だな」

さすがドラゴンタイプ、ちょっとじゃあまりダメージを受けない
シャガ「ドラゴンクロー！」

再びドラゴンクローを繰り出す

フォック「避けてリーフブレード!!」

ウィアは避けてリーフブレードで斬りつけた

オノンドは吹っ飛び目を回してしまった

シャガ「戻ってくれオノント」

オノントをボールに戻した

シャガ「君は中々やるようだね、だが次はこいつで相手になろう、
クリムガン！」

出てきたのは頭は赤い体色、翼も青く、突起物が体についていた

洞穴ポケモンのクリムガンだ

フォック「戻ってウィア!…次はアック！」

俺はオノントのアックを繰り出した

アック『フォック!今回の俺の相手はこいつか?』

クリムガンを指差す

フォック「ああ、だが油断しないで」

アック『わかってる！』

アックは構えた

フォック「行きます！ドラゴンクロー！」

まずはドラゴンクローを繰り出した

シャガ「リベンジ！」

ダメージを倍に返す技か…それなら

フォック「龍の舞！」

龍の舞で攻撃・素早さをあげて

フォック「ドラゴンクロー！！！」

ドラゴンクローが炸裂し、クリムガンを戦闘不能にした

シャガ「さすがだよ、それでこそだ…ならここからが正念場だ！行け！オノノクス！」

出てきたのは黄色い鎧のような体に口には斧のような突起物、これがオノンドの進化系であり、キバゴの最終進化系、オノノクスだ

フォック「すごい…でも行きます！ドラゴンクロー！！！」

龍の舞で上がった攻撃と素早さならこれで

シャガ「ドラゴンクロー！！」

だがオノノクスは負けじとドラゴンクローでアックを吹っ飛ばした

シャガ「龍の波動！！」

口から青いブレスのようなものを吐いてきた

アックは攻撃に耐えられず戦闘不能となった

「フオック、戻って……次はウィアだ！」

ウィアを繰り出した

フォック「やd」

シャガ「龍の波動！！」

再び龍の波動がウィアに襲い掛かってきて

ウィア『うわあああああああああああああああああああ
つ！！！！！！！！！？』

ワイアがやられてしまった

フォック「くっ！」

ここまでやるとは…

シャガ「私のオノノクスに向かうとはやるね、だがそう簡単にはやられないぞ」

たしかに…

こうなったら

フォック「なら…俺が相手になります」

俺はリザードンへと変身した

シャガ「自ら戦うとは…なら全力でかかってくるがいい」

やるしかない

俺は剣を置いて

フォック「ふう、久しぶりのバトルだからがんばらないと」

オノノクス『そう言ってるが、私にかてるか？』

オノノクスが俺に聞いてきた

フォック「俺はドラゴン好きだからそのぐらいではやられないよ」

そうオノノクスに言う

オノノクス『なら…君の実力を見せてみる！龍の波動！』

龍の波動が俺に迫ってくる

フォック「ドラゴニッククロー!!」

俺の爪が青くなり、さらに巨大化した

フォック「せやっ!!」

龍の波動を斬りつけた

シャガ「なっ!?!」

シャガさんは驚く

フォック「行きます!!」

シュン!

俺の姿が消える

オノノクス「くっ! 何処だ!!」

すると

オノノクス「がっ!?!」

オノノクスに衝撃が走る

オノノクス「なんという速さだ!!」

フォック「ファイアーバーン!!」

特大の炎の弾を浴びせる

オノノクス『ぐわっ!?!』

オノノクスはよろける

フォック「これで…決める!!」

俺は青い炎に身を包み

フォック「ファイナルドラゴン!!」

一気にオノノクスに突進した

オノノクス『ぐわあああああああああああああああああああああ
あああああああつ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!?』

オノノクスは耐えられず戦闘不能となった

俺は人間の姿に戻った

シャガ「すばらしい、君と出会い、戦えたこと、感謝する、これが
君自身実力か…」

フォック「俺もとても戦えて嬉しいです」

俺は笑顔になる

シャガ「なら最後のバッジを受け取ってくれ」

俺はレジエンドバッジをもらった

シャガ「ふむ、イッシュすべてのジムバッジを手にしたか……なら君に頼みがある、アデクを追いかけてポケモンリーグに向かってほしい、ポケモンリーグはソウリュウからつながる10番道路の先……チャンピオンロードを越えたところにある、アデクの強さは知っているが、Nという男の強さ、そこ知れぬのだ……だから君には」

フォック「わかってます……俺もあいつと決着^{けり}つけないといけませんし、それにレシラムの方も見つけないといけませんし」

シャガ「そうか……ならがんばってくれたまえ……私達ジムリーダーの分を」

俺はシャガさんに握手してジムを出た

……

俺はジムを出るとアララギ博士が待っていた

アララギ「……ハ―イ、シャガさんはたくましかった?」

そう聞かれた

フォック「はい!とても!」

俺は元気に答える

アララギ「よかったわね…っとそんなこといいに來たわけじゃなかった（汗）実は伝説のレシラムを復活させる方法についての報告に來たんだ！」

フォック「本当ですか！？」

でもなんでこっちに？ライブキャスターでもできるのに？

アララギ「ライブキャスターで伝えるのもなんだか申し訳ないしね、で、結論を言っちゃうと……まだわかってないんです」

えっ！？

俺はずっこけた

アララギ「きつとポケモンが誰かを認めたときに目覚めるのね……」

認めたときか……

アララギ「それよりもすごいじゃない！イッシュのジムバッジを8個揃えたんでしょ、すごくたくましくなつたよね！」

そうでしょうか（汗）

アララギ「でもよかった、あなたがリザードンでもフォックはフォックよね」

フォック「えっ！？」

俺は意外な言葉で驚く

アララギ「ではポケモンジムをめぐり終わったポケモントレーナーが次は何処へ向かうべきか私が案内するわね」

博士にあんないされて

上のゲートの前についた

アララギ「あのゲートをくぐり、10番道路を抜ければバッジエックゲート、その先にあるチャンピオンロードを超えてようやくポケモンリーグよ、カラクサのポケモンセンターを案内したと思いい出しちゃった」

そういえばカラクサのポケモンセンターを案内してくれたのがアララギ博士だ

アララギ「ねえフォック、ポケモンと一緒に旅立ったこと悔やんでいる」

フォック「いいえ、俺はこの旅を悔やんでません、仲間がいたからこそ俺は前に進められた…それだけでよかったですし」

そう答えた

俺には仲間がいるからここまでいける

アララギ「ありがとッ！最高の返事よね！私も君達にポケモンをプレゼントできてすごく嬉しかったの！だってまた人とポケモンのステキな出会いが生まれたから！フォック、これプレゼントよ！」

それはマスターボールだった

これはどんなポケモンも絶対に捕まえられる最高のボールだ

アララギ「こんな形でしか応援できないけれど……フォックはフォック、どんなことがあっても迷わずにポケモンと進んでね！じゃーねー！！」

アララギ博士は元気に去った

俺は今

ポケモンリーグへと向かう

チャンピオンロードへ（前書き）

世界は…俺達が…

チャンピオンロードへ

俺はバッジエックゲートで全部のバッジの扉をすべて開け、ついにチャンピオンロードに入った

フォック「いよいよか…」

それは俺にとって長い長い道のりだ

それでも…あいつを止めないといけないから

……

フォック「よつと！」

ズザーーーーーーー！！

ここのチャンピオンロードは崖をすべることができるみたいで

フォック「こええゝな（汗）」

すべった感想は正直怖い（汗）

……

フォック「ついについた……」

黄緑色の屋根が多い感じの建物

ここがポケモンリーグ

ついにこのときが来たな…絶対に!!

四天王1 ゴーストと小説（前書き）

俺は…俺の道に行く…

四天王1 ゴーストと小説

4つの道

それぞれの四天王がいる

俺は最初の左端の方へ

……

そこはまるでお化け屋敷のようだった

フオック「うわっ!？」

俺は火の玉とともに四天王の一人の所に移動、ポルダーガイスト現象だなこりゃ（汗）

俺の目の前には紫の丸っこい髪をして、メガネをかけた女性がいた
「?????」その男、瞳に暗き炎をたたえ、ただ一つの正義をなすため、自分以外のすべてを拒む」……今読んだのはアタシの小説なんです」

ということはこの人小説家なんだな（汗）

「?????」……先ほどの挑戦者を題材にしてみたのですがなんだが悲しくなっちゃいました」

たぶん先ほどの挑戦者、おそらくNだな

?????「ごめんなさい、挑戦者の方ですね」

フォック「はい」

俺は率直に答えた

?????「アタシはゴーストポケモン使いの四天王シキミ、お相手いたします!」

……

シキミさんは最初にデスカーンというエジプトの棺おけに黒い手と足を持って、目が鋭くて赤いポケモンを出してきた

フォック「やどりぎの種!」

まずはやどりぎを植えつける

理由は一つ、デスカーンの特性だ

ミイラは厄介なのだ

まあ倒せばなんとかなるか

シキミ「シャドーボールです」

シャドーボールがワイアに向かう

フォック「とぐろをまくで防げ!」

とぐるをまくで防いだ

フォック「ギガドレイン!!」

ギガドレインを使った

フォック「あれ？」

俺はここであることがわかった

ミイラの特徴だ

フォック「（ギガドレインをだしたけど、ミイラになっていない…
もしかして!!）もう一度ギガドレイン!!」

再びギガドレインでデスカーンを倒した

だがミイラの特徴にはなっていない

そう！ミイラの特徴は直接攻撃でないかぎりミイラにはならないの
だ、つまりさわらなければ特性は発動できない

シキミ「中々やりますね、次は…シャンデラ！」

フォック「戻って！ラクロ！」

俺はワルビアルから進化したラクロを繰り出した

シャンデラのようなポケモン。シャンデラが出てきた

フォック「イカサマ！」

ラクロはシャンデラの攻撃分をシャンデラに与えた

シキミ「大文字です！」

フォック「かわしてイカサマ！」

ゴーストの弱点は悪と同じゴーストだ

ラクロは避けてイカサマでシャンデラを倒した

フォック「次はドリユだ！」

俺はラクロを戻してドリユを繰り出した

シキミさんはブルンゲルを繰り出す

こいつもゴーストだったんだ、知らなかった

まあいいけど

フォック「地震！」

シキミ「波乗りです！」

地震と波がお互いにダメージを与える

フォック「もう一度地震！」

地震でなんとか倒したけど、呪われボディという特性で地震が封じられてしまった

ここは戻るか

フォック「アック！」

俺はオノノクスにまで進化したアックを繰り出した

シキミさんはゴルークというゴーレムのような図体に体色が水色のポケモンを繰り出した

でもこいつはもうわかってる

フォック「剣の舞！」

シキミ「呪い！」

呪い

ゴーストだと自らの命を削って相手の体力を奪う技、でも

フォック「切り裂け！！ドラゴンクロー！！！」

最期はドラゴンクローで勝てた

……

シキミ「しごごめんなさい！まずポケモンに謝らないと……アタシ

のせいで辛い思いをさせちゃって本当にごめんね!」

ポケモンに謝ってるなんて…でも彼女らしさを感じた

フォック「別に悪くないですよ」

シキミ「ああ!あなたは悪くないです、こうなるのは勝負の常、それを踏まえてアタシも四天王してますから!」

まあいいけど(汗)

俺は次の四天王の所へと向かう

物語には始まりと終わりがある

物語は終わりがあつて始まりがある

自分の描く物語は

人々にどのような影響を受けるか

そして進む道は…

物語の道である

四天王2 悪と勝利（前書き）

次は…

四天王2 悪と勝利

次はその左端のちょっと端の道を進んだ

……

そこはまるでルーレットのようだ、その頂上にまで来た、上にはシヤンデリアが釣り下がっていた

前には頭が左右に曲がっていて、紳士服を着た男性だった

「?????」「やれやれ……今日はどついう日かな? 続けざまに挑戦者がやってくるとは……」

やっぱりNが通ったんだ…今デアクさんと…

「?????」「まあいいさ、四天王ギーマ、その役割に従いお相手するまで」

……

まずはズルズキンというズルツクの進化系を繰り出した

こいつは悪と格闘の二つのタイプを持っている

たぶん悪タイプの使い手だろう

まず俺はウィアにやどりぎの種を繰り出して相手の体力をじわじわ

と奪っていく

ギーマ「やるね」

フォック「それほども…でも」

ズシャツ

リーフブレードでズルズキンを倒した

ギーマ「なっ!？」

ギーマは驚く

ギーマ「くっ!次はこいつだ!キリキザン!」

出てきたのはキリキザンと呼ばれる忍者のようなポケモンだ

鋼だけじゃなかったか…なら

フォック「地震!」

まずは地震でダメージを与えるが、まけんきという特性を発動して
しまった

ギーマ「つじぎり!」

フォック「受け止めて地震!」

ドリュはつじぎりを手のドリルで受け止め、そこからゼロ距離で地

震を繰り出した

キリキザンはそれに耐えられず戦闘不能に

…

3体目はワルビアルだ

これもワイアのおかげでなんとか倒した

ギーマ「なら…最後はこいつだ！レパルダス！」

最後はレパルダスか…たぶん猫だましはくるだろ…

俺は手持ちを変えずにそのままにした

ギーマ「猫だまし！」

来た！！

戻って

ワイアを戻し、ドリユに変えた、鋼タイプなので効果はいまひとつ

フォック「地震！！」

ギーマ「ならメロメロ！！」

こいつ♀なんだな…なら

フォック「戻れ!!」

ドリュを回収し

フォック「ラクロ!!」

ラクロを繰り出した

フォック「泥かけ!」

泥かけでとどめをさした

……

ギーマ「全力を尽くそうと運があろうとなかろうと負けは負け……
だからこそさ、勝利は光輝く、そう、今の君達、すごくまぶしいよ」

俺は次の四天王へと向かう

勝利とは勝つこと

負けは負け

だがその負けが次につなげるよう

道はある

負けない人一倍の努力が

四天王3 超能力と感情（前書き）

進む道があるから進められる

四天王3 超能力と感情

3番目は流れ星があり、神秘的な場所だ

……

上にはカーテンにしきつめていてカーテンが開くと、そこには頭に白い帽子を被ったお嬢様のような雰囲気的女性が眠りから目覚めてバトル場に立った

?????「どなた……?アタクシの眠りを妨げるやばなトレーナーさんは?あなたね……ふうん……」

俺なんかした(汗)その女性は俺を見渡して

?????「強さと優しさをあわせもち、なんだか手ごわそう……だけれどあくびが出ちゃうような退屈な勝負だけは勘弁ね……」

フォック「あのゝあなたの名は?俺はフォックです」

俺は自己紹介する

?????「アタクシはカトレアです…ふわぁ」

あくびしてる(汗)カトレア?何処かで聞いたような?まあいいや

……

カトレアが最初に繰り出したのは緑の膜のようなものに入っている子供がいた、そのポケモンはランクルスというポケモンだ

たぶんマジックコートあるから

フォック「リーフブレード！」

カトレア「サイコネシス」

サイコネシスなら

フォック「後ろにまわってリーフブレード！」

ウイアは後ろにまわって斬りつけた

カトレア「なんかワクワクしてきた…」

あゝ大丈夫ですか（汗）

素早くリーフブレードで斬りつけランクルスを倒した

……

2体目はシンボラーだ

その姿はラスカの地上絵に出てくるような鳥だった

フォック「ドリュ、つめとき」

つめときで命中と攻撃をあげる

カトレア「冷凍ビーム」

氷の光線がドリユに迫る

ドリユ『くっ！』

ドリユは冷凍ビームを受けてしまった

フォック「まだまだ！！いわなだれ！！」

いわなだれでシンボラーを戦闘不能にした

……

3体目はムシャーナだ

こっちはラクロに交代した

フォック「どろかけ！」

どろかけで命中率を下げる

カトレア「シャドーボール……」

すかさずシャドーボールを打ってきた

ラクロ『ぐわっ！』

だけど

フォック「イカサマ！」

イカサマでダメージ与える

フォック「じならし！！」

じならしをするがムシャーナは浮遊して回避

俺はそれを逃さず

フォック「イカサマ！」

イカサマで攻める

カトレア「シャドーボール」

フォック「避けてイカサマ！」

イカサマでなんとか倒した

……

最後の一体は

ゴ。ロ。のような服を着た感じのポケモン、ゴチルゼルだ

フォック「どろかけ！」

カトレア「かわしてシャドーボール」

どろかけをかわしてシャドーボールを放つ

フォック「ドラゴンクロー!!」

ドラゴンクローでシャドーボールを打ち消した

フォック「連続でどろかけ!!」

どろかけで命中率を下げて動きを封じた

フォック「そしてイカサマ!!」

イカサマがヒットしてゴチルゼルは倒れた

……

カトレア「まだ手合わせしていない四天王がいるのでしょうか？」

たしかに後一人だ

カトレア「アタクシにかまわず先に進みなさいな」

お言葉に甘えて俺は最後の四天王に挑む

ただ怒りで戦っては意味は無い

感情は表に表すから

でも忘れない

喜びを分かち合い

苦しみを分かち合い

人とポケモンは結ばれる

一つの絆を

忘れずに

四天王ファイナル 格闘と気持ちと最強と（前書き）

ついにここまで来た、最後の四天王に！

四天王ファイナル 格闘と気持ちと最強と

最後の方は機械があつた、俺はリフトに乗って、最後の四天王の元へ

……

上はボクシングジムのようだった、もちろんボクシングで見る戦う舞台、リングがあつた

その中央には一人の男アフリカ人のような感じで頭は黄色の髪だ

?????「挑戦者よ……私の名前はレンブ、格闘の道をきわめるべく師匠アデクの元、修行を続けている……」

アデクさんの弟子なんだ、俺も弟子いるけどね…俺の弟子が

レンブ「そしてお前も我が師匠が認めたトレーナー！その強さ……どれほどのものか見せてもらいたいッ！！」

俺はモンスターボールを構えた

……

1体目は柔道着を着たポケモン、ナゲキだ

レンブ「ストーンエッジ！！」

尖った岩がウィアを襲う

フォック「とぐるをまく！最大だ！」

俺はとぐるをまくで守りをかためる

レンブ「強いな……それでこそ心躍る」

フォック「でも俺は負けませんよ、やどりぎの種！」

ナゲキにやどりぎを植えつけた

フォック「リーフブレード！」

ナゲキを倒した

……

2体目はきつねのようでキョンシーを思わせるポケモン、コジヨン
ドだ

俺はメッパを繰り出す

フォック「フェザーダンス！」

フェザーダンスで攻撃を下げる

レンブ「いわなだれ！」

やっぱり弱点で攻めるか……でも

フォック「避けて！」

メツパ『いくで〜!』

メツパは空を飛んでスムーズに回避した

フォック「フェザーダンス!」

元々格闘タイプは攻撃中心で特殊技はあまりない、なのでフェザーダンスなどが有効なのだ

フォック「バードブレイク!」

空を飛んで急降下でコジョンドを倒した

このオリ技は急降下して相手に突進する技だ

……

3体目はダゲキだ

こいつも頑丈の特性があるから厄介

なので

フォック「やどりぎの種」

頑丈も気合のタスキと同じ効果だから有効だ

レンブ「やるな」

フォック「対策はこのぐらいでできますよ、でもこれで！ギガドレイン！」

ギガドレインで体力を奪って倒した

……

レンブ「最後か…なら行くぞ！ローブシン！」

出てきたのは老人のようなポケモン、両手には柱を持っている

フォック「剣の舞」

俺はアックを繰り出し剣の舞で攻撃をあげた

フォック「ドラゴンクロー！！！」

ドラゴンクローで最後のポケモンを倒した

……

レンブ「今……お前はこのポケモンリーグで最強のトレーナーとなった、中央の部屋の像にのり、チャンピオンの部屋に行けッ！我等イッシュの四天王はチャンピオンの命令で絶対中立！後はお前に託す！」

俺は絶対！

……

ただ強くなるだけじゃだめ

強くなるには色々と学ぶことがある

力で押しても力だけで負けてしまっこともある

知恵を持っても見破られ負けてしまっ

じゃあどうしたら？

最強になるのは色々と学ぶこと

どんな相手でも全力で相手する

ポケモンだって強くなる

絆という

大きなものがあるのだから

決着と（前書き）

俺の進む道…そして俺は負けない…あいつの目的を絶対に阻止する！

決着と

俺は像の所にのった

リフトとなって下に下がる

……

広い階段があり俺はのぼる

そしてその頂上には古代の建造物のような建物があった

俺はその中に入った

……

俺は中に入ると真っ先に目に飛び込んだのがあった

それは

N「……終わった！もうポケモンを傷つけることも縛り付けることもなくなる、友達、ゼクロムのおかげだ！もっともチャンピオンという肩書きでは僕を止められない、それにチャンピオン……あなたは優しすぎるんだ」

すでに決着をつけていた

Nの勝利に

N「数年前パートナーだったポケモンを病で失い、心の隙間を埋めるため、イッシュをさまよっていた……本気で戦ったのも久しぶりなんでしょう、あなたのそういう部分は嫌いじゃないけど」

Nはアデクさんに近づく

N「僕はチャンピオンよりもはるかに強いトレーナーとしてイッシュに号令をかける、すべてのトレーナーよポケモンを解き放てと！」
アデク「頼む！ポケモンと人を切り離す……それだけはしないでくれっ……！」

アデクさん……

N「……僕とあなたはお互いの信念をかけて、力を振り絞り戦った、そして僕が勝った、もう何も言わないでほしい」

そして俺に気付いた

N「……待っていたよ、僕の見た未来どおり、君もストーンを手に入れたんだ、そのライトストーン……ゼクロムに反応してるね」

ライトストーンから何かを俺は感じた

N「……だけど！伝説のドラゴン達にふさわしいのはここではない！地よりいだよ！プラズマ団の城！このポケモンリーグを囲め！」

地面が揺れる

ポケモンリーグから離れたところから城が地上に現れた

それはポケモンリーグをおおうような感じになった

そこから黒いはしが現れ、ポケモンリーグにつつこんできた

フォック「くっ！何が起きたんだ」

俺は目の前の事が理解できなかった

N「今現れたのが！プラズマ団の城！王の言葉……あの高みからし
もじもとどろかせる、君も城に来るんだ、そこですべてを決めよ
う」

フォック「ああ、ならお前には俺が蹴りをつけてやる！」

俺は剣をNに向ける

N「なるほどね…ポケモンを完全にするため人々から解放放つか！
それともポケモンと人は共にいるべきなのか……僕と君、どちらの
思いが強いか……それで決まる！」

Nは城へ

そこに

ミカヤ「フォック！無事！」

サザ「大丈夫か！」

ワユ「ダンナ〜！」

キルロイ「ご無事ですか〜！」

トパック「大丈夫か〜！」

ムワリム「今そっちに行きます」

みんな来てくれた

フォック「みんな！どうしてここに〜！」

ミカヤ「私の未来に嫌な感じがしてここにきたの」

サザ「どうやら当たりのようだな」

ミカヤには未来を見通す能力がある

フォック「大丈夫ですか？アデクさん？チャンピオンらしくないですよ」

アデク「……よくここまで」

ミカヤ「みんなポケモンリーグを勝ちぬけてかけつけました」

トパック「かなり苦戦したぜ」

みんながんばって勝ちぬけてきたみたいだ

アデク「……やるではないか」

フォック「みんなプラズマ団の野望を阻止にきたんですよ」

ミカヤ「ここは私達に任せて…フォック、彼…Nに伝えて、ポケモンといることで強くなれる人間がいること、ポケモンと一緒にだから強くなれたってことを」

アデクさんは立ち上がり

アデク「……負けたわ、途方もない夢を語るうるさい小僧を黙らせるほどのポケモンとの絆を見せてやるはずだったがな……あいつの信念もまた本物だったということか、こころして行け、いつだって世界を変えるのは夢を本気で追いかける奴だ、そして頼む！フォック！ポケモンと人を切り離しても何も生まれん……それを教えてやってくれい」

フォック「はい…やります！みんなはアデクさんの事見てて」

みんなは首を縦に振った

フォック「行つて来る」

俺は城へと突入した

みんなの思いを胸に

プラズマ団の城へ（前書き）

俺の考えとあいつの考え…どっちが正しいんだろう？

プラズマ団の城へ

城の中には七賢人がいた

だがゲーチス以外はいるみたいだ

「天に従う者は生き、天に逆らう者は滅ぶ」

「大同すたれて仁義あり」

「一を知りて二を知らず」

「過ちてあらためざるこれを過ちと言つ」

「くんしは儀に悟り、しょうじんは理に悟る」

「天にじつなく民に二人の王なし」

七賢人が近づく

俺は少し下がった

「さて……我等が王様に何かあつては一大事、ゲーチス様の完全な計画も崩れ去るというもの、N様はがっかりなされるだろうが我等6人、ここでお前を倒してみせる！」

そこに

「?????」「そんなことできるのか?」

そこに来たのは

フォック「ヤーコン!」

ホドモエジム、ジムリーダーヤーコンだ

ヤーコン「まだくたばってなかったかフォック」

フォック「まさかあんたがくるとはな」

七賢人が下がった

「?????」「貴様……ホドモエの……!?!」

ヤーコン「フン!俺様だけじゃない!」

そこからジムリーダー達がやってきた

もちろんアイリスの姿もあった

アロエ「悪いねえ……あたしらの方が強いのに数まで多くってさ」

「?????」「ジムリーダーどもめ!」

全員……来てくれたのか!

カミツレ「プラスマ団のこと……放っておくってジムリーダーとして酷いでしょ」

アーティ「あのう、ミカヤ達に頼まれちゃったのもあるし」

ハチク「……」

フウロ「大丈夫だって！」

アイリス「大丈夫だって！」

シャガ「ライトストーンを持つ者よ、先に進みなさい」

みんな……

フォック「ありがとう……後は頼んだよ……！」

俺はリザードンに変身してその場を去った

七賢人達は驚いているけどね（汗）

光と闇（前書き）

ジムリーダー達のがんばりを無駄にしない、俺は……

光と闇

フォック「それにしても広いな…」

この城は設備がいいみたいだ

フォック「さすがに俺の姿に驚いてるしな（汗）」

そう、俺は今リザードンの姿になっているためプラズマ団のしたっぱ達は驚いた表情をしていた

フォック「まあいいけど…！？」

シュン！？

俺の前にはダークトリニティの一人がいた

実は一人ダークトリニティに会っていたが回復の案内などだったので戦闘にはならなかった

どうなってるんだ？

ダーク2「N様が理想の英雄か、お前との戦いでわかる、お前がポケモンであつてもポケモンとともに歩む今の世界を守りたいのか…
…それもわかる」

そう言って消えた

そういえばたしか回復したところである者にNの事聞かされたな

……

それは俺が部屋で二人の女性と会った

一人はピンクの長髪をした愛の女神と呼ばれた女性

もう一人が黄色の短髪をした平和の女神と呼ばれた女性

その二人からの証言でNの事が少しわかった

Nは幼き頃、人と離されポケモンと共に育っていった、悪い人に裏切られ、しいたげられ、傷ついたポケモン、ゲーチスはあえてそうしたポケモンばかりをNに近づけてその傷を分かち合い、ポケモンの事だけを考えこのようなポケモンを解き放つという理想を求めるようになった、ある意味心の闇みたいだ

人はわからないもの、いい奴や悪い奴はいる

だが今のNはまるで子供に見えるようだった

ゲーチスに傷ついたポケモンを見せてそうした、たぶんあの傷をつけたのはゲーチスがやったのか？それとも他の誰かがやったのかわからない

だけどそれじゃあ自分にまで影響してしまう

ポケモンを解き放つてもポケモンを友達と思うことはできない、ずっと孤独な世界になってしまう、俺はポケモンでも孤独は経験して

る、一人だけど今は仲間がいる、それでも俺は止める、そしてNを
目を覚まさせる！

俺は決意した

これ以上の闇に縛られたくはないから

……

階段を登った先にダークトリニティの一人が現れた

ダーク3「あの部屋はN様に与えられた世界……私は入っても何も
思わないが……お前なら何か感じるかもな」

そう言って消えた

俺はその部屋へと入った

……

俺はその部屋を見て感じた

それは……

その部屋はおもちゃがいつぱいの子供つぱい部屋だ

フォック「ここが…Nの部屋…」

電車とレールのセット、スケートボードで使うハーフパイプ、その
ハーフパイプにはポケモンの引っかけ跡がいつぱいいていた

そのスケートボードは積み重なったタイヤの上に乗っていた、使い込まれた感じのバスケットボール、ボールには何か文字が書いてあった

フォック「ハルモニア？」

ハルモニア？俺にもわからない言葉だ

そして家庭用のバスケットゴール、そのゴールのところには電車のおもちゃがあった、上には飛行機、壁にはアートパネル、トイボックスには新しいおもちゃがいっぱいあった

フォック「……」

俺は感じていた

辛い…悲しさと孤独、そして人間を嫌うような孤独感

俺にはそう感じていた

ネツカ「フォック」

そこにネツカと突然ボールから出てきた

ネツカ「この部屋…Nはここで」

フォック「ああ、Nがこうなってしまったのも、色々と原因があった…でも」

とめなきやだめなんだ

ネツカ「行こう…俺達がいるから」

フォック「ありがとう…」

俺はネツカをボールに戻して先に進んだ

……

フォック「来たか……」

俺は中央にある一つに入口を見つけた

フォック「入るか」

その時

フォック「お前か…」

それはゲーチスだった

ゲーチス「ようこそ、ライトストーンを持つ者よ、そして…人に変身できるポケモン」

フォック「……」

知ってるようだな

ゲーチス「ポケモンリーグを包み隠すように現れた城はイッシュが

変わることを表すシンボル」

ゲーチスはマントをヒラツとする

ゲーチス「その城の王は伝説のポケモンを従えチャンピオンを越えた最強トレーナー！しかも世界を良くしたいという熱い思いを胸に秘めている！これを英雄と呼ばずして誰を英雄と呼ぶのです？ここまで舞台装置が整えば人々の心はつかめる！いともたやすく私の……いやプラズマ団の望む世界にできるのです！」

フォック「……」

だけど……あいつは……

ゲーチス「私達だけがポケモンを使い、無力な人を支配するのです、長かったぞ！計画に悟られぬよう息を潜めていた……苦しみの日々も終わる……！」

ゲーチスは入口に向ける

ゲーチス「さあ進め！」

そして俺に向きなおす

ゲーチス「そして自分も英雄になれるのかたしかめればいいのです……！」

そう言って道をあける

フォック「……」

俺は無言で入った

……

そこは水が流れていた

その奥には

フォック「N!？」

Nは台座に座っていた

N「僕が望むのはポケモンだけの世界……ポケモンは人から解き放たれ、本来の力を取り戻す」

Nは台座から立って歩く

N「……さあ最後の戦いだ、僕には覚悟がある！友達のポケモン達を傷つけても信念を貫く！」

フォック「そこまでして……お前は孤独な世界にするつもりか……お前も人間、そうなるとお前まで影響するんだぞ……！」

孤独な世界は……いやだから

N「たしかに……君はポケモンであって僕は人間、でも僕も覚悟はできてる……ここまで来たからには君にもあるんだろう？あるなら僕の元に来て見せて欲しい！君の覚悟を……！」

やっぱり説得してもだめだ……でも！！

フォック「わかった…俺の覚悟は……」

俺は歩いていく、ゆっくりと、そしてNも歩いてきて

N「僕と戦うつもりでここまで君はやってきた………だのにレシラムは反応しないんだね」

そうレシラムはまだ反応していない

N「まだ君を英雄と認めていないのか、がっかりだね……僕は少しだけ君の事を気に入っていたのに、何度も戦ううちにポケモンを大事にするトレーナーかもと感じたのに！」

Nは俺の元に

N「……だけど僕の思い込みでしかなかった！やはりトレーナーが戦ってもわかり合うことなんてない！君にできることは2つ！勝ち目のない戦いを挑むか、それともここを立ち去りポケモンが人から解放された新しい世界を見守るか」

Nは合図する

N「おいで、ゼクロム！」

台座の壁からゼクロムが現れた

尻尾から何かがまわり、ゼクロムは電気を放出した

周りにも影響が出てきて、水はなくなった

フォック「くっ！」

その時バックの中のライトストーンがうごめいていた！？

フォック「！？」

N「君のライトストーンが……！いやレシラムが！」

ライトストーンは上に浮遊し、周りのオーラを取り込んだ

ライトストーンは周りのオーラを取り込んでそれを強烈なパワーとし、今……解き放つ！！

ライトストーンの周りに嵐がふき周りからバリアのようなものが出てきてそこから白きドラゴンが出てきた、そのドラゴンは目を覚ました

ドラゴンはそれと同時にバリアを吹き飛ばし、地面についた

尻尾が燃えるようにジョット機のような感じに白いドラゴンの周りに炎が燃え盛る、炎が収まり白き龍は咆哮する

そう……復活したのだ……

レシラムは

フォック「これが……レシラム……」

俺にはわかった

すごい威圧感とプレッシャーが

N「ゼクロムとレシラムは……元は一つの命……一匹のポケモンだった、正反対にしてまったく同じ存在、ゼクロムとレシラムも英雄と認めた人物の元に現れるポケモン……そうか、やはり君も、そのポケモンがなんと言っているか教えてあげるよ」

フォック「いや……その必要は無い……」

俺は聞こえた……レシラムはこう言っていた

レシラム『君と戦いたい……この私を仲間にしてみる』

N「そうか……君もポケモンの言葉わかるんだ……僕だけじゃなく……君も……」

フォック「レシラム……俺は……」

レシラムが声をかける

レシラム『君はたしかにポケモンだ……だが君には心の中では思いがある……なら私にそれをぶつけてみる……己の信念と共に……!』

レシラムは咆哮する

N「ここまでやってきた君が真実を求めたいのか、たしかめるつもりなんだね、僕も君の力を知りたい……さあ!レシラムを捕まえ、君の仲間にするんだ……!」

俺の中の思い

フォック「わかった…なら」

俺はレシラムに剣を構える

フォック「お前を捕まえる…!!俺と俺の仲間達で…!!」

レシラムとの戦いが始まる

レシラム（前書き）

俺はお前を捕まえる！！

レシラム

レシラム『行くぞ!!』

フォック「かかって来い!!」

今、レシラムとの戦いが始まった

レシラムから燃えさかるオーラが

レシラム『私の特性、ターボブレイズは特性に関係なく技を出す特性、私に生半可なものは通用しない』

でもタイプのにはドラゴンと後は炎だ

炎は問題だな

フォック「とぐるをまく!」

まずは補助で

レシラム『切り裂く!!』

フォック「もう一度とぐるをまく!」

再び攻撃・防御・命中をあげる

レシラム『じんつうりき神通力!!』

精神に攻撃か

フォック「ギガドレイン!!」

ウイアのギガドレインで体力を奪うが中々効果はない

フォック「戻って!」

俺はウイアを戻した

フォック「いくよ!! 光の剣雨」

光の剣をレシラムに降り注ぐ

レシラム『龍の息吹!!』

レシラムは龍の息吹で防いだ

さすがは伝説のポケモン

レシラム『クロスフレイム!!』

レシラムから強力な炎が周りに出てくる、そこから火球が現れ俺の頭の上にそこから急降下した

ドカーーーーーーン!!

フォック「うわあああああああああああああああああああ
あああっ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

フォック「ネツカ！」

ネツカ「マツハパンチ！」

マツハパンチでレシラムにダメージを与える

レシラム『ほう、中々のパンチだ、だがその程度では私は捕まらない』

たしかにそうだ

なら

フォック「ニトロチャージ！」

ニトロチャージでダメージを与える

レシラム『私に炎技はいまひとつだ』

フォック「それはどうかな？」

俺はニヤリとした

レシラム『なっ！？』

そう、ニトロチャージは素早さをあげる技、わざとそうしたのはニトロチャージで素早さをあげることだ

レシラム『やるな』

フォック「聖霊^{せいれい}の剣舞^{けんぶ}！」

素早い動きで斬りつける

レシラム『くっ！』

フォック「まだまだ！藍の流星！！」

青い隕石がレシラムに降り注ぐ

レシラム『ぐわあああああああああああああああああああ
あああっ！！！！！！！！！！』

フォック「今だ！スリープ！」

俺は杖を取り出してレシラムを眠らした

レシラム『なっ！何だ………』

レシラムは寝てしまった

フォック「ハイパーボール！！」

俺はボールを投げた

ボールは静かになり……

ネツカ「やった！！」

俺はレシラムをゲットした

決戦！！VSN（前書き）

レシラム…力を貸してくれ

決戦！！VS N

N「……そうか、真実を追い求める英雄にその力を貸すと言われている、レシラムが君の力を認め共に歩むことを決めたか……」

寝ているが俺はケアルガやエスナでレシラム、ハクランと名付けて回復させた

ハクラン『この者に力を貸した、その帽子の者よ、お前はなぜそのような世界を求める？』

ハクランがNに言ってきた

N「僕に話しかけてくるとは…僕はこの世界を変えるためだよ、ポケモンがトレーナーに縛られない世界をね」

Nは俺に向かう

N「さて……君のポケモンが傷ついているそんな相手に勝っても無意味だ」

俺のポケモン達を回復させたN

フォック「気遣いはあるようだな……」

Nはレシラムの自分の位置に戻る

N「僕には未来が見える！！絶対に勝つ！！」

今Nとの決戦が始まる

……

1体目はもちろんゼクロムだ

俺はレシラム、ハ克蘭で対抗する

ハ克蘭『久しいなゼクロムよ』

ハ克蘭はゼクロムに話す

ゼクロム『ふん、貴様の英雄はこのリザードンというポケモンだがそれで勝てるというのか？』

そうやってきたゼクロム

ハ克蘭『我々は元は一つ、英雄が分離して生まれたもの、それでも私はこの者を信じている…ポケモンと人間が協力すれば世界はよくなる』

ゼクロム『ふん！そんな世界など無理だ、人間は悪いことをしてポケモンを傷つけている、俺はこっちの方がいい』

するとハ克蘭は

ハ克蘭『なら決着をつけよう、私と…お前で』

その言葉にゼクロムは

ゼクロム『いいだろう…俺とお前…どっちが正しいのかを』

今伝説同士の戦いが始まった

ハ克蘭『クロスフレイム！！』

ゼクロム『クロスサンダー！！』

互いの大技が炸裂する

ここからは伝説ポケのセリフのみでお楽しみください

……

ゼクロム『やっぱり俺達の技じゃ通じないか』

ハ克蘭『たしかにな』

クロスフレイム、クロスサンダー

この二つの技は交互にやると威力も違う技

かなりハイレベルな戦いになりそうだ

ゼクロム『光の壁！！』

光の壁で特殊技を半減させる

ハ克蘭『龍の息吹！』

龍の息吹を食らわす

ゼクロム『ぐおっ!?!』

なんと麻痺した

ハ克蘭『たとえ光の壁を張っても状態異常になればこっちのものだ』

ゼクロム『くっ!』

ゼクロムは痺れてあまり動けない

ハ克蘭『神通力!』

ゼクロム『ギガインパクト!!!』

互いがボロボロになってきた

ハ克蘭『くっ…私の体力も限界だな…次で行くぞ!切り裂く!』

ゼクロム『ぐわっ!?!』

ギガインパクトの反動で動けずゼクロムは食らってしまった

ハ克蘭『切り裂く!』

ゼクロム『倒れてなるものか!!思念の頭突き!!!』

ゼクロムも負けじと思念の頭突きで反撃

互いの技ははじき返された

……

ハ克蘭『はあ…はあ…』

ゼクロム『ぜえ…ぜえ…』

お互い体力はもうない

ハ克蘭『クロスフレイム!!』

ゼクロム『クロスサンダー!!』

互いの技がお互いに直撃した

ハ克蘭『後は任せたぞ…フォック』

ゼクロム『後はお前等で決着つける』

お互いに倒れてしまった

……

N「まさかゼクロムが倒れるとはね…ならばアバゴーラ!」

出てきたのは甲羅があり、二足で立っているポケモン、アバゴーラだ

フォック「ワイア!やどりぎの種!」

N「やはりその戦術だね！高速s」

だが

フォック「甘い！リーフブレード！-」

ズバッ

リーフブレードで切り裂く

N「ここまでやるとは」

フォック「とぐろをまく！」

攻撃・防御・命中をあげる

フォック「ギガドレイン！！」

体力を奪ってアバゴラを倒した

……

3体目は二つのソフトクリームに氷のコーンのポケモン、バイバニラだ

フォック「戻って、ここは俺が行くぜ！」

俺が前に出る

N「なら吹雪！」

フォック「そうは行くか！熱風！！」

熱風と吹雪が相殺される

フォック「ドラゴニックバーン！！」

俺は口から大きな火球を吐いた

すると炎が爆発し燃え上がった

バイバニラは爆風に巻き込まれスズがついた状態で戦闘不能となった

……

N「くっ！アーケオス！」

4体目は始祖鳥のようなポケモン、アーケオスだ

フォック「ドリユ！」

俺はドリユを繰り出した

N「アクロバット！」

フォック「かわして爪とぎ！」

ドリユは回避し、すかさず爪を研いだ

N「ストーンエッジ！」

尖った岩がドリユに迫る

フォック「ショットドリル！」

腕のドリルを銃のように撃ってストーンエッジを打ち落とした

フォック「いwanaだれ！」

いwanaだれでアーケオスを岩で封じ、戦闘不能にした

……

5体目はギギギアル

フォック「地震！」

地震で一発蹴散らした

N「くっ！何か君をここまで！」

だがその時

フォック「これは！？」

なんと赤いたてがみで二足の黒い狐だった

フォック「ゾロアーク！」

正体はゾロアークだった

さらに最後に出てきたのは本物のギギギアルだった

フォック「なるほどな…でもこいつは本物なら…素早くない！！地震！！」

とどめの地震で倒した

……

N「………僕とゼクロムが敗れた、君の思い………それが僕達を上回ったか………レシラムとゼクロム………2匹がそれぞれ異なる英雄を選んだ………こんなこともあるのか、同じ時代に二人の英雄、理想を求める者、真実を求める者、共に正しいと言うのか？………わからない、異なる考えを否定するのではなく、異なる考えを受け入れることで世界は化学反応を起こす、これこそが………世界を変えるための数式………」

フォック「真実も理想もどっちも必要だ…数式なんかじゃない…みんな同じなんだ」

そう、真実も理想もどっちも必要だから

N「君はなぜポケモンなのに人間の味方をするんだ？」

唐突な質問だ

フォック「俺は…世界は誰のためにあるのか、そして必要なんだ、人間はポケモンとの絆もある、ポケモンも生き物、それにポケモン

にも人間と同じ感情がある…だからポケモンも人間が必要なんだ」

絆……

N「……」

そこに

ゲーチス「それでも私と同じハルモニアの名前を持つ人間なのか？
不甲斐無い（ふがいない）息子め」

フォック「ゲーチス！？」

それはゲーチスだった

息子って言ったが…まさか！？

ゲーチス「元々私^{わたくし}がNに理想を追い求めさせ、伝説のポケモンを現
代に蘇らせたのは『私の』プラズマ団に権威をつけるため！恐れた
みんなを操るため！」

フォック「なんだと！？」

まさか…Nを利用したのか！

ゲーチス「その点はよくやってくれました」

ゲーチスはNに近づく

ゲーチス「だが伝説のポケモンを従えた者同士が、信念を賭けて戦

い、自分が本物の英雄なのかたしかめたい……と、のたまったあげく、ただのトレーナーに敗れるとは、おろかにもほどがある！」

なんということを！

ゲーチス「つまるところ、ポケモンと育ったいびつで不完全な人間か……」

俺に近づく

ゲーチス「フォック！まさかあなたのようなポケモンであるトレーナーが伝説のポケモンに選ばれるとは、完全に計算外でしたよ、ですが私の目的は何も変わらない！ゆるがない！私が世界を完全に支配するため！何も知らない人間の心を操るため！Nにはプラズマ団の王様でいてもらいました、だがそのために事実を知るあなた……邪魔な者を取り除きましょう」

フォック「ゲーチス！！テメエ！！（怒）」

俺は怒った

そこに

トパック「支配だって？プラズマ団の目的はポケモンを解放するじやなかったのか」

トパック達とアデクさんだった

だが本意は

ゲーチスはゆつくり歩く

ゲーチス「あれはプラズマ団を作りあげるための嘘ですよ」

嘘…

ゲーチス「ポケモンのように便利なものを解き放ってどうするとい
うのです？たしかにポケモンを操ることで人間の可能性は広がる、
それは認めましょう、だからこそ！私だけがポケモンを使えればい
いのです」

アデク「……貴様、そんなくだらぬ考えで！（怒）」

アデクさんは怒りをあらわにする

ゲーチス「何とでも、さて、神と呼ばれようと所詮はポケモン、そ
いつが認めたところでフォック！あなたなどおそるにたらん、さ
あかかってきなさい！私はあなたの絶望する瞬間の顔が見たいのだ
！」

ゲーチスは勝負を挑みにしようとしたその時

N「フォック！！」

N…

ゲーチス「誰が何をしよう！私を止めることはできない！」

フォック「ゲーチス！！」

俺はついに怒りが頂点に達した

フォック「止めてやるさ……お前をな!!」(怒)

ついにゲーチスとの壮絶なバトルが今始まろうとしていた

元凶を止める！！VSゲーチス（前書き）

お前の野望を止めてやる！！

元凶を止める！！VSゲーチス

ゲーチス「いきなさい、デスカーン」

まずはデスカーンか

フォック「ハ克蘭…いくよ」

ハ克蘭『頼むフォック、あ奴には鉄槌が必要だなら』

うん

フォック「クロスフレイム！！」

クロスフレイムがデスカーンを直撃

ゲーチス「シャドーボールです！」

フォック「切り裂く！」

ハ克蘭は切り裂くで咄嗟にシャドーボールを切り裂いた

ゲーチス「中々やりますね」

フォック「龍の息吹！！」

龍の息吹がデスカーンに直撃し、戦闘不能にした

ゲーチス「戻りなさい！次はバッフロンです」

出てきたのはアフロをした牛のようなポケモン、バッフロンだ

フォック「戻って！ドリユ！いつて！」

俺はドリユを繰り出した

フォック「じならし！」

ゲーチス「こっちは地震です！」

地震で大ダメージを受けてしまったドリユ

フォック「戻れ！いつてくれ！メッパ」

メッパ『アイヤー！ワイにまかせ』

ゲーチス「アフロブレイク！」

アフロブレイクが炸裂し、メッパは戦闘不能に

メッパ『ワイの…出番…ガクッ』

メッパはガクッと言い倒れた

フォック「くっ！戻って！」

なら

フォック「きあいだま!!」

きあいだまでバツフロンを倒した

……

ゲーチス「いきなさい!サザンドラ!」

出てきたのは3つ首を持ったドラゴンポケモン、サザンドラだ

フォック「アック!」

俺はアックを繰り出した

ゲーチス「龍の波動!」

フォック「よk」

だがアックは龍の波動を食らって戦闘不能に

ゲーチス「私のサザンドラは強力、そんなので倒せませんよ」

厄介だ、ここは

フォック「龍の波動!!」

俺は龍の波動を吐く

ゲーチス「あなたでは無理です!龍の波動!!」

だが龍の波動がぶつかりあう

フォック「くっ！強い…」

俺もまだ戦えるが…

ゲーチス「さあこれでとどめです！k」

ドカツ！

サザンドラ『ぐわっ！』

ゲーチス「なっ！？」

何者かが止めた

それは

フォック「ゼクロム！？」

なんとゼクロムだった

ゼクロム『何してる！早くこいつをやっつける！』

フォック「でも！」

ゼクロム『俺も利用されたことしてだまってるわけじゃねえよ！』

ゼクロムの目が赤く光っていた

フォック「ありがとう…ケアルガ!!」

俺は手持ちのメンバーにケアルガさらに

フォック「アレイズ!!」

アレイズで手持ちのメンバーを全員復活させた

ゲーチス「なっ!?しまった!?!」

ゼクロム『光の壁!』

光の壁がはられた

フォック「セイントフォース!」

大きい光の光球がサザンドラに襲い掛かり、戦闘不能にした

ゲーチス「くっ!おのれ!」

まだまだ

ゲーチス「いきなさい!ガマゲロゲ!」

出てきたのはガマゲロゲだ、だけど

フォック「ウイア!ギガドレイン!」

ギガドレインで戦闘不能に

ゲーチス「なぜだ…！」

みんなの思いが絆となった

よし！

ゲーチス「いきなさい！シビルドン！」

フォック「頼んだよ！アック！」

アック『やられたらやり返してやる…！』

気合十分で出てきたアック

アック『剣の舞！』

アックは自分で剣の舞をした

アック『そして龍の舞…！』

さらに攻撃＋素早さをあげた

ゲーチス「アクロバット！」

フォック「受け止める！」

アックはシビルドンを受け止め

アック「ドラゴンクロー…！」

ドラゴンクローで斬りつける

ゲーチス「ならキリキザン!!」

キリキザンを繰り出すゲーチス

フォック「ネツカ!!」

ネツカ「うん!!」

ネツカを繰り出した俺

ゲーチス「この私が!!」

フォック「ネツカ!!フレアドライブ!!」

ネツカ「オラァ!!」

最大パワーのフレアドライブが炸裂し、キリキザンはぶっ飛ばされ
戦闘不能となった

ゲーチス「馬鹿な!!?私の支配する完璧な世界が!!」

俺は勝利した……

守られた世界（前書き）

俺達はゲーチスに勝った、そして……

守られた世界

ゲーチスは下がった

ゲーチス「……どういうことだ？この私はプラズマ団を作り上げた、完全な男なんだぞ！世界を変える完全な支配者だぞッ！？」

フォック「お前は完全な支配者じゃない、俺に負けた……あきらめろ！！」

俺は怒りが収まらない

アデク「さてNよ……今もポケモンと人は別れるべきだと考えるのか？」

Nは考える

ゲーチス「……ふはは！英雄になれぬ私が伝説のポケモンを手にする……そのためにだけに用意したのがそのN！！言ってみれば人の心を持たぬバケモノです、そんないびつな人間に話が通じると思うのですか」

トパツク「アデクさん、こいつの話聞いても面倒なだけだ！」

ムワリム「たしかに……Nはプラズマ団のボス」

ワユ「心はないみたいだし（汗）」

キルロイ「たしかに」

ミカヤ「……」

サザ「ミカヤ……」

アデク「そうだな…… 本当に哀れなものよ」

たしかに……でも本当に思うなら

アデク「Nよ……色々思うことがあるだろう、だがお前さんは決してゲーチスに操られ、理想を追い求めたのではなく、自分の考えで動いたのだ！だからこそ伝説のポケモンと出会うことができたではないか！」

たしかに……俺との戦いもあったから……

N「……だが僕に英雄の資格はない！」

だが俺は

フオック「そうか？伝説のポケモンと共にこれからどうするか……それが大事なんじゃないのか？」

だがNは首を横に振り

N「わかったようなことを、今までお互い信じるもののため争っていた、なのに！なぜ！」

そこにアデクさんが

アデク「Nよ……お互い理解し合えなくとも否定する理由にはならん！そもそも争った人間のどちらかだけが正しいのではない、それを考えてくれ」

そしてみんなはゲーチスを捕らえた

ゲーチス「なっ！？離せ！？」

トパック「おとなしくしろ！！」

ムワリム「あなたにはもう逃げ場はありません」

ワユ「そんじゃあたし達はゲーチスの方なんとかするからダンナはNの事お願い」

みんなはゲーチスを連行した

Nは何か決断したように俺に向かっていく

N「……君に話したいことがある」

フォック「なんだ……」

俺はNについていく

N「君と初めて出会ったカラクサタウンのことだ、君のポケモンから聞こえてきた声が僕には衝撃だった……なぜならあのポケモンは君の事を好きと言っていた……」

ネツカ「そうだよ！！」

ネツカが出てくる

ネツカ「みんなフォックの事を好きなんだ…俺も…みんなも…ポケモンでも優しくて…みんなの事を思ってくれる大事な人なんだよ、フォックは」

N「そうか…」

ネツカはさらに話す

ネツカ「それにみんな一緒にいたいと思ってるし、Nも俺達の言葉わかるだろ？」

N「そうだね……でも僕には理解できなかった、世界に人の事を好きなポケモンがいるだなんて、それまでそんなポケモンを僕は知らなかったからね……それから旅を続けるほどに気持ちは揺らいでいった……心を通い合わせ、助け合う、ポケモンと人ばかりだったから、だからこそ、自分が信じていたものが何かたしかめるため君と戦いたい……同じ英雄として向き合いたいそう願ったが……」

フォック「わかってきたのか？」

だがNは首を横に振り

N「いや……ポケモンのことしか……いやそのポケモンの事すら理解していなかった僕が……多くのポケモンと出会い、仲間に囲まれていた君に叶うはずなかった……そしてわからなかった……」

ゼクロムが開けた穴の前に

N「……さてチャンピオンはこんな僕を許してくれたが……僕はどうすべきかは、僕自身が決めることさ……」

Nはゼクロムを出した

N「フォック！！君も……夢を持て！」

フォック「！？」

Nに似合わない言葉が出てきた

フォック「夢を…持て…」

N「うん、そのために信じる道を行け！そしていつかかならず夢を実現するんだ！！」

あたりが静まり

N「それじゃ……サヨナラ……！」

Nはゼクロムと共に飛んでいった

ゼクロム『俺はこいつと共に行く…じゃあな！！』

ゼクロムとNは飛んでいった

俺は見守り

フォック「ありがとな……N……いや……我がライバル……」

エピソード

フォック「あゝやっと平和になってよかった」

ウィア「本当にそうだね」

あれから数ヶ月

俺達はそれぞれ帰っていった

ハ克蘭「それにしてもここはいい、私もいいのか？伝説だが？」

フォック「いいよ、それにこのまま狙われるより一緒にいたほうが
いいと思ってね」

伝説系は狙われるから一緒の方がいいのだ

ネッカ「フォック、アデクさんから手紙来たぜ！！」

ネッカが手紙を持ってきた

フォック「ありがとう」

……

俺は早速アデクさんからの手紙を読んだ

元気か？プラズマ団の件ごろう、お前さんもゆっくりしているよ
うだが実は国際警察のハンサムが来ていてなお前さんに頼みがある、
実は七賢人はそれぞれバラバラでまだ捕まっていないんだ、ゲーチ
スは逮捕したがこのままではやばいでな、そこでフォックに頼みた
い、七賢人を捕まえてくれ、お前さんに託す、それじゃあ

アデク

七賢人…捕まってなかったか…

しょうがない……

ウィア「どうする？フォック？」

ウィアがたずねる

フォック「そんじゃ受けよう、どうせだから色々と見てまわってお
いておこう」

ハ克蘭「なら私も行くか、私の力が必要らしいしな」

こうして俺達は旅立っていく

夢はまだないけど……

いつか……

ありがとな……

E
N
D

エピローグ（後書き）

あゝやっと完結

ウィア「続編あるのかな？」

あればね（汗）

ハ克蘭「私の活躍があまりないのは残念だ」

まあまあ（汗）赤き龍はこれで完結です、また何処かで出るかもしれません

それでは！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9843/>

赤き龍の異世界の旅

2010年12月19日05時48分発行